
遊戯王 罪を背負いし男と蒼き少女

春夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 罪を背負いし男と蒼き少女

【Nコード】

N8240S

【作者名】

春夜

【あらすじ】

神炎皇ウリアを所持する主人公、水城 夜一が妹の水城 葵、親友の春風 ゆりなの2人を巻き込んでデュエルするドタバタラブコメディ(?)

この作品は遊戯王のオリジナルの世界観。原作キャラは出さない方針です。

小説は初挑戦になるので更新が不定期だったり読みづらいなどの事があると思いますがよろしく願います。

8 / 26

挿絵を書き始めました。

クオリティは低めですが、これからちよくちよく追加していきたい
と思います。

第一話 さあ、デュエルしようぜ！（前書き）

初投稿です。なのでミスや見ずらい事が多々あるかと思えますので指摘等ありましたらよろしくお願いします。

作品は遊戯王の創作、オリカは出ない方針。原作キャラは出ないと思います

第一話 さあ、デュエルしようぜ！

「よし、デュエルモンスターズをやるう」

「……へ？」

いつもと変わらない土曜日。

いきなり妹の部屋に入ってくるなり、どこぞのミッションリーダーのような事を言ってきた俺、水城^{すいじょう} 夜一^{やいち}にテレビでゲームをして遊んでいた少女2人は間抜けな声しか出なかった。

「……え、えと？ どうしたの？ 兄さん」

俺を兄さんと呼ぶ小柄な少女は、また兄が何か仕出かすのかと戸惑いながら聞いてきた。

海のように綺麗な蒼い瞳、澄んだ水色の髪を髪留めでツインテールに纏めているこの少女の名は水城 葵^{あおい}。俺の可愛い自慢の妹だ。

「ん？ 知らないのかデュエルモンスターズ、カードゲームさ」

「それくらい知ってるよ！？」

「ありや、まじか」

「バカにするなあ！」

葵は俺の意地悪に怒ってポカポカとパンチしてきた。痛くはないから可愛いだけで自然と笑ってしまう。

「私、バカにされたうえに笑われた!？」

「ははっ、すまんすまん」

そっぴい俺は葵の髪をワシヤワシヤと撫でてやる。

コイツは本当にからかうと面白い。なので俺はつい意地悪を言うてしまうな。

「うー……ノノノ」

ちなみにデュエルモンスターズと言えば有名なカードゲームだ。

よくニュースで大会とか放送してるしデュエルアカデミアみたいなデュエルモンスターズのための学校だってある。知らないやつはまずいないだろう。

「にやはは んで夜一さん、どゆことなのかな？」

俺達のやり取りに笑いながら話しかけてきた少女は春風^{はるかぜ} ゆりな。葵の親友だ。

先ほどの話に興味を示したのかポニーテールで纏めた緑色の髪をふるふると揺らし、藍色の瞳をキラキラさせながら質問してくる。

「いやなに、近くのカードショップで非公式大会があつてな？ これを機に葵もデュエルモンスターズを始めてみないかなと」

「大会！？ ボク、久しぶりに出たいっ 葵はデュエルモンスターズのルールわかる？」

「いや、ちよつとしかわからない。だから大会は無理っ！」

葵はデュエルモンスターズのルールを詳しくは知らなかったようだ。いきなり大会に行こうと言われても流石に無理だったらしく拒否されてしまう。

「うにゃ？ 楽しそうじゃん葵、目指せ優勝っ だよ」

「ルールすら知らないのに?!」

しかしゆりなはそんな葵に対して大会に出ようといってくれる。

ゆりなも葵と一緒にいきたいのだろうな。

「大丈夫大丈夫、ルールなら今から俺達が教えてやるから、そうすりゃ問題ないだろ？」

「うー……でも私、カードを持ってないよ？」

「その点は問題ない、葵のデッキは俺が昨日用意しておいたからな」

そういつて俺は胸のポケットから昨日用意したカードが入っているデッキケースを取り出し葵に渡してやる。

「ふえ？ これ、私にくれるの？」

「ああ、大事に使ってくれよな」

「あ、ありがと……／／／」

葵は嬉しそうにケースからカードを取り出して見始める。

「あ、可愛い……」

すると、そういつて葵はモンスターカードをじっと見ている。

「気に入ってくれたか？」

「うんっ」

「よかった、お前の為に作った物だからな」

思ったことを口にする。すると気のせいか葵の顔が少し赤くなつた気がした。

「や、やり始めるのはいいんだけど、いきなり大会は無理があるんじゃないの？」

「大丈夫さ、あそこは馴れ合いの大会だからな。行ってみると結構楽しいぜ？」

「そなの？ 葵、一緒にいこうよー！」

「それじゃ……頑張ってみようかな？」

「おお、サンキュー葵っ！ そんじゃ早速教えるとするか」

「それじゃざつとルールを教えるね」

「はい」

〈30分後〉

「うにゃ、こんなもんかな？」

「ふえ」

俺のゆりなによる簡単なルール説明に、葵は少し疲れたのか息をつきながら机に突っ伏す。

「お疲れ、葵」

「にゃはは」

大体のルールは覚えてくれたので、後は実際にやりながらなれていこうということになった。

「んじゃ早速デュエルしてみるか！ 葵、対戦相手はゆりなと俺どっちが」

「ゆりな」

「即答かよー！」

迷いもしなかったよ葵の奴……流石に俺でも傷つくぞ？

「だって兄さん、ゲームやるといつも手加減無しなんだもんー！」

「確かに！」

ゆりなまで同意してきた。そりゃ手加減したら相手に失礼だと思
うからな。

「む……まあゆりななら教えるのも得意だし適材適所か」

「……それに兄さんには横で教えて欲しいし」

「ん？ 何か言ったか？」

「な、何にもっ／＼／」

「そうか？それじゃゆりな、俺は葵の横でデッキの回し方を教えな
がらやらせてもらうな」

「いいよ」

「うゝ……」

何か知らんが葵が不満げに唸っていた。ルールは覚えたのに初心
者扱いされたのが嫌だったのか？

「えゝと……それじゃあデュエルシートでやるっか？ デュエルデ

ィスクを使うために外出るのは面倒だし、それに教えづらいと思う」

「そうだな、んじゃ先行はいつもは早い者勝ちだが今回は見本も兼
ねてゆりなが先行な」

「了解っ！ じゃあ葵デッキから5枚ドロ―してね」

「う、うん」

葵は緊張しながら5枚引いて手札にする。

「それじゃ準備はいいな？ デュエルスタートだ！」

第二話 葵、初めてのデュエル

「ボクのターン、ドロー」

ゆりな 手札5 6

「先攻は攻撃できないからボクはモンスターをセット、リバーズを2枚セットしてターンエンド。これで次は葵のターンだよ」

ゆりな

LP：4000 手札：3枚

??? (裏守備)

伏せ×2

「わ、私のターン。ドロー！」

葵 手札5 6

「……え〜と？」

葵はドローし手札を見る。しかしどうすればいいのかわからないらしく混乱してしまう。ルールを知ったばかりだし、まあそうなるだろうな。

「どれ、見せてみる」

「うん」

助けてやるため手札を見ると中々いい引きをしていた。コイツらは自分達を使いこなそうと一生懸命な葵に応えてくれたみたいだな。「そうだな……まずはコイツを墓地に捨ててコイツを自分のフィールドに特殊召喚してみるか」

「う、うん。じゃあ手札の悪魂邪苦止を捨てて鬼ガエルを出すね」

葵

悪魂邪苦止 墓地

鬼ガエル（攻1000）

鬼ガエルはこのデッキではデッキ圧縮と墓地肥やし、他にコンボのパーツなどになるためこのデッキではかなり重要な役割を担うモンスターだ。

「【ガエル】か。葵、カエル好きだよな」

「うん、可愛いんだもん」

ゆりなの言葉にうなずくと葵は嬉しそうに笑う。本当に好きなだな……。俺には理解できそうにないが。

「ほれ葵、鬼ガエルの誘発効果だ。この場合は召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動できる」

「あ、うん。デッキからレベル2以下で水族・水属性モンスターを一枚墓地に送る、だね。えと……」

「そうだな……粹カエル^{いき}辺りがいいと思うぞ」

粹カエルは墓地に落としておけば初めは戦線の維持に、後半はこいつを使いこのデッキの切り札の発動条件を満たすなどができる。

「わかった、粹カエルを送るね」

葵

粹カエル 墓地

「そんで鬼ガエルは起動効果で1ターンに1度、自分の場のモンスターを手札に戻せる。そうすりゃ鬼ガエル以外のガエルと名のつくモンスターはこのターン通常召喚とは別に一度だけ召喚できるようになるんだ」

「へ、ガエルって面白い動きするね……って、夜一さんがイツキに教えるから葵が目を回してる!?!」

「ひゃうくく!?」

「うお?! すまん葵、大丈夫か?」

「う、うんっ……えと、それじゃ鬼ガエルの効果で鬼ガエルを手札に戻すね」

葵

鬼ガエル 手札

葵は自分の意思で手札に鬼ガエルを戻すと手札のカードを確認し自分で考えはじめた。俺はとりあえず見守るとするかな。

「うん、未知ガエルを鬼ガエルの効果で召喚しよつかない?」

葵

未知ガエル(攻1200)

「そして……フィールド魔法、湿地草原をだすね。レベル2以下・水族・水属性モンスターは攻撃力が1200ポイントアップするよ」

葵

- 湿地草原 -

未知ガエル(攻1200 2400)

「ちなみに未知ガエルは貫通効果がある。守備モンスターに攻撃した場合、攻撃力が守備力を超えてればその数値だけ相手にダメージを与えられる」

そして湿地草原はこのデッキに入っているモンスターの大半を戦闘面でサポートしてくれる。今のような場合なら簡単に攻撃力を2400も持つ貫通モンスターを作れる。

「ふむふむ……それじゃ未知ガエルでゆりなのセットモンスターに攻撃」

「うにゃ…モンスターは素早いビックハムスター、守備力は1800だから600ダメージもらうね。それじゃビックハムスターのリバス効果でデッキからレベル3以下の獣族モンスターを自分の場にセットするね。マイン・モールをセット」

ゆりな LP：4000 3400

素早いビックハムスター 破壊

マインモール セット

「リバス…ええつと」

「リバス効果、裏側表示から表側表示になった時発動するモンスター効果だ。基本裏側のため何かわからないから注意が必要だな」

「了解。それじゃメイン2でモンスターをセット、カードをセットしてエンド」

「それじゃリバスカード、サイクロン発動っ！ セットカードを破壊だっ」

「ふえ？ えーと、これはピンクのカードだけど今使えるんだっけ？」

「罫カードな。今は伏せたターンだから使えないぞ」

「そだった。それじゃフロッグ・バリア、破壊だよ」

葵

フロッグバリア 破壊

「なにそれ？」

「ガエル専用の聖なるバリアだな」

「危なっ！」

「そうなの？」

「まあ攻撃時に攻撃表示モンスターが全て破壊されちゃうわけだしな」

葵

LP：4000 手札：2枚

- 湿地草原 -

未知ガエル（攻1200）

????（裏守備）

伏せ×0

ゆりな

LP：3400 手札：3枚

マイン・モール（裏守備）

伏せ×1

「ボクのターン！ ドロー！」

ゆりな 手札3 4

「お 手札の獣族モンスター、キーマウスを墓地に送って虚栄の大猿を攻撃表示で特殊召喚っ！」

ゆりな

キーマウス 墓地

虚栄の大猿（攻1200）

「それでマイン・モールを反転召喚、レベル3のマインモールにレベル5の虚栄の大猿をチューニング！」

3 + 5 = 8

「天駆ける雷よ、漆黒の大气を貫き、その雷撃で大地を燃やせ！」

シンクロ召喚！ ライトニング・トライコーン！」

ゆりな

ライトニング・トライコーン（攻2800）

「うわぁ！ 何かカツコイイー！」

「今のはシンクロ召喚だ。チューナーモンスターと例外もあるが基本チューナー以外のモンスターのレベルを合わせてエクストラデッキから出せる」

現環境ではエクストラデッキに大体は入っているカードだと思っ
な。

氷結界の龍やスターダスト、ブラックローズなど強力な効果が多い
うえ、融合などに比べてチューナーモンスターは使いやすいし。

「いいな〜…カエルのチューナーは無いの？」

「……それが無いんだ。しかも葵のデッキは湿地草原結束型だから
水族のチューナーしか使えないし、水族のシンクロモンスターが無
いんだ。だからシンクロするなら作り直す必要があるな」

「ん〜、それじゃいいかな」

「いいのか？ 使いたかったら」

「いいの。だってコレは兄さんが私の為に作ってくれた物でしょ？」
そっつい葵は笑った。俺は何も言えなくなってしまった。

「え〜と……お楽しみんどこ悪いんだけど続けていいかな〜？」

「ふえ！？ / / /」

「い、いいぞ？」

「……ふんだ、夜一さんのばか。シンクロの材料になったマイン・
モールの効果で一枚ドロ〜。そしてロックキャットを召喚っ。効果
で墓地のレベル1の獣族を守備表示で特殊召喚するよ！ キーマウ
スを出すね」

ゆりな

ロックキャット（攻1200）
キーマウス（守100）

「なんか可愛いのがいっぱい出てきたっ」

「すげえ展開してんな……」

「まだまだ。手札から簡易融合を発動っ、ライフを1000ポイント払ってエクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを出すよ。フュージョニストを特殊召喚っ！」

ゆりな LP：3400 2400

フュージョニスト（攻900）

「レベル3のロックキャットとレベル3のフュージョニストにレベル1のキーマウスをチューニング！」

3 + 3 + 1 = 7

「天駆ける雷よ、雲海を切り裂き、その蹄を地上に穿て！ シンク口召喚！ ボルテック・バイコーン！」

ゆりな

ボルテック・バイコーン（攻2500）

「ルール教えるためのデュエルなのにシンクロモンスターを2体も出しやがった……」

ゆりな全然手加減してないか？ 葵も攻撃力が高いモンスターを出され驚いてるし……

「にゃっはっは。リバースカード、幻獣の角を発動！ 自分の場の獣族・鳥獣族・獣戦士族モンスター一体の攻撃力を800ポイントアップするよ！ ボルテック・バイコーンに装備っ」

ゆりな

ボルテック・バイコーン（攻2500 3300）

十幻獣の角（ボルテック・バイコーン）

「それじゃボルテック・バイコーンで未知ガエルを攻撃っ！」

葵 LP：4000 3100

未知ガエル 破壊

「戦闘破壊したから幻獣の角の効果で一枚ドロして、ライトニング・トライコーンでセットモンスターに攻撃」

「容赦ねえな……」

「うっ……裏ガエル、破壊だよ」

「素晴らしい葵は裏ガエルを墓地に……って

「葵！ 裏ガエルはリバースした時に効果が発動できる」

「ふえ？ ……でもゆりなのビッグハムスターみたいに“リバース：

”って書いてないけど……」

葵は俺の言葉を聞いて裏ガエルのテキストを見ながら疑問を口にする。

「まあな。だがそいつはリバース時に自分の場のガエルと名のついたモンスターの数だけ相手のフィールドのモンスターを手札にバウンスできる効果を持つてんだ」

「んにあっ?!」

「バウンス？」

「手札やデッキに戻すことさ。だから裏ガエルの効果でゆりなのモンスターを場から手札に戻すことができる。葵の場のガエルと名のつくモンスターは裏ガエル1体だから1体まで戻せるぞ」

「へー、それじゃ攻撃力の高いボルテック・バイコーンで」

「ふにゃ……おかえり」

葵

裏ガエル 破壊

ゆりな

ポルテック・バイコーン エクストラ

「それじゃカードを2枚セットしてエンドだよ」

ゆりな

LP：2400 手札：0枚

ライティング・トライコーン（攻2800）

伏せ×2

葵

LP：3100 手札：2枚

- 湿地草原 -

伏せ×0

何とかモンスターを減らしたがまずいな。

葵の場にモンスターはいない。手札にこの状況を打開するカードは無いし……次のドローにかけるしかない。

「わ、私のターン。ドロー！」

葵 手札2 3

引いたカードは……きた。逆転さえできるこのデッキの切り札。

「う……出せないや」

「いいや葵、諦めるな。まだ勝機はある」

「え？」

「ふにゃ?!」

「まずは墓地の未知ガエルを除外して粹カエルを特殊召喚だ」
「う、うん」

葵

粹カエル（守2000）

「それで手札のこのカードを使うんだ」

「うん。手札から魔法カード、地獄暴走召喚を発動ね」

「このカードは相手の場に表側でモンスターが存在し、自分のフィールドに攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に発動できる。自分はそのモンスターを、相手は自分のフィールドの表側表示モンスターを一体選択し、手札・デッキ・墓地から同名のモンスターを可能な限り特殊召喚する」

「ボクはシンクロモンスターしかいないから出せないけど……粹カエルをいっぱい出してどするの？壁にするだけになりそうだけど」
「粹カエルはフィールドにいる限り「デスガエル」として扱うんだ。だから出てくるのは……」

葵

デスガエル（攻1900）

デスガエル（攻1900）

デスガエル（攻1900）

「わ、カエルがいっぱい出てきた」

「ゆりな、なんか発動するか？」

「うにゃ、無いよ（攻撃力1900のモンスターを3体……一族の結束かな？でもこっちの伏せたカードは聖なるバリアにくず鉄のかかし……くるならこいや）」

「それじゃ葵、最後にこの魔法^{マジック}を使うんだ」

「う、うん。死の合唱を出すね」

「……死の合唱？ 何それ？」

「葵、読んでみな」

「えとね……自分のフィールド上にデスガエルが3体存在する場合
発動出来て相手のフィールド上のカードを、全て破壊」

「そんなあああ？！」

ゆりな

ライトニング・トライコーン 破壊

聖なるバリア ミラーフォース 破壊

くず鉄のかかし 破壊

「セットカードは聖なるバリアにくず鉄……なら防げなかったな」

「うゝ、まさか全部破壊されるなんてえ……」

「よっし葵、もう何も邪魔するものはない！ アタックだっ！」

「う、うんっ！ みんなで攻撃っっ」

「うう……ボクの負けだよ」

ゆりな LP：2400 0

「うにやゝ負けちゃったよう！」

「まあ、俺が後ろから教えてたから何とも言えないんだがな……ど
うだ葵、楽しかっただろ？」

「うん！ とつてもっ」

初めてやったデュエルの感想を聞くと葵は嬉しそうに笑ってくれ
た。これだけでやって良かったと思えるな。

「葵ゝ、もっかいボクとデュエルしよゝ！」

ゆりなは再戦をしようとする。悔しいというより楽しかったから
みたいだな。

「ふえ？ えと、じゃあ……」

「……水を差す様で悪いがゆりな、もう遅いから帰らないと不味い

ぞ？」

「ふえ？ うわ、もうこんな時間っ！ ゆりな帰らないと」

時計を見るともう午後6時半。

今の時期、日が落ちるのが早いからもう外は暗いはずだ。

「うにゃ〜……それじゃ葵、明日デュエルしょ？ 日曜なんだしっ」

「あ、いいよ！ 兄さんは明日大丈夫？」

葵は俺も誘ってきた。女子同士の遊びに兄を誘うのはどうかと思うが……

「明日？ 明日は……あ〜」

「何か用事があるの？」

「もしかして……デートとか」

……ゆりな。冗談を言っただつもりなのだろうが、一人冗談として受け取ってくれなかった奴がいる。

「む……そうなの？ 兄さん」

「違う！ それは断じて無いからそんな怖い目で見ろな！！」

「それじゃ何なの！？」

葵は問いただすように聞いてくる。

こうなったら正直に言うまで開放してはくれないだろうな……てかゆりな、面白そうに見てるな！

「……大会だ」

「……へ？」

二人は一瞬固まった……まあそういう反応だろうな。今日言われたはずなのに急すぎる。

「……に、兄さん？もしかして今日言ってたデュエルモンスターズなの？」

「そうだ」

「ふえええ？ いきなりすぎるよ！？」

「ホントだよ！」

今の状況を把握し、二人で俺を非難してくる。正直俺が悪いため何ともいえない。

「大体ボク、ナチュル・ビーストを買わないといけないのにつー！」

「何か怒る方向性が違う!?」

ゆりなの天然ぶりに俺も葵もビツクリだ……ん?まてよ。

「ビーストなら俺要らないからやるよ」

「やた〜! んじゃ明日は大丈夫!」

よしつ、これでゆりなの参加は確定だ。問題は葵をどう説得するか、だな。

「私はまだ不安だよ! プレイとか曖昧だし……」

うん、そうだろうな。多分葵はまだ1、2週間は時間があると思つてたのだろう。

「まあそれは今日ぶつ通して俺とデュエルすりゃ何とかなるさ」

「ううー……手加減してくれる?」

葵はかなり悩んだ後、そういつて上目遣いで見てくる。良かった、こんな状況でも出てくれるらしい。

「ああ、安心しろい」

すると横にいたゆりながそつと耳打ちしてくる。

「……あのデッキは使っちゃダメだよ、夜一さん?」

「ああ、わかつてるさ」

あれは初心者に使うようなもんじゃないからな。ゆりなですらかなり嫌がるようなデッキだ。

「?」

「ならいつか、それじゃボクは帰るねっ」

それだけ確認すると安心したのかゆりなは急いで帰る支度をする。

「まてまて、流石に女子一人じゃ心配だ。送つてく」

「うにゃ、いいの?葵一人でお留守番になっちゃうよ?」

む、そう言われてみるとだんだん心配になってくる。

「あはは、私は大丈夫だよ。心配性だなあ」

しかしそんな俺に葵は苦笑しながら心配ないという。

……そうだよな、俺の考えすぎだ。

「よし。それじゃ行くぞ、ゆりな」

「ほいにゃ！　じゃあね葵、また明日だよっ」

「気をつけてね？　バイバイッ！」

葵に見送られながら俺達は外に出た。

俺達は何を話すわけでもなく歩き、しばらくしてゆりなが一人で暮らしているアパートに着いた。

「そっだ、ほれ」

「あ、ナチュル・ビースト！　ありがとっ」

本当に欲しかったらしくゆりなは嬉しそうだな。まあ俺が持つてもどうせ使わないから良かった。

「……それにしても以外だったね、今日は簡単に夜一さんを行かせるなんて。葵、いつもは「だめ！　兄さんは私のっ！」とか言うのに、そっいいゆりなは頭を傾げる。お前の中で葵はどう写っているんだよ……」

「おいおい……ただお前の事が心配だったんだろ？　今日はいつもより遅いし」

「むう、これは葵も苦労するな」

「へ？」

「ま、いつか それじゃ明日楽しみにしてるよ！　鈍感さん」

俺の疑問には答えず、それだけ言うつとゆりなは笑いながら走って行った。

「ああ、またな」

遠ざかっていくその背中を見届け、俺は帰路についた。

「ただいま、あゝ腹減……っ！」

家に帰ると鼻がツンとするような悪臭がし、たまらず息を止める。なんだ？　火事ではないし……もしや

「あ、おかえりなさい兄さん。すぐにご飯の用意が出来るからリビングで待ってて」

「んな……」

キッチンから出てきた葵に俺は愕然とした……色々と突っ込みた
いことがある。

とりあえず何故こいつはいつもゴム手袋にマスク、まるで清掃業
者のような格好で料理をしているのか？そしてこの悪臭の発生源は
果たして食い物なのか……

「……すまん葵。俺は帰りに食ってきて腹減ってないから
「嘘だっ！」

「そんなことは断じてない！……ぞぞ？」

「でもでもっ、兄さんさつき腹減ったって……今日のお礼にお腹
空かして帰ってくると思っ作つたのに」

「そっいい葵は悲しそうな顔をする。

くう……そんな顔をしないでくれ、罪悪感が……。大体葵の料理
って言ったら思い出たくもないものばかりなんだもんなあ。

「成る程、だから俺を送り出したんだな……ちなみに何を作つたん
だ？」

「……カレー」

「この悪臭の発生源がああ失敗の少ないはずのカレー、だと？」

「流石に兄さんビツクリだぜ」

「うっ」

「……そう唸るな、ちゃんと食うから」

「ほ、本当にっ！？」

「ああ」

「そっいつて俺はダイニングに向かう。」

葵が折角作ってくれたんだ、捨てるわけにはいかない……大丈夫
！なんだかんだで毎回食って耐性がついている俺ならこの程度で倒
れることはない、はず。

「ど、どうぞ」

緊張しているのか葵はカレー（と呼んでいいのか？）をおずおず
と出してきた。

「サンキューな。いただき、ます……はむ。　っ！」

俺は覚悟を決めて前にあるカレーを一口食べる。が……

「に、兄さん？どう？」

「」

「返事がない、ただの屍のよう……って！ 兄さん？ 兄さん?!」

……その後しばらくして腹を壊した俺は葵に泣きながら看病され何とか回復した。危なかった、今回はまじでやばかった。

「……んじゃ遅くなったが飯にするか」

「ぐすん……」

「そんなに落ち込むなって……可愛い顔が台無しだぞ？ 今度俺が料理教えてやるから、な？」

ちなみにカレーもどきは食材に謝って捨てさせてもらった。あのまま置いておくと葵が自分のせいだと食ってしまいそうだったしな。

「ほ、本当？ 約束だよ!？」

「ああ、約束だ」

それに葵の料理の腕がこのままだといつか不本意に殺されてしまいうそだしな。

「……兄さん？ 今なんか失礼なこと考えてなかった？」

「気のせいさ」

第三話 とある朝の出来事

「……さん……きて、起……てよお……！」

ん……何だ？ 誰かが俺の横で何か言ってるな……葵？ というかこの家には俺と葵しかいないんだ。葵だろう。

「むう……なにをするんだ葵……、きょうは日曜じゃねえか……ゆつくりさせてくれ……」

「うにゃ！？ ボクだよ！ ……反応無し。こうなったらビツクリさせてみよつと」

む？ 何かゴソゴソと俺のベッドの中に入ってきたな……また葵が潜ってきたのか？ まあいい、寒いし抱いて寝るとしよう。

「ひゃう！？ や、夜一さん？」

「……温かいな」

「~~~~！？ / / /」

「ゆりな？ 兄さんは起きた？」

あれ？ 今遠くから葵の声がした。……んじゃさっきからいたのは？

「んひゃうつ！？ / / /」

「……？ なんか柔らかい物が……」

「兄さん？ ……んななななっ！？ に、兄さん……何をしている、のっ……」

「がはっ！？」

「ふ、ふにゃ~~~~ / / /」

葵は怒って部屋から出ていく音がした。俺は訳も分からず頭部に投げられた辞書によって意識を失った。

「なー葵、機嫌なおしてくれよ……」

「むう」

「あれはボクがふざけただけなんだよう」

俺達は今朝食を食べながら前で唸っている葵の機嫌をとっている。

「大体何があったかよくわからねえよ……俺が何をしたんだ？」

「そ、それは……ノノ」

「何故顔を赤らめる!？」

「うう……やっぱり胸？ 胸なの?!」

「まじで何があった？」

なんか面倒な話になってきたな……話題を替える事にするか。

「……ところでゆりなは何であんな朝早くから家に来てたんだ？」

とりあえずさつきから疑問に思っていたので聞いてみるか。

「えとね……今日大会でしょ？ でもボク時間とかわからなかった

し」

「あ……そついや今日は大会か」

すっかり忘れていた。昨日遅くまでデュエルして疲れたからかな

……

「え、兄さん忘れてたの!？」

ビックリした葵はテールから身を乗り出してくる。一緒に徹夜

したはずなのに元気だな。

「……そんなことはないぞ？」

「凶星みたいだね」

「うー、私は楽しみにしてるのに……」

そついい葵はしゅん、と落ち込む。うぐ、だからそんな顔される

と罪悪感が……

「すまんすまん……ゆりなも悪いな、言い忘れてて」

「うにやにや、大丈夫だよ」

「そうか」

ふと時計を見ると時間は11時半、大会は1時からだからまだ余

裕あるな。

「ところで昨日葵と夜一さんはデュエルしたんだよね？」

するとゆりなが昨晚のデュエル話を聞いてきた。

「ああ」

「うん、やったね……」

昨日のデュエルを思い出したのか葵が何処か遠い目をしている。

「……何使ったの？」

「ん？【デーモン】」

「酷かったよっ」

「どこが、ただのビートダウンだぜ？」

この俺にはかなり珍しいといってもいい。俺は基本メタかコントロールデッキを使うからな。

「黄泉ガエルは帰ってこれなくなるし、裏ガエルは効果が無効になるし！」

「フィールド魔法は張り替え、死の合唱してもジェノサイドキングを蘇生して邪魔し、融合召喚したガエルサンデスは奪ったり、な」

「それは酷い……というか夜一さんデーモンなんて作ってたの？」

「即興でな」

「私みじめ!？」

「……よし！夜一さんデュエルしよう」

そういつてゆりなはポーチからデッキとデュエルシートを取り出す。

「どうしたいきなり」

「いや、まだ時間あるしさっきの話聞いてたらやりたくなくなってきちゃった……それにそろそろ主人公がデュエルする描写がないとマズイかなって」

「心遣いは嬉しいがメタ発言はやめろ」

「？」

「にやはは、いいでしょデュエルしよう？」

「……ったく、仕方ねえな」

自分の持つてるデッキからなにを使うか考えてみる。ワンキルでいくかな……

「やめてっ!?! 絶対1ターンでパーツが揃うよ!」

「心を読むな! …… んじゃメインデッキでいくか」

「……へ?」

「ん? どんなデッキなの?」

俺のメインデッキが分からない葵は聞いてくる。

「なあに、見てりゃわかるさ」

ゆりなに文句を言われる前にそそくさと準備を済ませる。

「ちょ、まっ …!」

「いいじゃねえか。それじゃ……デュエルスタートだ!」

「先行は俺が貰うな? ドロー!」

夜一 手札5 6

ざっと手札を確認する。これなら……

「ふむ……リバーズカードを4枚セットしエンド」

夜一 LP:4000

手札 2枚

伏せ×4

「やっぱりそのデッキかー!」

「伏せカード4枚? 手札事故?」

まだよくわからない葵は手札事故と勘違いする、まあ普通のデッキならそうだが……

「いや、これで問題ない。むしろ好スタートだ」

「うっ……ボクのターン、ドロー!」

ゆりな 手札5 6

「手札の魔轟神獣チャワの効果発動つ、手札のチャワを捨てて特殊召喚だよ」

《魔轟神獣チャワ》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 獣族 / 攻 2000 / 守 1000

自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を捨て、このカードを手札から特殊召喚する。

ゆりな

魔轟神獣チャワ 墓地

魔轟神獣チャワ（攻2000）

「そして手札からロックキヤットを召喚！ 効果でチャワを特殊召喚するよ」

《ロックキヤット》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / 攻 12000 / 守 10000

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する レベル1の獣族モンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

ゆりな

魔轟神獣チャワ（攻2000）

ロックキヤット（攻12000）

魔轟神獣チャワ（守1000）

「それじゃレベル3のロックキャットにレベル1の魔轟神獣チャワをチューニング！」

3 + 1 = 4

「シンクロ召喚っ、きて！ 魔轟神獣ユニコール！！」

《魔轟神獣ユニコール》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣族 / 攻2300 / 守1000

「魔轟神」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

ゆりな

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

魔轟神獣チャワ（守1000）

「む…厄介なモンスターを出したな」

「ボクはさらに簡易融合を発動するよ！ ライフを1000ポイント払ってエクストラデッキからフュージョニストを特殊召喚っ」

《簡易融合》

通常魔法

1000ライフポイントを払って発動する。レベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いとして エクストラデッキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊される。「簡易融合」は1ターンに1枚しか発動できない。

《フュージョニスト》

融合モンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / 攻 900 / 守 700

「プチテンシ」 + 「スリーパイ」

ゆりな LP : 4000 3000

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

魔轟神獣チャワ（守100）

フュージョニスト（攻900）

「レベル1の魔轟神獣チャワにレベル3のフュージョニストをチュ
ーニング！ もう一体のユニコールだよ」

ゆりな LP : 4000 3000

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

「ふわ……ゆりなすごいね」

「でしょでしょ さあ夜一さん？ ボクの手札は2枚、このままな
らボクの勝ちだよ！ バトル、魔轟神獣ユニコールで攻撃っ！」

確かに、このままならいくらリバーズを発動しようが俺とゆりな
の手札は同じ2枚。ユニコールに無効化されちまう。……だが

「ふっ 通らないな。リバーズカード、サンダー・ブレイクをオ
ーブンだ。手札のスキルドレインをコストに魔轟神獣ユニコールを
破壊する」

「うにゃ？！ 手札枚数を変えられた！！」

《サンダー・ブレイク》

通常罫

手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。

そう、手札の枚数を変えてしまえばいい。そうすりゃユニコールの効果は使えない。

魔轟神獣ユニコール 破壊

「うー！！ もう一体のユニコールで攻撃っ」

ゆりなはモンスターを破壊されたが、残っているモンスターで攻撃を宣言する。だが甘い。

「ならリバースカード、ソウル・オブ・スタチューをオープン！
更にチェーンでカース・オブ・スタチューをオープンするぜ」

《ソウル・オブ・スタチュー》

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（岩石族・光・星4・攻1000/守1800）となり、自分のモンスターカードゾーンに特殊召喚する。このカードがフィールド上にモンスター扱いとして存在する限り、このカード以外のモンスター扱いとした罫カードが相手によって破壊され自分の墓地へ送られる場合、墓地へ送らず魔法＆罫カードゾーンにセットする事ができる。このカードは罫カードとしても扱う。

《カース・オブ・スタチュー》

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（岩石族・闇・星4・攻1800/守1000）となり、自分のモンスターカードゾーンに特殊召喚する。このカードがフィールド上にモンスター扱いとして存在し、このカード以外のモンスター扱いとした罫カードが相手モンス

ターと戦闘を行った場合、その相手モンスターをダメージ計算後に破壊する。このカードは罠カードとしても扱う。

夜一

ソウル・オブ・スタチュー（守1800）

カース・オブ・スタチュー（守1000）

「罠なのにモンスターになった！」

葵は初めてみた罠モンスターにビックリしている。

「面白いだろ？ これは罠モンスターだっていつて、元は永続罠なんだが発動後はモンスターとして扱うんだ」

「へ〜」

「まあトラップとしても扱うから戦闘とサイクロンなどの除去カード、両方が弱点というデメリットがある。まあメリットにもなるがな」

「成る程……面白いねっ」

そういい目を輝かせる。だが葵よ、それは使ってる本人と見ている奴だけなんだ……今だって対戦相手が唸っている。

「う〜〜〜!!」

何故なら今のこの状況、ソウル・オブ・スタチューの効果によりカース・オブ・スタチューは破壊されてもセットされ、だからといってソウル・オブ・スタチューに攻撃するとユニコールはカース・オブ・スタチューの効果によって破壊される。

「う〜〜……スタチューの効果が厄介だから攻撃はやめるね。メイン2で貪欲な壺発動するよ。墓地のロックキャット、魔轟神獣チャワ2枚、フュージョニスト、魔轟神獣ユニコールをデッキに戻して2枚ドロ〜！」

《貪欲な壺》

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシヤッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

ゆりな 手札1 3

「……おっ！ カードを2枚セットしてエンドっ」

ゆりな LP:3000

手札 1枚

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

伏せ×2

夜一

手札 1枚

ソウル・オブ・スタチュー（守1800）

カース・オブ・スタチュー（守1000）

伏せ×1

む……ドローしたカードを見たときゆりなの表情が変わった気が……何がいいカードでも引いたか？

「俺のターン、ドロー」

夜一 手札1 2

「今だっ！ リバースカード発動っ！」

何？このタイミングでか？ここで使うとしたら……ハンデスカードか？

「にゅふふ。王宮のお触れだよ」

「んなっ!?!」

《王宮のお触れ》

永続罨

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上の罨カードの効果は無効にする。

「何かある？ 夜一さん」

ゆりなはふふんっ と得意気に鼻を鳴らす。くそ……今お触れを止めないと俺のフィールドの罨モンスターは意味の無いカードになつてしまつ、なんとしても止めたいが……

「く……通すしかない」

俺の手札には今引いたサイクロンがある。だが今使つと手札はゆりなと同じ1枚、ユニコールに無効化されちまいこの状況を打開出来なくなる。

《サイクロン》

速攻魔法（準制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罨カード1枚を選択して破壊する。

ソウル・オブ・スタチュー 無効

カース・オブ・スタチュー 無効

「んじゃメインに入り俺はカードをセットする、んで手札からサイクロンを発動するぜ」

「う、手札にあつたのかあ……」

王宮のお触れ 破壊

よし、お触れを早く除去できた。これで問題なく動ける。

「そして今伏せたカード、マジック・プランターをオープンする。ソウル・オブ・スタチューをコストにカードを2枚引くぜ」

《マジック・プランター》

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する 永続罫カード1枚を墓地へ送って発動する。自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

ソウル・オブ・スタチュー 墓地

夜一 手札0 2

新たに手札にきたカードを確認する。するともう1枚プランターがきた。

「ラッキー！ カードを1枚伏せて更にマジック・プランターを発動、カース・オブ・スタチューをコストに2枚ドロウ」

「不要な永続罫を墓地に送りつつ手札を増やす事ができるこのカードは俺のデッキではかなりいい働きをする。」

カース・オブ・スタチュー 墓地

夜一 手札0 2

「すごいね……手札が0枚から一気に増えた」

「インチキだあ〜!!」

「何がだ?! ……とりあえず俺は追加でカードを2枚セットしてエンドだ」

夜一 LP:4000

手札0枚

伏せ×4

ゆりな LP:3000

手札 1枚

魔轟神獣ユニコール（攻2300）
伏せ×1

「兄さんはまた伏せカードだけ……もしかしてモンスターは入ってないの？」

「いや、流石に入れてるさ」

「あ、そうなんだ」

……つつても1枚だけな。 たった1枚だけ。

「それじゃボクのターン！ ドロー！」

ゆりな 手札1 2

「ならば俺はその瞬間リバーズカード、スキルドレインをオープンだ。コストにライフを1000ポイント払う」

《スキルドレイン》

永続罫

1000ライフポイントを払って発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

夜一 LP：4000 3000

「うげ……」

これで魔轟神獣ユニコールの効果は無効化される。ここで使わないと最悪ゆりなは手札を俺と同じ0枚にしてくるから……

「……なんてね リバーズカード、サイクロンを発動っ！対象はもちのろんろん、スキルドレインだよ」

成る程……エンドサイクを出来るがあえてしなかったのはこれを外したくなかったからか。ゆりなは俺のデッキを知っているから出来る事だ。

「だがコイツを入れていた事は知らないだろ？リバーズカード、偽物のわなをオープンだ」

「うにゃ？ 何それ」

「私にも見せて」

葵はまた出た知らないカードに興味を持ったようだ。だがゆりなまで知らなかったのか……まああまり使われないカードだしな。

《偽物のわな》

通常罠

自分フィールド上の罠カードを破壊する魔法・罠・効果モンスター
の効果を手が使用した時に発動する事ができる。このカードを代
わりに破壊し、他の罠カードは破壊されない。セットされたカード
が破壊される場合は、そのカードを全てめくり確認する。

「うわあ、兄さんのデッキと相性いいね……」

「本当だよ……こんなのいつの間に入れたのさ」

「昨日の夜に調整しててその時にちょっと」

少しでも除去カードから守らなくちゃいけないからな

「うゝそれじゃバトルっ、ユニコールで攻撃だよ！」

「リバーズカード、機動砦 ストロング・ホールドをオープン」

「また罠モンスターあ？！」

《機動砦 ストロング・ホールド》

永続罠

このカードは発動後モンスターカード（機械族・地・星4・攻0/
守2000）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で
特殊召喚する。自分フィールド上に「グリーン・ガジェット」「レ

ツド・ガジェット」「イエロー・ガジェット」が全て表側表示で存在する限り、このカードの攻撃力は3000になる。（このカードは罠カードとしても扱う。）

機動砦 ストロング・ホールド（守2000）

「お、さっきと違う罠モンスターだ」

葵は次々と出てくる変わったカードを見てとても楽しそうにしている

「どうする？」

「うにゃ？ 攻撃を続行するよ！！」

「それじゃリバースカード、宮廷のしきたりをオープン」

「もつやだあ！！」

《宮廷のしきたり》

永続罠

フィールド上に表側表示で存在する「宮廷のしきたり」以外の永続罠カードを破壊する事はできない。「宮廷のしきたり」は、自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

まあゆりなが怒るのも仕方がない。

何故ならこのカードの効果により罠モンスターは戦闘と魔罠を破壊による除去、両方に耐性を持ち完全な破壊耐性を得るからな。

「大体あったのになんでさっき偽者のわな使ったの？」

「無いと思わせたかったからな」

「まんまとだまされちゃったよ……モンスターをセットしてエンド
！」

ゆりな LP:3000

手札 1枚

魔轟神獣ユニコール（攻2300）

????（裏守備）

伏せ×0

夜一 LP：4000

手札0枚

機動砦 ストロング・ホールド（守2000）

・スキルドレイン

・宮廷のしきたり

伏せ×0

「んじゃ俺のターン、ドロカード……ん」

夜一 手札0 1

そうか……お前が来たか。そうだよな、流石にお前も暴れたいよな。

「よし、俺はフィールド上のスキルドレイン、宮廷のしきたり、機動砦 ストロング・ホールドを墓地に送るぜ」

スキルドレイン 墓地

宮廷のしきたり 墓地

機動砦 ストロング・ホールド 墓地

「ふにゃ！ ここで引いたの!？」

「ああ、見せてやるぜ俺のエースを！現れる、神炎皇ウリアー!」

《神炎皇ウリア》

効果モンスター

星10 / 炎属性 / 炎族 / 攻

0 / 守

0

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に表側表示で存在する罠カード3枚を 墓地に送った場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、自分の墓地の永續罠カード1枚につき 1000ポイントアップする。

1ターンに1度だけ、相手フィールド上にセットされている 魔法・罠カード1枚を破壊する事ができる。

この効果の発動に対して魔法・罠カードを発動する事はできない。

夜一

神炎皇ウリア（攻0）

「え、攻撃力：0？」

葵はエースと言われたウリアの攻撃力が0でビックリする。

「いや、コイツの攻撃力は俺の墓地に存在する永續罠の数×1000ポイントアップするんだ。墓地には6枚、よって……」

神炎皇ウリア（攻0 6000）

「

ゆりなは突然出てきたウリアに言葉すら出てこない

「うわぁ！ 凄い攻撃力だねっ！！」

「だろ？ そしてこれで終わりだ……ウリアでユニコールを攻撃！

ハイパー・ブレイズ！！」

「なんかボク負けてばかりだよぅー！！」

ゆりな LP：3000 0

第四話 いざ、大会へ

「ふう、凄いデュエルだったねっ」

デュエルが終わり、休憩していると葵は心から楽しめたのか、とても満足げに笑っている。

「うにゆううう……！」

しかしゆりなは逆、俺を見ながらとても不満げに唸っていた。

「……楽しかったな？」

「ボクに同意を求めないで!？」

怒られてしまった。まあ、ゆりなは昨日今日と連敗続きだからな。だがゆりな! お前っ、お触れとか厄介なカード積みやがって……

……

サイクロン引いてなかったら不味かった、最悪ユニコールとロツクされ何も出来なくなってただろう

「だってナチュル・ピース貰ったからより上手く活かせるようにしようかね? 出せてたらサイクロンとか全部無効にしたのに」

そういつて悔しそうにする……成る程な、確かにそうすりゃ魔法、罾は封殺出来る。うん、今俺はあげなきゃ良かったと後悔した。

「危ない危ない……さて、今何時だ？」

「んとね、12時になったとこだよ」

葵はカエルのキーホルダーが付いた自分の携帯で確かめてくれる。結構時間が経ってしまったな。

「そうか、後一時間で大会が始まる時間になるな」

「ふえ!? なら早く出かけようよ!」

俺の言葉を聞くなり葵は俺達を急かしてくる。余程楽しみらしいな。

「あゝ、ちよっと待っててくれ」

俺はあることを思い出し、それだけ言い残して二階にある自分の

部屋に向かった。後ろから葵が何か言ってきたるので急ぐとしよう。

「さて、と」

自分の部屋に入るなり軽く身支度を済ませた俺は、押し入れを開け仕舞っておいた箱を取り出す。

「……つと」

箱を開けると中にはデュエルディスクが入っていた。俺が使っているものと同じ旧式の物だ、システムの更新は昨日済ませておいたので問題なく使用できる。俺は自分のデュエルディスクも持ち、急いで葵達の所に戻った。

「またせたな」

「兄さん遅いつ！」

リビングに入ると葵はソファに座っていた、ご立腹のようだ。ゆりなはというと横でマイペースにデッキ調整をしていやがる。

「すまんすまん。こいつを持ってきたんだ」

それだけというと俺は先ほど持ってきたデュエルディスクを葵に渡す。

「ふえ？ これって……」

「うにゃ？ お、デュエルディスクじゃん」

するとゆりなが気付き、興味津々に見る。

「あ、やっぱりそうなんだ。でもよく見るヤツとデザインが違うね」

「これ旧式だからだよ。夜一さん、二つもよく持ってるね？」

「まあ……昔にちよつとな」

曖昧に答えてしまう。ゆりなはふ〜ん？とだけいい詳しく聞かなかった。

「ん〜どう使うの？」

「難しいものでも無いから店に向かいながら教えるさ、とりあえずそろそろ出るぞ」

「「はい」」

こうして俺達は大会が行われるカードショップに向かった。

「んじゃ入るか」

「うん」

「ほいよっ」

カードショップに着くと俺達は店内に入る。大会は店の裏にある駐車場にて行われるのだが、時間に余裕があったので俺は昨日出た新パックを試しに買って見たかったのだ。

「お、あつたあつた」

新パックを見つけると5つだけ取る。いざ買いに行こうとすると。

「兄さん！ カード見てくるねっ」

「ふにやっ！？」

葵は声を弾ませながらゆりなを引つ張ってショーケースへ向かっていった。知らないカードだらけで面白いのだろうな、と思わず笑みができる。

「っと、買いに行くか」

俺は目的を思い出し、レジに足を運んだ。

しばらくしてパックを買った俺は店の外で開封していた。

「ん、コイツは……」

しかし出てきたカードはあまり今のデッキに合わなかった、だが期待せずに最後のパックを開封すると黒枠のカードが出てきた。

「エクシーズモンスターか……」

エクシーズモンスターとは最近新たに出てきたカードだ。エクストラデッキに入り、融合モンスターやシンクロモンスターと違い同じレベルのモンスターを2体以上重ねて出せるため、比較の出しやすい。とりあえずエクストラデッキに入れてみるとショップから葵とゆりなが出てきた。

「いたいた。もう……出るなら言ってよ」

「おう、忘れてた」

カードを見終わり葵は俺を探してたらしい、お詫びに頭を撫でてやる。

「うみゆ／＼／」

「そうだ、ゆりなは何か掘り出し物あったか？」

「ん、微妙だった」

「そうか。さて、そんじゃ会場に行くか」

「あわわ、いっばい来てるね……」

「だね」

店の裏に行くと人が結構集まっていた。葵は人見知りなので緊張して俺の後ろに隠れている、ゆりなは平気そうだな。まあ前は大会に出ていたからか。

「店長、来てやったぞー」

「おお、来てくれたか。ん、その子達がチームメンバー？」

俺はこの大会の主催者である店長に軽く挨拶をする、すると葵達に気付き確認してくる。

「ああ、まあとりあえずエントリーさせてくれ」

「はいよ、これにチーム名とメンバーの名前を書いてね」

店長は参加用紙とペンを出してくれる……チーム名は適当に書くか。

「……よし、これでいいか？」

「OKだ、それじゃ始めるかな。君達もがんばってね」

「ふえ？ ひゃ、ひゃいつ……／＼／」

「にははは、まあ頑張るよ……てかチーム戦なんだね」

ゆりなは以外そうにいう、個人戦だと思っていたようだ。

「今回からだがな、ちなみにここのチームルールは公式と少し違う。公式は3対3でどちらかのチームが相手のメンバー全員を倒したら終了。だがこの大会では一人ずつデュエルしていき、先に2勝したほうの勝ちだ」

「へ」

『おい、始まるから皆集まってくれ』

店長がメガホンで呼びかけると、そろそろと参加者が集まってくる、葵は驚いてゆりなに抱きつく。

「きゆう……」

「お、よしよし」

『さて、今回はチーム戦。初めてになるけど8チームもエントリーしてくれてありがと。では、今からチーム名を言うから呼ばれたら前に出てきてね？ あ、スペースの関係上デュエルは2組ずつ行うから』

「……そっぴや言い忘れたがチーム名は【死デスの合唱コーラス】な？」

「なんてネーミングセンス……」

「わ、私は良いと思うな？」

『まず一回戦目、チーム【じえつと・すとりむ】と……チーム【死の合唱】だ』

「……え？」「」

……どうやら、早速出番のらしい。まさか一回戦目からとはな

「よっしゃ行くぞ、二人共っ！」

「いやっほうー」

俺とゆりなは葵を引っ張って前が出る

「あつあつあう……／／／」

『では、両チーム最初のメンバーを決めてね』

「ど、どうする？ やっぱりここは兄さんが……」

「んーそうだな。んじゃ、こっちから出るのは……」

葵は俺に出て欲しいらしい、俺はゆりなにアイコンタクトを送る。
するとゆりなはすぐにこくりと頷き……

「「葵だっ!」「」

「……え?」

『了解、じゃあ両チーム決まったようなので始めまーす!!』

「ん、よろしくな」

相手は慣れた手付きでデュエルディスクを構える

「ふえええ!!!??」

第五話 大会予選。炸裂！？死の合唱！

「デュエル！！」

「先攻は譲るよ」

「ふえ？ じゃあ、お言葉に甘えて……ド、ドロー」

相手に先攻を譲られ、葵は戸惑いながらデュエルディスクからゆつくりとカードを引く。

葵

手札5 6

『さあ！ まずはこの常連である夜一君の妹さん、葵ちゃんのターンだ！ どんなデュエルを見せてくれるか楽しみですよ！』

「頑張れー！！」

店長がノリノリで解説をやり始め、観客の野郎共は珍しい女の子のデュエリストに声援を送る。葵はというと……

「はうう……／／／」

初めての大会なうえ大勢の観客に見られてメチャクチャ緊張していた。アイツこういうの苦手だからな……

「頑張れい、我が妹よー！！」

「ふぁいと、だよう」

少しでも緊張を和らげてやろうと俺達も応援してやる。

「~~~~っ！ モンスターをセットしてエンドっ／／／」

ありゃ、余計緊張したのか葵は顔を真っ赤にしてすぐにターンを終了させてしまった。そして何故か俺を見る野郎共の視線が怖い。

葵

LP：4000 手札：5枚

??? (裏守備)

伏せ×0

相手

LP：4000 手札：5枚

伏せ×0

「なら俺のターン、ドロー」

相手

手札5 6

「負けやがれ……!」

おいおい野郎共、……てか相手のチームの奴らまで一緒になってやがる。

「アイツら……まあいい。とりあえず手札から光の援軍を発動するな。コストでデッキトップから3枚墓地へ……レベル・ステイラーにグローアップ・バルブ、サイクロンだ」

《光の援軍》
ひかり えんぐん

通常魔法 (制限カード)

自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送って発動する。自分のデッキからレベル4以下の「ライトロード」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

相手

レベル・ステイラー 墓地
グローアップ・バルブ 墓地
サイクロン 墓地

「おお！ 光の援軍を発動し、1ターンでいきなり墓地に有力なカードを揃えました！」

「うにやつ？ 墓地落ち良すぎない？！ 積み込みかつ！！」
「だな……」

ゆりなは相手の墓地に送られたカードを見て、あまりにも良すぎるから驚く。あれならこのターンにシンクロ召喚してくるかもしれない……

「効果でデッキからライトロード・パラディン ジェインを手札に加え、召喚だ」

《ライトロード・パラディン ジェイン》

効果モンスター 星4/光属性/戦士族/攻1800/守1200
このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。

相手のデュエルディスクにカードが置かれる。するとソリッドヴィジョンによりフィールド上に白い髪の剣士が現れた。

相手

ライトロード・パラディン ジェイン（ATK：1800）

「ふあ！ すごいすごいっ」

葵は初めて間近で見たソリッドヴィジョンに目を輝かせている。

お、どうやら今ので緊張は解けたらしいな。俺とゆりなはホツとする。

「更に墓地のグローアップの効果、デッキトップから1枚墓地に送り特殊召喚だ。ライトロード・ハンター ライコウが墓地に送られる」

《グローアップ・バルブ》

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/植物族/攻100/守100

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

相手

ライトロード・ハンター ライコウ 墓地

グローアップ・バルブ（ATK：100）

『おっと！ ここでグローアップだ、いきなりシンクロ召喚がくるぞー！！』

「手加減しろー！！！！」

「そっだそっだ」

「そっだ〜」

何となく俺達も悪のりしてみる。実際にそう思っているわけではないが何か楽しそうだった。

「いやいやっ！？」

「おいおい観客共……いくぞ？ レベル1のグローアップ・バルブにレベル4のライトロード・パラディン ジェインをチューニング
！！」

1 + 4 = 5

グローアップとジェインが光の輪になり、一筋の光が射しこむ

「シンクロ召喚、A・O・J カタストル！」

アリーオー ジャステイス
《A・O・J カタストル》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 闇属性 / 機械族 / 攻2200 / 守1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

相手

A・O・J カタストル（ATK：2200）

「このモンスターは闇属性以外のモンスターと戦闘するならダメージ計算を行わずに相手を破壊する」

「ふえ！？ 強っ！！」

葵は効果を知らなくて驚く。まあ昨日始めたばかりだしな。

「知らなかったのか……だが、驚くのはまだ早い。カタストルのレベルを一つ下げ、墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚。更に二重召喚を発動だ」

《レベル・ステイラー》

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻 600 / 守 0

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在する レベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

デュアルサモン
《二重召喚》

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

相手

レベル・ステイラー（DEF：0）

「そしてレベル・ステイラーをリリースしてサルベージ・ウォリアーをアドバンス召喚、効果でグローアップを蘇生する」

《サルベージ・ウォリアー》

効果モンスター

星5 / 水属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1600

このカードがアドバンス召喚に成功した時、手札または自分の墓地からチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

青い体の戦士が出てくると鎖を使い墓地からグローアップを引き出す。

相手

レベル・ステイラー リリース

サルベージ・ウォリアー（ATK：1900）

グローアップ・バルブ（DEF：100）

「凄い展開してんな……」

「うにゃ、葵は大丈夫かな……」

「大丈夫さ」

葵を見ると、まだ諦めてはいない。何か希望があるのだろう。

「レベル1のグローアップ・バルブにレベル5のサルベージ・ウォリアーをチューニング！」

1 + 5 = 6

「シンクロ召喚、C・ドラゴン！」

《C・ドラゴン》
チューン

シンクロ・効果モンスター

星6 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守1300 チューナー

+ チューナー以外のモンスター1体以上

自分の墓地に存在する「C」と名のついたモンスターを全てゲームから除外する事ができる。この効果で除外したモンスター1体につき、このカードの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで200ポイントアップする。このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与える度に、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

相手

C・ドラゴン（ATK：2500）

「また違うシンクロモンスターがきた……」

「バトルフェイズ、カタストルでセットモンスターを攻撃だ」

相手の攻撃宣言によりカタストルが葵のモンスターに襲いかかる。

「うー、モンスターは魔知ガエルだよ」

《魔知ガエル》
まち

効果モンスター

星2 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守 2000

このカードのカード名は、フィールド上に表側表示で存在する限り「デスガエル」として扱う。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は他のモンスターを攻撃対象に選択できない。このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキ・墓地から「魔知ガエル」以外の「ガエル」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

葵のフィールド上のモンスターが公開され、帽子を被ったカエルが出てくる。しかしカスタルの攻撃に耐えられず破壊された。

「あう〜……私のお気に入りの子だったのに〜。魔知ガエルの効果でデッキから鬼ガエルを手札に加えるよ」

「どうやら魔知ガエルはフェイバリットだったらしいな、ちょっと涙ぐんでいる。」

「追撃。C・ドラゴンで直接攻撃」

「きゃうっ!?!」

C・ドラゴンが葵に向かって攻撃する。葵は衝撃に驚き悲鳴を上げた。

葵

LP : 4000 1500

「葵っ!?! 大丈夫か!?!」

悲鳴を聞いた俺は心配になり、思わず大きな声が出てしまう。

「う、うん。ありがと兄さん。ちょっとビックリしただけ……。続けて?」

「そういつてこちらに笑いかけてくる。どうやら大丈夫らしいな……。良かった。相手も少し戸惑ってしまっている。」

「あ、ああ……。C・ドラゴンの効果で相手はカードをデッキトップから3枚墓地に送る」

「えっと……」

葵

黄泉ガエル 墓地

おろかな埋葬 墓地

引きガエル 墓地

「黄泉ガエルが落ちたか……。カードを2伏せしてエンドだ」

相手

LP：4000 手札：1枚

A・O・J カタストル（ATK：2200）

C・ドラゴン（ATK：2500）

伏せ×2

葵

LP：1500 手札：6枚

伏せ×0

「（うーん、今の手札だとカタストルが倒せない……。）私のターン、ドロー！」

葵

手札6 7

「……むう、スタンバイに私は黄泉ガエルを墓地からだすよ」

《黄泉ガエル》

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守 1000

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罫カードが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

どうやら良いカードを引かなかつたらしく葵は唸る。だが墓地から効果を発動し、フィールドに羽が生えたカエルが上から降りてきた。

葵

黄泉ガエル（DEF：1000）

「そして手札から粹カエルを捨てて鬼ガエルを特殊召喚！ 効果でデッキから悪魂邪苦止を墓地に送るよ」

《粹^{いき}カエル》

効果モンスター

星2 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守 2000

このカードのカード名は、フィールド上に表側表示で存在する限り「デスガエル」として扱う。また、自分の墓地に存在する「ガエル」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。このカードはシンクロ素材とする事はできない。

《鬼^きガエル》

効果モンスター

星2 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守 500

このカードは手札の水属性モンスター1体を捨てて、手札から特殊

召喚する事ができる。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキ・フィールド上から水族・水属性・レベル2以下のモンスター1体を選択して墓地へ送る事ができる。1ターンに1度、自分フィールド上に存在するモンスター1体を手札に戻す事で、このターン通常召喚に加えて1度だけ、自分は「鬼ガエル」以外の「ガエル」と名のついたモンスター1体を召喚する事ができる。

《悪魂邪苦止》
おたまじゃくし

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守 0

自分フィールド上に存在するこのカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「悪魂邪苦止」を手札に加える事ができる。その後デッキをシャッフルする。

葵

粹カエル 墓地

鬼ガエル (ATK:1000)

悪魂邪苦止 墓地

「更に鬼ガエルの効果で鬼ガエルを手札に戻して鬼ガエルを召喚！効果で悪魂邪苦止を墓地に送るよ？そして鬼ガエルの効果で召喚権を得て、悪魔ガエルを召喚。悪魔ガエルは効果で攻撃力が墓地の悪魂邪苦止の数×300ポイント上がるよ」

《悪魔ガエル》
あま

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻1200 / 守 800

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「悪魂邪苦止」の枚数×300ポイントアップする。

葵

鬼ガエル（ATK：1000）

悪魂邪苦止 墓地

悪魔ガエル（ATK：1200 1800）

「あとは……手札から一族の結束を発動だよ」

《一族の結束》

永続魔法

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

葵

鬼ガエル（ATK：1000 1800）

悪魔ガエル（ATK：1800 2600）

「C・ドラゴンの攻撃力を上回ったか……」

「バトル、悪魔ガエルでC・ドラゴンを攻撃っ」

相手

LP：4000 3900

C・ドラゴン 破壊

「くっ……」

「やたっ！ これでバトルは終了するよ。メイン2で鬼ガエルを効果で手札に戻し、カードを2枚セットしてエンド」

葵

LP：1500 手札：2枚

黄泉ガエル（DEF：100）

悪魔ガエル（ATK：2600）

・一族の結束

伏せ×2

相手

LP：3900 手札：1枚

A・O・J カタストル（ATK：2200）

伏せ×2

「俺のターン、ドロ！」

相手

手札1 2

「よし……手札からジャンク・シンクロンを召喚！」

《ジャンク・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

相手

ジャンク・シンクロン（ATK：1300）

「効果で墓地からライコウを蘇生する。そして手札からTG ワーウルフを特殊召喚」

デッキジinas

《TG ワーウルフ》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 獣戦士族 / 攻1200 / 守0

レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから「TG ワーウルフ」以外の「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

相手

ライトロード・ハンター ライコウ (DEF:100)

TG ワーウルフ (DEF:1200)

「レベル3のジャンク・シンクロンにレベル2のライトロード・ハンター ライコウとレベル3のTG ワーウルフをチューニング」

3 + 2 + 3 = 8

「出てこい……メンタルスフィア・デーモン!!」

《メンタルスフィア・デーモン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / サイキック族 / 攻2700 / 守2300

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回

復する。サイキック族モンスター1体を対象にする魔法または罠カードが発動された時、1000ライフポイントを払う事でその発動を無効にし破壊する。

相手

メンタルスファイア・デーモン（ATK：2700）

「バトル、カタストルで黄泉ガエルを攻撃だ」

「させない！ 伏せカード、フロッグバリアを発動っ！相手の攻撃表示モンスターを破壊するよ！」

《フロッグ・バリア》

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する「ガエル」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「む、それは通すわけにはいかないな……リバーズ発動、神の宣告だ。ライフを半分払いフロッグバリアを無効にする」

「ふええ！？」

《神の宣告》かみ せんごく

カウンター罠（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動する。魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

相手

LP：3900 1950

葵
フロッグバリア 無効
黄泉ガエル 破壊

「うう……まさか無効にされるなんて」
「メンタルスフィアデーモン、悪魔ガエルを攻撃だ！」

葵
LP：1500 1400
悪魔ガエル 破壊

「あう……」
「更にメンタルスフィアデーモンの効果で悪魔ガエルの攻撃力分回復する」

相手 LP：1950 3150

「よし、ターンエンドだ」

相手
LP：3150 手札：0枚
A・O・J カタストル(ATK：2200)
メンタルスフィアデーモン(ATK：2700)
伏せ×1

葵
LP：1400 手札：2枚
・一族の結束
伏せ×1

「私のターン、ドロー！」

葵

手札 2 3

勢いよくカードを引く、葵はそのカードを確認すると顔を明るくした。良いカードを引けたようだな。

「（来た！……でもあの伏せカードが怖いよ）あう……いや！ 当たって砕けようっ！ 墓地から粹カエルの効果発動、悪魔ガエルを除外して特殊召喚するよ！」

葵はさつき神の宣告で止められた事で警戒したのか、相手のリバースカードを気にして悩んでいる。しかしすぐに悩むのを諦めた。

葵

粹カエル（DEF：2000）

「……壁か？」

「違うよ？ 私は粹カエルをリリースしてデスガエルをアドバンス召喚！」

《デスガエル》

効果モンスター

星5 / 水属性 / 水族 / 攻1900 / 守0

このカードのアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「悪魂邪苦止」の枚数分まで、「デスガエル」を手札またはデッキから特殊召喚する事ができる。

葵

粹カエル リリース

デスガエル（ATK：1900 2700）

「む、一族の結束によって攻撃力がメンタルスフィア・デーモンと並んだか……」

「デスガエルの効果発動！ 墓地の悪魂邪苦止の数だけ手札・デッキからデスガエルを出せるよ！ 墓地の悪魂邪苦止は2枚だからデッキから2体だすね」

葵

デスガエル（ATK：1900 2700）

デスガエル（ATK：1900 2700）

「お〜と？ ここでデスガエルが3体並びました！これはまさか？！」

「そして伏せカード発動、^{デス}死の合唱^{コーラス} 相手の場のカードを全部破壊するよ！」

「んなつー！」

《死の合唱》

通常魔法

自分フィールド上に「デスガエル」3体が表側表示で存在する時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する全てのカードを破壊する。

「くっ……ならリバースカード、強欲な瓶を発動！」

《強欲な瓶》

通常罫

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「効果で1枚ドロウする……お！（ゴーズを引けた、これでこのターンは耐えられる！）」

A・O・J カタストル 破壊
メンタルスファイアデーモン 破壊

「それじゃ手札から融合を発動っ！ デスガエル3体を融合するね」
「……へ？」

葵

デスガエル×3 融合

デスガエル3体がフィールドから消え、葵の後ろに渦が出来る。
「融合召喚！ ガエル・サンデス！！」

《ガエル・サンデス》

融合・効果モンスター

星8 / 水属性 / 水族 / 攻2500 / 守2000

「デスガエル」+「デスガエル」+「デスガエル」

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「黄泉ガエル」の枚数×500ポイントアップする。

葵

ガエル・サンデス（ATK：2500 3000 3800）

「自身の効果で500ポイントアップ、更に一族の結束で800ポイントアップ……攻撃力3800のガエル・サンデスで攻撃っ！」
「俺の負けか……」

LP : 31500
相手

第六話 精霊登場!?

『……あ、第一回戦の勝者はチーム「死の合唱」の水城 葵ちゃんです!』

「「おおー!」」

店長や観客達はまさかの葵の勝利に驚いている。まあ無理もないか。葵は初心者で今回初めての大会初参加だしな。

「……か、勝った! 私勝てたよ!」

葵は自分でも信じられない、そんな顔をしていた。しかし勝利を実感し、そういつて此方に走ってくる。大会初めてのデュエルで勝てて余程嬉しいのだろう。

「お疲れ様だよ葵 凄いじゃん!」

「えへへ」

「よくやった葵!」

「はうっ!?!?!」

葵が勝ち、俺も嬉しかったからだろうか。つい葵を抱き締めてしまっていた。

「あ……すま」

気付くと葵の顔は既に真っ赤。慌てて離れ、謝らねば……

「せいやっ!」

「がはっ!?!」

何故かわからんが、ゆりなから脇腹に強烈な一撃を貰いました……
……がく。

『それじゃすぐさま第二回戦を始めたいと思います、各チームは次のデュエリストを決めてね』

「いてて……」

進行が早いな。殴られて痛いし次はゆりなに任せるか。

「兄さんは復活が早すぎるよ……」

「体が丈夫なことだけが取り柄だからな」

「にははは、次はボクが行ってきていいかな？」

「……それじゃゆりな、逝ってこい」

「流石にボクも勝ちたいよ！ 連敗してるんだよ?!」

お、よく漢字の違いが分かった。流石だと言っておこう！ ゆりなよ。

「だが、ここはやっぱり展開的に盛り上がるには三回戦目にだな？」

「ボクは決勝でやればいいと思うな!」

「む、確かに!」

言われてみればそうだな……んじゃここは普通に行くべきか。

「バカな事言つてないでどうするの二人共……」

そう言つと葵はため息をつく。無駄な話をしすぎたらしいな、呆れられてしまった。

「それじゃ行つてくるね!」

「よし、勝つてこい! ゆりな」

「がんばってね」

「ほい」

俺達はゆりなを送り出す。相手のチームはデュエリストを決めていたらしく、既に待っていた。

『では、第二回戦。デュエル!』

「デュエル!」

店長の合図によりデュエルがスタートする。

「それじゃ先攻は貰うね! ボクのターン」

ゆりなは全く緊張した様子はないようで、いつも通りに始める。これなら問題ないだろう。

「ドロー! ……うにゃ!? 事故った!」

観客達が面白そうに笑う。ゆりなも恥ずかしいのか一緒に笑っていた……問題ない、よな?

「やれやれ、やっと行ったな」

「兄さんのせいで遅れたんだよ……」

ゆりなを送り出した俺達は俺の提案で一度デュエルスペースを離れ自販機の前で休憩していた。ゆりながやや心配だが、まあ何とかしてくれるさ。

「にしてもよく勝てたな。メチャクチャ楽しそうにデュエル出来たし。そんなに緊張してなかったのか？」

「途中で楽しくて緊張がとけちゃった。あとは兄さんが作ってくれたデッキだったからかな？ 負けそうだったけど凄く勇気が出たよ」
デッキケースからデッキを取り出し、葵は恥ずかしそうに、そして嬉しそうに笑う。

「ははっ！ そいつは良かった……ん？」

キラリ

「どしたの？」

「葵、今お前のカード光らなかったか？」

「え？」

一瞬だった。葵がカードに触った時、光った気がした。気のせいかな？

「んー、ちよつとデッキを貸してくれ」

「う、うん。わかった」

俺は葵からデッキを受け取るとカードを一枚一枚確認してみる。

すると一枚のカードに触れた瞬間、眩しい光が溢れだした。

「きやう！？」

「んなつ……あ？」

光がやみ何が起きたのかわからず、視力が戻るのを待っていると

……

「ふえっ！ なにつ！？ なにつ！？」

「どうした？！ あお、い……」

突然葵は混乱し始めた。俺は急いで葵を見る。すると

「ケロ」

学者帽を被ったカエル……魔知ガエルらしきものが葵の前で飛んでいた。コイツまさか……

「に、兄さん！ 何かいる！ 魔知ガエルみたいなのがとんでる！」

葵はいきなり出てきた魔知ガエルにパニックっている。

「つか魔知ガエルだろうな……」

何故出てきたかはわからないがこの魔知ガエルはおそらくカードの精霊だ。面倒なことになりそうだが、とりあえず葵に説明してやるか。

「葵、ちよつといいか？」

「ふ、ふえ〜何だかわからないけど……可愛いよう」

「ケロ？ ケロン」

しかし葵は目の前に浮遊している魔知ガエルに興味津々。だらけきった顔で見つめている。俺の言葉は聞こえていないようだ。

「お〜い……はあ。魔知ガエル、一度カードに戻ってくれないか？」

何度も呼ぶが反応は無し。まずは葵を落ち着かせなくてはまともに話ができないそうだな。とりあえず魔知ガエルには一度カードに戻ってもらおう。

「……ゲロオ？」

だが魔知ガエルは俺の言葉を聞くなり、意味を理解したのかメチヤクチャ嫌そうな顔をする。

「……おいおい？ 何だ、その反抗的な目は？」

「ケロ〜」

「〜」

スルーかよ。どうやら俺の言葉ではまったく動く気はないらしい。……どうでもいいが葵、兄さんさつきからシカトされてるようで悲しくなってきたぞ。

「葵〜……」

「けるけるう〜」

再度葵を呼んでみる。しかし目の前にフェイバリットカードである魔知ガエルがいるからか、相変わらず幸せそうな顔をして葵は自分の世界に行ってしまったている。……仕方ねえ。

「最終手段だ。出てきてくれ」

『ギャオオオオオオ!!』

俺は小さくそう呟く。すると俺の体を纏うように神の名を持つ紅き竜 神炎皇ウリア が現れ、咆哮を上げた。

『ケ、ケロ?!』

「……ふええ!? う、ウリア?!」

ウリアの咆哮に驚いたのが、葵は此方の世界に戻ってくる。やれやれ。

「そつだ。俺の最も信頼する相棒だ、そして数少ないカードの精霊」

「カードの……精霊?」

「ああ、ちなみにそいつも」

『ケロケロン』

「はう!? 可愛い〜!!」

魔知ガエルが鳴くと葵はまた俺の話が聞こえなくなる。……わざとやってんのか? 流石の俺もイラッ ときたぜ。

「魔知ガエル、カードに戻れ」

『ケロ』

魔知ガエルを戻らせようとしてもまたもやスルーを決め込む。

「……魔知ガエル、もう一度だけ言うぜ? 一度カードに戻れ」

『ギャウ……』

『ケロ……』

ウリアに威嚇してもらうが効果はなく、魔知ガエルは引かない。どうやらウリアの攻撃力は元々0……どんなに姿がでかくても、と甘く見ているのだろう。

「交渉は決裂だな。ちなみにウリアの特殊召喚条件は表側罫3枚…

…そして俺の場合当然永続罫。よってアタックは3000オーバーだ」

「……に、兄さん？ 何する気」

何やら不穏な気配を感じ取ったのか、葵は俺に何をやる気が聞いてくる。だがもう遅い。この魔知ガエルはカードの精霊、言葉で応じぬのならば同じカードの精霊に任せるしかない。

「魔知ガエル、イメージしろ。今から繰り出される神の一撃を」

『ギャオオオオ！』

『ケロオオ〜！？』

「ふええええ！！？」

俺が合図を送るとウリアは攻撃を繰り出す。魔知ガエルはウリアの一撃に耐えられずに、悲鳴と共にフィールドアウトしていった。よし、やっとカードに戻ったな。サンキュー、ウリア。

「ひ、ひどっ！？ 何すんの兄さん！」

ウリアが消えるのを見届けていると葵は今さっき起きた出来事に怒っていた。

「話を聞かなかったお前らが悪い」

そう言うつと葵はしゅんと反省する。

「う……で、でもでも！ 可哀想だよ。消えちゃったじゃない！」

「それなら大丈夫。カードに一度帰っただけだ。また出てくるさ」

「カードに……？」

「ああ、アイツもウリアと同じカードの精霊だからな」

「そうだ、カードの精霊って何なの？」

「その名の通りさ。カードに宿るデュエルモンスターの精霊。戦いを共にする友。そうそういるもんじゃないがな」

「そうなんだ……」

「ああ、だから普段は誰にも言わない方がいいぞ。変な奴だと思われるからな」

「わ、わかったよ」

色々あったが何とか説明できた。すると大会が行われている会場の方から歓声が聞こえてきた。

「おおー!!」

『デュエル終了ー!! 勝者は……』

「あ、終わったみたいだね」

「みたいだね。んじゃ行くか」

会場に行こうとすると、葵が立ち止まった。どうかしたのか？

「……ゆりなは勝ったかな？」

葵は此方にくる前のゆりなを思い出したらしい、心配そうに聞いてくる。

「……多分」

会場に戻ると違うチームのデュエルが始まっていた

「あ、何処行つてたの二人共。勝ったよ」

「……おお！」

「ほ、本当か！」

葵は以外だ……そんな顔をしている。俺も実際驚きを隠せない。

「……ジト」

すると俺達の反応が面白くないのか、ゆりなはじーっと俺を抗議の目で見つめてきた。

「な、何かすまん……」

「むう……それじゃボク、したいことが一つあるんだけどさ？」

そういつてゆりなはイタズラっぽく笑う。何かを企んでるな。

「おう、何でも言ってくれ」

しかし断るわけにはいかないだろうな……仕方ないがOKしてやるか。

「ゆ、ゆりな？兄さんに何する気？」

「それじゃあ……えい」

「うおっとー!？」

何をされるかわからず、覚悟を決める。するとゆりなはいきなり抱きついてきた！

「んな、な……」

いきなりの出来事に俺は頭が真っ白になる。……そしてなんか柔らかなものがあた

「に、兄さんから離れて!？」

「にははは やだねっ！ 葵はさっきやって貰ってたじゃん」

葵に怒られつつもゆりなは笑い、更に強く抱き締めて……って！

「お、おまつ!？」

「……ゆりなあ〜?」

「にはははー、調子に乗りすぎたかな」

葵のただよらぬ気配を感じ、ゆりなは笑いながら逃げ出す。葵は怒ってゆりなを追いかけ出した。……何とか助かったな。

「……そうだ」

俺は他所のチームデュエルでも見てこよう。今はとりあえずこの高鳴った鼓動を落ち着かせたい。

「ま、まっつて〜ゆりなあ……」

「にははは」

元々葵は運動音痴、すぐにばてちまってゆりなに助けられてる。

「……やれやれ」

そんな二人を見ながら俺は、次のデュエルまでゆっくりさせてもらおうことにした。

第七話 準決勝一回戦目！！畏モンスターVSスクラップ

『はい！これで予選は全て終了しました〜！』

お、やっと終わったようだな。やれやれ……やはりデュエルは見
てるだけじゃつまらないな。実際にやらないと

「うん、魔知ガエルにナチュル・ガオドレイクで攻撃だよ！」

「じゃあフロツグバリア」

「うにゃー!?!？」

ちなみに二人は空いてるスペースでデュエルシートを広げて仲良
くデュエル中。俺は混ぜてもらえなかった

「……行くぞ？二人共」

「ちよつとまって。デスガエル3体で攻撃」

「ボクの負けだよ。それじゃ行こっか」

「うん」

丁度葵の勝ちでデュエルが終わった。俺も手伝い、さっさとテッ
キとシートを片付けて俺達は再びデュエルスペースへと向かう

「次はどう言われようが俺が始めの出るぜ？予選でデュエル出来な
かったからなっ」

葵とゆりなは笑いながら了承してくれた。よし、早くデュエルが
したいぜ

『さあて！次は準決勝Aグループ。メンバー全員が大会初出場のチ
ーム「鉄屑」と夜一君率いるチーム「死の合唱」だ！両チームは第
一回戦出場のメンバーを決めてください！』

「……なあ、やっぱりどちらかいつてくれないか？」

相手のチーム名を聞いた瞬間、俺は行きたくなくなったよ

「え……」

二人は俺の言葉を聞くなりドン引き。やめる……そんな目で見な

いでくれ。だってあからさまスクラップだぜ？最悪ボコボコにされるわ

「「ジト」……」

「……わ〜ったよ！行くよ。その代わり負けても怒るなよ？」

つか息がいいな二人共。流星は親友

「ほいほ〜い」

「私は怒るよ」

「ひでえ!?!」

抗議の声をあげるが葵は訂正してくれない。どうやらマジらしい

「大体兄さんは強いんだから負けるなんて言わないでよ!」

「葵……つたく。了解、勝ってくるぜ」

「うんっ」

俺もまだまだ甘いな。こんなにも信用されてる事に気づかないなんて

『ケロ〜』

「お前はいい」

「うにゅ?」

「あはは……」

「おや来ましたか。さっきは逃げ出すかと思いましたが」

デュエルスペースに入ると眼鏡をかけた少年が待っていた。なんか嫌みっぽいヤツだな

「まあな、アイツのためにも信頼に答えてやらなきゃいけないかった。勝たせて貰うぜ？モブキャラA」

「んなつ！誰がモブキャラ」

『ではっ、デュエルを開始したいと思います!』

「始まったな……デュエルスタートだっ!」

「くっ！デュエル！」

開始と共にすかさず手札を確認。よし、引いたカードはいい感じだ
「先攻は貰うぜ！ドロー！！！」

夜一 手札5 6

「楽しませてくれよ？リバースカードを4枚セットしてターンエンド！」

夜一 LP：4000

手札 2枚

伏せ×4

「大口を叩くわりに事故ですか？僕のターン」

モブキャラA 手札5 6

そういや相手は初出場だったな。ならばここの大会ではよく知られている俺のデッキも奴には知られてはいないからこの場を見ても事故としか思えないだろう

「《スクラップ・エリア》を発動します」

《スクラップ・エリア》

通常魔法

自分のデッキから「スクラップ」と名のついたチューナー1体を手札に加える。

「やっぱりスクラップか」

だがあいにくと此方のフィールドは万全。そして情報アドも俺にある！

「効果でデッキからスクラップと名のついたチューナーモンスター
《スクラップ・ビースト》を手札に加え、スクラップ・ビーストを
召喚」

《スクラップ・ビースト》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻1600 / 守1300

フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードが攻撃対象に選
択された場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。こ
のカードが「スクラップ」と名のついたカードの効果によって破壊
され墓地へ送られた場合、「スクラップ・ビースト」以外の自分の
墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択
して手札に加える事ができる。

モブキャラA

スクラップ・ビースト（攻1600）

「スクラップ・ビーストで直接攻撃！」

「通すかよ！リバーオープン。永続罠、《メタル・リフレクト・
スライム》。コイツは発動後モンスターとなる」

《メタル・リフレクト・スライム》

永続罠

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0 /
守3000）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で
特殊召喚する。このカードは攻撃する事ができない。（このカード
は罠カードとしても扱う）

夜一

メタル・リフレクト・スライム（守3000）

攻撃を仕掛けてきたビーストの前に鋼鉄の体を持つスライムが現れ、俺を守る

「なっ……守備力3000!?!」

「なんだ、こんなカードも知らないのか？勉強不足だな」

実用性があるカードしか知らないのだろうか？……まあいいか

「……くっ、攻撃は中止します。カードを2枚伏せてターンエンド」
相手は俺のフィールドにモンスターの守備が高いため攻撃を中断した。まあそうだろう。あのまま攻撃しても反射ダメージを食らってしまうだけだ

モブキャラA LP:4000

手札 3枚

スクラップ・ビースト(攻1600)

伏せ×2

夜一 LP:4000

手札 2枚

メタル・リフレクト・スライム(守3000)

伏せ×3

「俺のターンだ」

夜一 手札2 3

「手札からマジックカード、《マジック・プランター》を発動する。このカードは自分の場の永續罫を1枚墓地に送る事で2枚ドローできる。メタル・リフレクト・スライムをコストとして墓地へ」

メタル・リフレクト・スライム 墓地

「2枚ドロロー……よし。リバースオープン！永続罫、《カース・オブ・スタチュー》。コイツもモンスターとなるぜ」

夜一

カース・オブ・スタチュー（攻1800）

「カース・オブ・スタチューでスクラップ・ビーストにアタックだ
！」

俺の攻撃宣言によりカースはビーストに襲いかかる。さあ、リバ
ースを使うか？

スクラップ・スコール
「速攻魔法を発動！」

《スクラップ・スコール》

速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のつ
いたモンスター1体を選択して発動する。自分のデッキから「スクラ
ップ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、カードを1枚ド
ローする。その後、選択したモンスターを破壊する。

スコールか、予想通りだな。これでこのターン相手フィールドの
モンスターは消える

「スクラップ・ビーストを選択。デッキから《スクラップ・キマイ
ラ》を墓地に送りスクラップ・ビーストを破壊して1枚ドロロー。そ
してスクラップ・ビーストの効果でスクラップ・キマイラを墓地か
ら手札に加えます」

スクラップ・キマイラ 墓地

スクラップ・ビースト 破壊

スクラップ・キマイラ 手札

定石通りだな。これで次のターン何もなければシンクロ召喚は確
実だろう

「ならば攻撃続行。カース・オブ・スタチューでダイレクトアタッ
クだ！」

「させません。トラップ発動、《邪神の大災害》」

「んなっ ！」

《邪神の大災害》
じゃしん だいさいがい

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。フィールド上
に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「さあ、どうします?」

「むう……被害を抑えるしか出来ないな。リバースオープン!永続
罠、《ソウル・オブ・スタチュー》!効果でモンスターとなるぜ?」

夜一

カース・オブ・スタチュー (攻1800)

ソウル・オブ・スタチュー (攻1000)

「また罠モンスター……ですが、発動したところで破壊されます」
「甘い。コイツが俺のフィールドにモンスターとして存在する限り
他の罠モンスターが相手によって破壊される場合、墓地に送らずに
魔法&罠ゾーンにセットすることが出来る!よってカース・オブ・
スタチューは破壊を免れる」

「何!?」

ソウル・オブ・スタチュー 破壊

・伏せ（スキルドレイン） 破壊
カース・オブ・スタチュー セット

「お、兄さん上手くかわしたね？」

「夜一さんのデッキは破壊による除去には結構強いからね。バウン
スには弱いけど」

「そうなんだ」

「俺はバトルを終了。カードを3枚セットしてターンエンド」

夜一 LP：4000

手札 1枚

伏せ×4

モブキャラA LP：4000

手札 5枚

「僕のターン、ドロー！」

モブキャラA 手札5 6

「スクラップ・キマイラを召喚。効果で墓地からレベル4以下のス
クラップモンスターを蘇生する。蘇れ、スクラップ・ビースト！」

《スクラップ・キマイラ》

効果モンスター

星4/地属性/獣族/攻1700/守500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「スクラッ
プ」と名のついたチューナー1体を選択して特殊召喚する事ができ
る。このカードをシンクロ素材とする場合、「スクラップ」と名の

ついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材モンスターは全て「スクラップ」と名のついたモンスターでなければならぬ。

モブキャラA

スクラップ・キマイラ（攻1700）

スクラップ・ビースト（攻1600）

「レベル4のスクラップ・キマイラに、レベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！」

4 + 4 = 8

「シンクロ召喚！《スクラップ・ドラゴン》！」

《スクラップ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動することができる。選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

モブキャラA

スクラップ・ドラゴン（攻2800）

来たか。1ターンに1度お互いのカードを1枚破壊できるシンクロモンスター……

「聞いておきたいんだが、ソイツはお前にとってエースモンスターとかか？」

あまり相手のフェイバリットカードやエースモンスターは破壊したくない。俺もウリアが破壊されるのは悲しいし相手の悲しむ顔は見たくないからな

「エース？別にそんなものはありませんよ。全て勝つための駒ではない」

「……そうか、なら」

そんなふうに使われてちゃ、カードが可哀想だな。俺はゆっくりとリバーズカードを発動させる

「ふん！何をしようが無駄です、コイツは破壊されても墓地のスクラップモンスターを蘇生でき」

「知るかよ。ソイツは退場だ。リバーズオープン、《奈落の落とし穴》」

《奈落の落とし穴》

通常罠（準制限カード）

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。その攻撃力1500以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

奈落の落とし穴の効果でスクラップ・ドラゴンは闇に引きずり込まれる

スクラップ・ドラゴン 破壊

「ちい……」

「あれ？破壊されたのに効果が発動しないね？」

「スクラップ・ドラゴンは確かに破壊耐性を持つてる。けど発動条

件は破壊され“墓地に送られた時”なんだよ」

「……あつ！なるほど。奈落の落とし穴は破壊してから除外する！」
「そゆこと」

「……仕方ない。カードを2枚セットしてエンドです」

「ならエンドフェイズに2枚のリバー스를オープン。カース・オブ・スタチューとソウル・オブ・スタチューだ」

モブキアラA LP：4000

手札 3枚

伏せ×2

夜一 LP：4000

手札 1枚

カース・オブ・スタチュー（攻1800）

ソウル・オブ・スタチュー（守1800）

伏せ×1

「ん？何でこのタイミングで発動したんだろ？」

「多分見てればわかると思うよ」

「俺のターン、ドロー！！」

夜一 手札1 2

「手札からマジック、《強欲で謙虚な壺》を発動するぜ」

《強欲で謙虚な壺》

通常魔法

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選択

して手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。「強欲で謙虚な壺」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分は特殊召喚する事ができない。

「このカードはこのターン特殊召喚と再度、強欲で謙虚な壺の使用を制限する代わりにデッキトップから3枚カードをめくり、1枚手札に加えることができる。デッキトップを3枚チェック」

1枚目 宮廷のしきたり

2枚目 マジック・プランター

3枚目サンダーブレイク

「それじゃ俺はマジック・プランターを選択し手札へ。残されたカードはデッキに戻す」

俺のデッキは基本相手のターンに特殊召喚をする。このカードのデメリットは気にならないので相性がいい

「……ってことだよ」

「なるほど」だから相手のエンドフェイズに発動したんだね」

「バトルだ。まずはソウル・オブ・スタチューで切り込ませてもらう！」

ソウルは相手プレイヤーに向かって剣を振り下ろす

「攻撃しましたね? 《聖なるバリア・ミラーフォース》を発動します」

《^{せい}聖なるバリア・ミラーフォース》

通常罠（制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

しかしその攻撃はバリアによって弾き返される。さらに跳ね返された衝撃が俺のモンスターに襲いかかり……直撃する

「よしっ……な」

しかし俺のモンスターは破壊されることなく無傷だった

「何故破壊されていないのですか!!」

「リバース、宮廷のしきたりを発動したのさ。このカードのエフェクトにより俺の永続罫、罫モンスターは完全なる破壊耐性を得る」

これで相手はミラーフォースを無駄撃ちしただけで終わる。更にソウル・オブ・スタチューの攻撃はもう一度繰り出される

「よってソウル・オブ・スタチューの攻撃を受けてもらっぜ」

「ぐっ……」

モブキャラA LP:4000 3000

「更にカース・オブ・スタチューで攻撃だ」

モブキャラA LP:3000 1200

「バトルを終了し、マジック・プランターを発動。ソウル・オブ・スタチューをコストに2枚ドロー」

ソウル・オブ・スタチュー 墓地

夜一 手札1 3

「うむ……カードを2枚セットしてエンドだ」

夜一 LP:4000

手札 1枚

カース・オブ・スタチュー（攻1800）

・宮廷のしきたり
伏せ×2

モブキャラA LP:1200
手札 3枚
伏せ×1枚

「く……ドロー！」

モブキャラA 手札3 4

「……！ふふふ、これなら貴方の場を荒らすことが出来ますね」

引いたカードを見ると相手はニヤリと笑い、そのカードを発動する
「魔法カード、《ハリケーン》を発動しますよ！」

《ハリケーン》

通常魔法（制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「やべ！？……とでも言うと思ったか？リバースオープンだ。カウンター罠、《魔宮の賄賂》！」
「な！？」

《魔宮の賄賂》

カウンター罠

相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。相手はデッキからカードを1枚ドローする。

この状況を打開できるとでも思ったのだろうか、このデッキにハリケーンは発動されたらかなり辛い。だから対策はちゃんとしてあ

るさ

「効果でお前のハリケーンは無効だ。まあ、その代わりドロウさせてしまおうがな」

「くそ……」

ハリケーン 無効

モブキャラA 手札3 4

「ならモンスターをセットし、伏せカードを1枚セットしてエンド」

モブキャラA LP:1200

手札 2枚

???? (裏守備)

伏せ×2

夜一 LP:4000

手札 1枚

カース・オブ・スタチュー (攻1800)

・宮廷のしきたり

伏せ×1

「俺のターン」

夜一 手札1 2

ドロウしたカードは俺が一番信頼する神炎皇ウリア。するとウリアが横に現れる

『ギャウ!!』

「お、来たか相」

「その瞬間、リバーズカード《手札断殺》を発動させます」

「……………へ？」

《手札断殺》
ていだたなき

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローする。

「効果でお互い手札を2枚墓地に送り2枚ドロー!!」

『ぎゃうう〜……………』

「ウリアー!!!??」

くっ……………ウリアが墓地に送られてしまった

神炎皇ウリア 墓地

アポピスの化神 墓地

夜一 手札0 2

レベルステイラー 墓地

スクラップ・ゴレム 墓地

モブキャラA 手札0 2

「ほう、その様子ではかなりいいカードが落ちたようですね」
俺の様子を見るなり相手は俺を嘲笑う。……………ウリア

「兄さん……………」

「許さねえ……………手札からマジックカード、ブラックホールを発動。モンスターを全て破壊する!!」

《ブラック・ホール》

通常魔法（制限カード）

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

???（スクラップ・ゴブリン） 破壊

「畏モンスターは宮廷のしきたりの効果により破壊されない」
「くっ！」

「バトルだ。カース・オブ・スタチューでアタック」

「まだです。リバーカード、《リビングデッドの呼び声》を発動します」

《リビングデッドの呼び声よこえ》

永續罫（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「効果で《スクラップ・ゴーレム》を蘇生！」

《スクラップ・ゴーレム》

効果モンスター

星5 / 地属性 / 岩石族 / 攻2300 / 守1400

1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル4以下の「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択し、自分または相手フィールド上に特殊召喚することができる。

モブキャラA

スクラップ・ゴーレム（攻2300）

「これでこのターンは耐えられる……」

「それは無理だ。カース・オブ・スタチュー、攻撃を続行！スクラップ・ゴーレムにアタックだ！」

「んなつ！？」

「そしてバトルステップ。リバーオープン、カース・オブ・スタチューだ」

夜一

カース・オブ・スタチュー（攻1800）

カース・オブ・スタチュー（攻1800）

夜一 LP：4000 3500

「くう……！」

そしてカース・オブ・スタチューの攻撃により、俺は反射ダメージを喰らう……だがこれくらいは必要経費だ

「カース・オブ・スタチューは宮廷のしきたりによって破壊はされない。そしてバトルを行ったことによりもう一体のカース・オブ・スタチューの効果が発動する！このカード以外の罠モンスターが相手のモンスターと戦闘を行った場合、その相手モンスターをダメージ計算後に破壊する！よってスクラップ・ゴーレムは破壊だ」

「何だつて！？」

スクラップ・ゴーレム 破壊

「ラストだな……もう一体のカース・オブ・スタチューでアタック！」

「くそー！！！」

『決まったー!!準決勝Aグループ、第一回戦の勝者はチーム「死の合唱」の水城 夜一君です!!』

「よっしゃ!やったぜ葵、ゆりな!!」

「うん!」

「かつこよかったよ、夜一さん」

デュエルが終わり俺は二人の元に行く。葵達はハイタッチで迎えてくれた

「ほら、やっぱり兄さん勝てたでしょ?」

「いや、スクラップ・ドラゴンを対処出来なかったら不味かった。運が良かっただけさ」

「むう……兄さんはもうちよつと自分に自信を持った方がいいの!葵は納得いかないのか頬を膨らませて怒る。そんな事言われてもなあ……」

「まあまあ、夜一さん。実力も運の内、だよ?」

「それを言うなら運も実力の内、だぞ」

「あ、あれ?にやははノノノ」

間違いを指摘され、ゆりなは恥ずかしそうに笑う

「ははっ!まあいいさ、サンキューな。二人共!」

二人は俺を強いといってくれる。自分ではそうは思ったことはないが何だか嬉しかった

『次の準決勝Aグループ、第二回戦を始めたいと思いますので、各グループは出場メンバーを決めてください』

「おっ、そうだな……んじゃ次は」

「私が行きたい!」

考えていると葵が自ら行きたいと言ってきた。驚いたな、まさか葵が自分から行きたいなんて……

「大丈夫か……何て聞くのは野暮か。ゆりな、いいよな？」

「当たり前だよ」

「よし、んじゃ葵。暴れてこい！」

「うん！」

『では、両チーム出場メンバーが決まりました！これより準決勝Aグループ、第二回戦を開始します！！』

「よろしくね？えっと……モブキャラBさん！」

「ちがーう！」

「ははっ！最高だな、葵」

「兄妹揃ってヒドイ……」

「『デュエル！！』」

第八話 準決勝二回戦目！！ガエルVSサイバー

「僕の先攻でいかせてもらいます。ドロ―」

さて、次の相手は何を使用するのか……まあ、見ていればわかるか

モブキャラB 手札5 6

「（この人もモブキャラAさんと同じスクラップなのかな……？）」
「それじゃメインにて《サイバー・フェニックス》を召喚です」

《サイバー・フェニックス》

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 機械族 / 攻1200 / 守1600

このカードが自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する機械族モンスター1体を対象とする魔法・罫カードの効果は無効にする。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロ―する事ができる。

デュエルディスクにカードが置かれたことにより、機械の体を持つ不死鳥が翼を羽ばたかせながら相手の場に舞い降りる

モブキャラB

サイバー・フェニックス（攻1200）

「……サイバー？さっきの人とは違うカードみたいだね」
「まあね。カードを2枚伏せターン終了」

モブキャラB LP：4000

手札 3枚

サイバー・フェニックス（攻1200）
伏せ×2

「サイバー・フェニックス……【サイバー・ドラゴン】か？」

サイバーと言えは有名なのがサイバー流、かつてデュエルアカデミアで帝王カイザーと呼ばれるデュエリストが使用していたとか聞いたことがある……常に完璧なタクティクス、そして相手をリスペクトする様からパーフェクトデュエリストと言われてたとか

「かなあ？まあ楽しいデュエルになりそうだね」

「だな」

「それじゃいくねっ！私のターン……！」

葵 手札5 6

『ケロ』

葵がカードを確認すると魔知ガエルが出てきた。俺は奴が精霊として出てきて以来苦手になった……葵は嬉しそうに笑っているから何とも言えないけどな

「あ、来てくれたんだ よしっ！それじゃまずは手札の水属性のモンスターを捨てて鬼ガエルを特殊召喚！」

ソリッドヴィジョンにより角の生えた黄色いカエルが葵の場に現れる

葵

鬼ガエル（攻1000）

「この子は手札の水属性モンスター1体を捨てて特殊召喚できるの。」

そして鬼ガエルの効果発動！召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキかフィールドから水族・水属性・レベル2以下のモンスター1体を墓地に送ることができる！デッキから粹カエルを墓地へ！」

葵は鬼ガエルの効果を発動させると慣れてきたのか迷わずにデッキから1枚のカードを選択して墓地に送る

粹カエル 墓地

「それで私はフィールド魔法、湿地草原と永続魔法、一族の結束をだすよ。湿地草原はフィールド上にいる水族・水属性・レベル2以下のモンスターの攻撃力を1200ポイントアップ、一族の結束は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が一種類のみの場合、自分の場にいる同じ種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップ！だから鬼ガエルの攻撃力は合計2000ポイントも上がるよ！」

すると葵と相手の周りに草原が現れ、雨が降り出す。鬼ガエルは雨に打たれ嬉しそうに鳴きだした

葵

- 湿地草原 -

鬼ガエル（攻1000 2200 3000）

・ 一族の結束

「攻撃力……3000!？」

あれ？俺はさっきのデュエルでも似たようなセリフを聞いた気が

……まあ、こんなにもすぐに出てこれる打点ではないしな

「それじゃ鬼ガエルでサイバー・フェニックスを攻撃！」

これが通れば1800ダメージだ。与えられる事が出来ればかなり有利になれる

「くっ……ならリバーズカード、サイクロンを発動！湿地草原を破壊させていただきます」

葵

湿地草原 破壊

鬼ガエル（攻3000 1800）

竜巻が現れてフィールドを吹き飛ばす。すると雨が止み草原が消えた。鬼ガエルは何だか不服そうだ

「でもでもっ、サイバー・フェニックスは倒せるよ！」

モブキャラB LP：4000 3400

サイバー・フェニックス 破壊

「しかし表側表示で存在するサイバー・フェニックスが戦闘破壊された事により効果が発動されます。1枚ドロ」

「へ〜……私の引きガエルと同じような効果なんだね。それじゃ私はバトルを終わらせてモンスターと伏せカードを1枚セット、鬼ガエルの効果で鬼ガエルを手札に戻してエンドだよっ！！」

葵 LP：4000

手札 1枚

????（裏守備）

・一族の結束

伏せ×1

モブキャラB LP:3400

手札 4枚

伏せ×1

「それじゃおれのターン、ドロー……」

モブキャラB 手札4 5

「では、《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚っ！コイツはフィールドに存在する限りカード名をサイバー・ドラゴンとして扱います」

《プロト・サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 機械族 / 攻1100 / 守 600

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。

モブキャラB

プロト・サイバー・ドラゴン(攻1100)

「そして魔法カード、《エヴォリユーションバースト》を手札から発動！」

《エヴォリユーション・バースト》

通常魔法

自分フィールド上に「サイバー・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上のカード1枚を破壊する。このカードを発動するターン「サイバー・ドラゴン」は攻撃する事ができない。

「このカードはサイバー・ドラゴンが自分の場に存在する場合発動でき、貴女の場のカードを1枚破壊します。対象はモンスター！」
「ふえ?!」

魔法が発動されると新たに相手の場に現れた機械の竜は葵のモンスターにプレスを繰り出した。伏せられていた魔知ガエルは耐え切れずに破壊されてしまう

??? (魔知ガエル) 破壊

「ケロ〜!」

「魔知ガエル……うんっ！破壊された魔知ガエル効果発動。この子は破壊された時、デッキが墓地から魔知ガエル以外のガエルと名のついたモンスターを手札に加えるよ。デッキから悪魔ガエルを手札に！」

悪魔ガエル 手札

「エボリューションバーストのデメリットによりこのターン、サイバー・ドラゴンは攻撃出来ません。ターンエンド」

モブキャラB LP:3400

手札 3枚

プロト・サイバー・ドラゴン(攻1100)
伏せ×1

葵 LP:4000

手札 2枚

・一族の結束

伏せ×1

「それじゃ私のターン」

葵 手札2 3

「またまた鬼ガエルをだすね！効果でデッキから悪魂邪苦止を墓地に送る」

葵

鬼ガエル（攻1000 1800）

悪魂邪苦止 墓地

・一族の結束

「そして鬼ガエルの効果で鬼ガエルを手札に戻すね。この効果によって私は鬼ガエル以外のガエルと名のついたモンスターを通常の召喚とは別にもう一度だけ召喚できる。私は悪魔ガエルを召喚っ！この子は墓地の悪魂邪苦止の数だけ攻撃力が300ポイント上がるよ！墓地には最初のターンに捨てた子と合わせて2体。600ポイントアップ」

葵

鬼ガエル 手札

悪魔ガエル（攻1200 2000 2600）

・一族の結束

「バトル、悪魔ガエルでプロト・サイバー・ドラゴンを攻撃！」

モブキヤラB LP:3400 1900

プロト・サイバー・ドラゴン 破壊

「くっ……」
「バトルを終わらせてメイン2。私は墓地から粹カエルの効果を発動！……ごめんね、魔知ガエルを除外して粹カエルを特殊召喚。これでエンドだよ」

葵 LP：4000

手札 2枚

悪魔ガエル（攻2600）

粹カエル（守2000）

・一族の結束

伏せ×1

モブキャラB LP：1900

手札 3枚

伏せ×1

「それではおれのターン、ドロー」

モブキャラB 手札3 4

「……ふふっ」

対戦相手は引いたカードを確認するとニヤリと笑った。ふむ、何か協力的なカードを引いたのかもしれない

「リバースカード発動！リビングゲッドの呼び声。効果でプロト・サイバー・ドラゴンを特殊召喚っ！」

モブキャラB

プロト・サイバー・ドラゴン（攻1100）

・リビングゲッドの呼び声

「ここでプロト・サイバー・ドラゴン……何かあるのかな」

「その通り。手札から速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！このカードは自分の場に1500以下のモンスターが特殊召喚に成功した時此方はそのモンスターを攻撃表示で、貴方は自分の場のモンスター一体を選択して手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚する！おれはプロト・サイバー・ドラゴンを選択。サイバー・ドラゴンを出す」

「それじゃ私は粹カエルを選択。この子は場にいる限りデスガエルになるから、デスガエルを出すね」

モブキャラB

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ドラゴン（攻2100）

プロト・サイバー・ドラゴン（攻1100）

・リビングデッドの呼び声

葵

悪魔ガエル（功2600）

粹カエル（守2000）

デスガエル（功1900） 2700）

デスガエル（功1900） 2700）

デスガエル（功1900） 2700）

・一族の結束

「おいおい……ヤバくないか？」

ここでパワー・ボンドを使われたら不味い。葵のリバー스가攻撃を防ぐことができるカードなら逆にデメリットにより勝てるが……

「そして手札から魔法カード、融合を発動！サイバー・ドラゴンとプロト・サイバー・ドラゴンを融合する」

サイバー・ドラゴン＋プロト・サイバー・ドラゴン 融合

「出る、《サイバー・ツイン・ドラゴン》！！」

《サイバー・ツイン・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 機械族 / 攻2800 / 守2100

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

モブキャラB

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ツイン・ドラゴン（攻2800）

「よかった。パワー・ボンドは無かったか」

だが協力なモンスターを出されたことに違いはない。油断すんなよ葵

「サイバー・ツイン・ドラゴンは一度のバトルで2回攻撃できる！」

「ふえ！？」

「バトル！まずはサイバー・ドラゴンで粹カエルを攻撃します！」

粹カエル 破壊

「（ライフポイントの差は大きい。だが此方にはサイバー・ツイン・

ドラゴンがいる。この攻撃力はなかなか越えられないはずだ……あとは予選の時に使った死の合唱さえ発動させなければ勝てる！）サイバー・ツイン・ドラゴンでデスガエルに攻撃！」

葵 LP：4000 3900

デスガエル 破壊

「あう……」

「さらに二撃目だ、サイバー・ツイン・ドラゴン！もう一体デスガエルを攻撃！」

葵 LP：3900 3800

デスガエル 破壊

「ではバトルを終了し、これでターンを終了します。さあ、貴女のターンですよ」

モブキヤラB LP：1900

手札 2枚

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ドラゴン（攻2100）

サイバー・ツイン・ドラゴン（攻2800）

・リビングゲテッドの呼び声

葵 LP：3800

手札 2枚

悪魔ガエル（攻2600）

デスガエル（攻2700）

・一族の結束

伏せ×1

「（悪魂邪苦止はもうデッキにいない。次のドロウで何とかしないと私の場は全滅しちゃう……）私のターン！！」

葵 手札2 3

「（っ！きた、この子なら……）手札から未知ガエルを捨てて鬼ガエルを特殊召喚っ！効果で」

「発動した瞬間、手札から《エフェクト・ヴェーラー》を捨て効果を発動」

「ふえ？」

《エフェクト・ヴェーラー》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻

0 / 守

0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動することができる。

「鬼ガエルの効果を無効にしますよ」

「え、それは困るよ！？伏せカード発動！《ギョツ！》だよ」

《ギョツ！》

カウンター罫

ゲームから除外されている自分の魚族・海竜族・水族モンスター1体をデッキに戻して発動する。効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「コストで除外されていた魔知ガエルをデッキに戻してエフェクト・

ヴェーラーの効果を無効にするよ」

「く……」

「それじゃ鬼ガエルの効果でデッキから貫ガエルを墓地に送るね」

葵

悪魔ガエル（攻2600）

デスガエル（攻2700）

鬼ガエル（攻1000 守1800）

未知ガエル 墓地

貫ガエル 墓地

・一族の結束

「また墓地肥やし……」

「これで準備万端っ。手札からサシカエルを召喚！」

《サシカエル》

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守2000

自分フィールド上に存在する水族モンスター1体をリリースし、自分の墓地に存在する「ガエル」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

葵

デスガエル（攻2700）

悪魔ガエル（攻2600）

鬼ガエル（攻1800）

サシカエル（攻1000 守900）

・一族の結束

「サシカエル……？」

「この子は1ターンに1度だけ自分の場にいる水族のモンスターをリリースすることで墓地のガエルと名のついた子呼んでこれる！サシカエル自身をリリースして貫ガエルを特殊召喚！」

《^{かん}貫ガエル》

効果モンスター

星2 / 水属性 / 水族 / 攻 400 / 守 400

このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。このカードが直接攻撃に成功した時、自分フィールド上に「貫ガエル」以外の「ガエル」と名のついたモンスターが存在する場合、相手フィールド上の魔法・罫カード1枚を破壊する事ができる。

葵

デスガエル（攻2700）

悪魔ガエル（攻2600）

鬼ガエル（攻1800）

サシカエル 墓地

貫ガエル（攻400 1200）

・一族の結束

「この子は直接攻撃できて、他にガエルがいるときに攻撃が当たったら相手の伏せカードを破壊できるよ。今は意味無いけど……それじゃバトル、貫ガエルで相手プレイヤーに直接攻撃！」

「ぐあー！」

モブキャラB LP:1900 700

「効果でリビングデッドの呼び声を破壊だよ」

リビングゲデッドの呼び声 破壊

「それじゃ悪魔ガエルでサイバー・ドラゴンに攻撃っ！」

モブキャラB LP：700 200

「最後にデスガエルでもう一体のサイバー・ドラゴンに攻撃！」

「……防ぐ術は何もないですね。おれの負けです」

モブキャラB LP：200 0

『はい、準決勝Aグループ2回戦の勝者はチーム「死の合唱」の水城 葵ちゃんです！両チームいいデュエルでした。勝利したチームはBグループのデュエルが終わり次第決勝を始めますので、それまで自由にしてください。もちろん次の対戦相手を視察してもかまいません』

視察か……どうするかな。あまり相手のデッキを知っている状態でやりたくないからな

「勝てたよ」

「お疲れ様、葵」

「すごいね葵！昨日始めたばかりとは思えないよ」

「うん。何故かわからないけど昨日からかな？カードを手取る」と今この状況でどうすればいいのか閃くの……なんて、何言ってるだろ私

「にははは、流石は夜一さんの妹 センスがあるんだよ」

「ふえ？そんなことはないよ」

「……」

そういつて照れながら葵は笑う。どうすればいいか閃く、ね。魔知ガエルが出てきたことによる補正では……ないはずだ。出てくる

前から使いこなしていたし……なら

「兄さん？どうしたの、怖い顔してる……」

「んあ？あ……いや、何でもないさ」

そうだ、なんて事はない。葵は前からデュエルセンスが良かったしな。葵に心配させないために俺は自分にそう言い聞かせる

「そう？なら良いけど……」

「そ、そんなことより次の対戦相手見に行かなくていいの？ボクは見に行きたいんだけどな？」

「ん、あんまり気が進まんのだが……」

『準決勝Bグループしゅうりょー！！』

「あ」

「……間に合わなかったな、ゆりな」

まあ、俺的には結果オーライだ。見なくて済んだのだからな。だがゆりなは見ておきたかったらしく落ち込む

「だ、大丈夫だよゆりな。そんなことしなくても勝てるって……」

「葵の言つと通りだ。へんな小細工なんざ必要ない、俺たちは相手が誰だろうが全力で楽しいデュエルをして勝つ。それだけさ」

そう、それだけでいいんだ。デュエルでつまらない事はしたくない……カードゲームで楽しまなかったら損だしな

「夜一さん……」

「まあ、俺が好きなプレイングはメタとコントロールだがな？」

「「台無しだ！？」」

第九話 決勝開幕

『さあ！当店初のチームデュエルも、ついに残るは決勝戦のみとなりました。では今回のカードを紹介させていただきます。まずは…このチームだ！かもーんっ』

「……………しゅん」

準決勝が終わり少しして、店長がハイテンションで大会を進行し始めた。俺達が待機している方を指差して呼んでいるが、正直テンションについていけないので反応しない事にする。観客達もしらけてるしな

『あ、あの？夜一君、出てきて…………』

「んあ？俺達を呼んだのか」

やれやれ、下手にノリだけで司会しないで欲しい。名前を言わないなら事前に打ち合わせとかしてくれ

「いやいや…………明らかにこっち見てたじゃん、指差してたじゃん！」

「だがな葵。あれで出てこいと言うのもどうよ？出づらいぜ」

あの雰囲気の中出ていくのはちょっと勇気がいると思うんだがなあ

「いいから行くっよう？」

「……………そうだなっ」

む、ゆりなに正論を言われたのがちょっと癪だが、言っていることは正しい

俺は二人を連れてデュエルスペースの中央にまで行くと、店長により俺だけ観客の方に出された

『はい、チーム【死の合唱】の登場です！それではリーダーの水城夜一君、一言宜しく!!』
「ちよっ……まあ、なんだ」

仕方無く店長からマイクを受けとると、俺は観客達に背を向け後ろにいる葵とゆりなを見る

「今日は葵、ゆりな……お前ら二人が来てくれなかったら俺はここに立ってはいなかっただろう。サンキューな?……だからその……俺は、二人の為に全力で勝たせてもらう。以上だ!」
「恥ずかしくなって最後は振り返り、それだけいうとさっさとマイクを店長に返す。後ろからは二人の嬉しそうな笑い声が聞こえた

「「ぶーぶー……!!」」

「ふえ!?!」

「まさかのブーイング!ドンマイだね夜一さん」
「最悪だなテメー等……台無しだ」

『で、では続きまして一次のチームを紹介したいと思います。出てきてくださ〜い』

「へいよ〜。チーム【デステイニー】が通るぜ〜」

制服を着た高校生達が前に出る。すると一人の青年は前に出るなり店長からマイクを取りあげ話し出す

「俺様はチームリーダーの藤島だ。知ってると思うがこの辺ではN.O.1の実力をもつデュエリストなんだぜ!」

そして観客達に高らかに宣言した。N.O.1ねえ……

「ふええ!?!どうするの?」

「……そなの?」

「さあ?」

どうせ藤島とやらのハツタリか何かだろ?それなのに葵は慌てす

ぎだな。ゆりなはキョトンとしてるが

「てか藤島だったか？お前ここの大会では見ないし、観客達は誰も知らんと思うぞ？」

「「うんうん」「

「んなつ！やるかお前」

「いい加減にしる藤島……」

藤島が怒り出した瞬間、静かに、そしてはつきりした声が会場に響く。一瞬で会場は静まり返り、目付きの鋭い青年が前に出てきた

「ちっ、黒野……」

「面倒だから大人しくしている。大体お前はこのチームのリーダーでもないし、予選でデュエルしなかったんだ。印象は今のところ数合わせが良いところだろ」

「何？だったら初戦は俺様が出てやるよ」

「勝手にするんだな。店長、こっちはメンバー決まったぜ？」

それだけ言っただけで黒野と呼ばれた青年はもう一人のチームメンバーを連れてデュエルスペースから出ていく

『そ、それじゃ夜一君のチームは誰が出ますか？』

「私はヤダ」

即座に拒否。葵は藤島みたいな奴は苦手なんだよな

「俺はあの黒野って奴とデュエルしたいな。どんなデッキを使うのか興味がある……って事で」

自然と俺と葵の視線は残された選択肢である少女に向かう

「ボクに行け、と……」

溜め息をつきつつ、渋々とゆりなはデュエルスペースにいる藤島の前に立つ

「えーと、誰だったか……まあいいか。この俺様に勝てるかな？まあ無理だろうが。なっはっは」

うわ……マナーとか基本的なものが微塵も無いな。藤島の言葉にゆりなはむっとしている

『それでは両チーム、準備は良いようですので決勝戦一回戦目を始めます！』

第十話 決勝戦一回戦目 VS 宝石の戦士達

「デュエル！」

藤島 LP：4000

ゆりな LP：4000

「いくよ！ボクのタ……」

「俺様のターンッ！」

「に、やつ！？」

藤島 手札5 6

「兄さん、あんな事していいの？！」

「落ち着け、葵……確かに許されたものじゃねえが、藤島はゆりなが引く前にカードをドロ―したから問題は無い」

「……でも、」

それでも葵は納得いかないようだ。だがそれでいい。カードゲームはプレイヤー同士がマナーを守ってやるべきもの、俺はそう思うから

「まあ大丈夫さ。それよりゆりなのデュエルを見てやろうぜ？」

また俺達の会話でデュエルの描写を省かれたら可哀想だしな

「何か今、余計な心配したよね？！」

「気のせいだ」

・Side ゆりな

あらら、先攻取られちゃったよ……まあいつか まずは相手のデッキを確認だね

「俺様は《ジエムレシス》を召喚する！」

「レシス……【ジエムナイト】だっけ？」

たしか最近出てきたカード郡なんだよね。夜一さんなら動きとか知ってるんだろうけど、ボクは知らないからマズイかも……

《ジエムレシス》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1700 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「ジエムナイト」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

相手の場に宝石が現れると、中からアルマジロみたいのが出てきた。うにゃ……目がくりくりしてて可愛いかも

藤島

ジエムレシス（ATK1700）

「ジエムレシスの効果を発動。デッキから《ジエムナイト・ガネット》を手札に加えるぜ！」

《ジエムナイト・ガネット》

通常モンスター

星4 / 地属性 / 炎族 / 攻1900 / 守 0

ガーネットの力を宿すジエムナイトの戦士。炎の鉄拳はあらゆる敵を粉碎するぞ。

ジエムナイト・ガネット 手札

加えたのは通常モンスター……むむむ！どんなデッキかボクにはわからないっ

「そしてカードを2枚セット、エンドだ」

藤島 LP:4000

手札 4枚

ジェムレシス(ATK1700)

伏せ×2

とりあえず通常モンスターを多用するのかな？まだわからないから下手に動いちゃマズイかも

「ボクのターン、ドロー！」

ゆりな 手札5 6

お、事故はしてないね。むしろいい引きしてるくらい

「手札の獣族モンスターを一体墓地に送り、《虚栄の大猿》を特殊召喚！効果で墓地に送った《キーマウス》のレベル分、虚栄の大猿のレベルを下げるね」

《虚栄の大猿》
きよえい おおひる

チューナー（効果モンスター）

星5/地属性/獣族/攻1200/守1200

このカードは通常召喚できない。手札から獣族モンスター1体を墓地へ送った場合に特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した時、墓地へ送った獣族モンスターのレベルを確認し、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。そのレベルの数だけこのカードのレベルを上げる。そのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。

《キーマウス》

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/獣族/攻 1000/守 1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル3以下の獣族モンスター1体を手札に加える事ができる。

ゆりな

キーマウス 墓地

虚栄の大猿 (ATK1200)

5 4

「そしてロックキャットを召喚っ！効果で墓地のレベル1の獣族モンスター、キーマウスの効果を無効にして守備表示で特殊召喚」

ゆりな

虚栄の大猿 (ATK1200)

ロックキャット (ATK1200)

キーマウス (DEF100)

ロックキャットは出てくると(多分墓地から)キーマウスを口に加えてボクの場に放り出して……あれ？何故かじーっと見てる?! た、食べちゃダメだからね？キーマウスも怖がって目がうるうるしてるしっ

「そ、それじゃレベル3のロックキャットにレベル4の虚栄の大猿をチューニングっ」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚っ！《ボルテック・バイコーン》!!」

《ボルテック・バイコーン》

シンクロ・効果モンスター

星7 / 光属性 / 獣族 / 攻2500 / 守2000

獣族チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手によって破壊された場合、お互いのプレイヤーはデッキの上からカードを7枚墓地へ送る。

ゆりな

キーマウス（DEF100）

ボルテック・バイコーン（ATK2500）

ロックキャットと虚栄の大猿が光の輪になって中からボルテック・バイコーンが走ってくる。いつも思っただけどモンスターのキンに似てるよね

「（あのモンスターは破壊されたらお互いのデッキを削るカード……）その瞬間、奈落の落とし穴を発動するぜ！ボルテック・バイコーンを破壊して除外する！」

「うにゃ？じゃあ手札からチェーンで《収縮》を発動してボルテック・バイコーンの攻撃力を半分にするよ」

《くちくちく収縮》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる

ボルテック・バイコーン（ATK2500 1250）

「ちい……」

収縮の効果を受けてキリ……じゃなくてボルテック・バイコーンは小さくなった。危ない危ない……除外だけは勘弁っ

・Side 夜一

「あれ？何で破壊されないの？」

俺達は大人しくデュエルを見てみると、突然葵は疑問点について聞いてきた。今の場面を理解できなかったようだ

「ボルテック・バイコーンは収縮で攻撃力が1500より下になっただら？だから奈落の落とし穴の対象から逃れたんだ」

「ふえ〜……難しい」

「まあ、そのうち慣れるさ」

そういつてまたデュエルをしているゆりなに視線を向ける。にしても相手はジエムナイトか。融合モンスターの効果による除去が豊富なうえ簡単に展開できるのが厄介だな……あのカードさえ潰せばかなり有利になるんだがゆりなが気付くか、だな

・Side ゆりな

「それじゃボクはレベル7のボルテック・バイコーンにレベル1のキーマウスをチューニング！」

7 + 1 = 8

「シンクロ召喚！来てっ、《ライトニング・トライコーン》！！」

《ライトニング・トライコーン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 光属性 / 獣族 / 攻2800 / 守2000

チューナー+チューナー以外の獣族モンスター1体以上

このカードが相手によって破壊された場合、自分の墓地に存在する「サンダー・ユニコーン」または「ボルテック・バイコーン」1体

を選択して自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ゆりな

ライトニング・トライコーン（ATK2800）

ボルテック・バイコーンとキーマウスが光の輪になり、新しくボクの上に金ぴかの馬が出てきた。馬……だよね？

「よし、バトル！いっけ！ライトニング・トライコーン。ジェムレシスを攻撃だあ」

ライトニング・トライコーンはジェムレシスに体当たりする。ジェムレシスは破壊されて場から消えた

藤島 LP：4000 2900

ジェムレシス 破壊

「くう……やるな」

「よっし！カードを2枚伏せてエンドだよ」

ゆりな LP：4000

手札 0枚

ライトニング・トライコーン（ATK2800）

伏せ×2

藤島 LP：2900

手札 4枚

伏せ×1

「次はこっちからいくぜ！俺様のターン！」

藤島 手札 4 5

「《ジエムナイト・アレキサンド》を召喚！」

《ジエムナイト・アレキサンド》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1800 / 守1200

このカードをリリースして発動する。自分のデッキから「ジエムナイト」と名のついた通常モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

藤島

ジエムナイト・アレキサンド（ATK1800）

相手の場に白い宝石が出てきて、中から白い人型のモンスターが現れた。戦士族みたいだけど……どうなんだろ？

「そして俺様はジエムナイト・アレキサンドの効果を発動！このカードをリリースしデッキから通常モンスターのジエムナイトを呼び出す！現れる、《ジエムナイト・クリスタ》！！」

《ジエムナイト・クリスタ》

通常モンスター

星7 / 地属性 / 岩石族 / 攻2450 / 守1950

クリスタルパワーを最適化し、戦闘力に変えて戦うジエムナイトの
上級戦士。その高い攻撃力で敵を圧倒するぞ。しかし、その最適化
には限界を感じる事も多く、仲間たちとの結束を大切にしている。

藤島

ジエムナイト・クリスタ（ATK2450）

ジェムナイト・アレキサンドが輝き、光が止むとクリスタルが装飾された銀色の鎧を身につけた戦士が出てきた

「そして俺様は手札から魔法カード、《ジェムナイト・フュージョン》を発動！」

《ジェムナイト・フュージョン》

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、「ジェムナイト」と名のついた融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。また、このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地に存在する「ジェムナイト」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札に加える。

ジェムナイト・フュージョン？専用の融合カードかな？だとするとジェムナイトは融合召喚をメインに戦うカード郡なのかも。融合モンスターはE・HEROのように厄介な効果を持っている可能性が高いなあ

「とゆことでボクはリバーズカード、《マジック・ドレイン》を発動するよ！」

《マジック・ドレイン》

カウンター罫

相手が魔法カードを発動した時に発動する事ができる。

相手は手札から魔法カード1枚を捨ててこのカードの効果を無効にする事ができる。

捨てなかった場合、相手の魔法カードの発動を無効にし破壊する。

「手札から魔法を捨てなければジェムナイト・フュージョンは無効だよっ！」

「まあいいだろう」

ジェムナイト・フュージョン 無効

ありや、意外とあっさり無効にできちゃった。これで動きは止まってくるはず

「ならば俺様は墓地のジェムナイト・フュージョンの効果を発動！このカードは墓地のジェムナイトと名のつくを除外する事で手札に戻る…… ジェムナイト・アレキサンドを除外！！」

ジェムナイト・アレキサンド 除外

ジェムナイト・フュージョン 手札

「うにゃ！？墓地から回収出来るの？」

ミスった！それじゃジェムナイト・フュージョンを止めても墓地にコストさえあれば何度でも戻せるじゃん！

「そしと俺様は手札のジェムナイト・ガネットと《ジェムナイト・ルマリン》を融合だ！」

《ジェムナイト・ルマリン》

通常モンスター

星4 / 地属性 / 雷族 / 攻1600 / 守1800

イエロートルマリンの力で不思議なエナジーを創りだし、戦力に変えて戦うぞ。彼の刺激的な生き方に共感するジェムは多い

ジェムナイト・ガネット + ジェムナイト・ルマリン 融合

「輝け！《ジェムナイト・ルビーズ》！！」

《ジェムナイト・ルビーズ》

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 炎族 / 攻2500 / 守1300

「ジェムナイト・ガネット」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ジェム」と名のついたモンスター1体をリリースして発動する事ができる。
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時までリリースしたモンスターの攻撃力分アップする。また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

藤島

ジェムナイト・クリスタ (ATK2450)

ジェムナイト・ルビーズ (ATK2500)

相手の場に赤いの(多分ガネット)と黄色いの(多分ルマリリン)がでてきて渦に吸い込まれ、新しく槍を持った赤い鎧のモンスターがでる。マントがカッコイね

「ふはは！まだだ。手札から魔法カード、闇の量産工場を発動！」

《闇の量産工場》

通常魔法

自分の墓地に存在する通常モンスター2体を選択して発動する。選択したモンスターを自分の手札に加える。

「効果で墓地に眠るジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリリンを手札に加える」

ジエムナイト・ガネット 手札
ジエムナイト・ルマリン 手札

むう……通常モンスターだから回収しやすいよお！また展開……あれ？

「墓地にもうジエムナイトいない？」

「やたっ これでこのターンはもう融合出来ない」

「いなければ送ればいい。俺様の場のジエムナイト・クリスタをリリースし、ジエムナイト・ルビーズの効果を発動！リリースしたジエムナイトの攻撃力の数値分、ジエムナイト・ルビーズの攻撃力をエンドフェイズまで上げるぜ！！」

「……へ？」

藤島

ジエムナイト・クリスタ リリース

ジエムナイト・ルビーズ (ATK2500 4950)

高っ！？ライトニング・トライコーンの攻撃力越えられちゃったし！

「そして墓地のジエムナイト・クリスタを除外しジエムナイト・フュージョンを回収！いくぜ！ジエムナイト・フュージョンっ！！」

ジエムナイト・クリスタ 除外

ジエムナイト・フュージョン 手札

「手札のジエムナイト・ガネットとジエムナイト・ルマリンを融合！輝け！《ジエムナイト・プリズムオーラ》！！」

《ジエムナイト・プリズムオーラ》

融合・効果モンスター

星7/地属性/雷族/攻2450/守1400

「ジエムナイト」と名のついたモンスター+雷族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札から「ジエムナイト」と名のついたカード1枚を墓地へ送って発動する事ができる。フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

藤島

ジエムナイト・ルビーズ(ATK4950)

ジエムナイト・プリズムオーラ(ATK2450)

「さらにジエムナイト・ガネットを除外しジエムナイト・フュージョンを回収」

ジエムナイト・ガネット 除外

ジエムナイト・フュージョン 手札

「そして俺様はリバーカード、《D・D・R》発動！ジエムナイト・フュージョンを捨てて除外されているジエムナイト・クリスタを特殊召喚！」

《D・D・R(ディアファレント・ディメンション・リバイバル)》

装備魔法

手札を1枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター1体を選択して攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

ジエムナイト・フュージョン 墓地

藤島

ジェムナイト・ルビーズ（ATK4950）

ジェムナイト・プリズムオーラ（ATK2450）

ジェムナイト・クリスタ（ATK2450）

＋D・D・R

「さらにジェムナイト・ルマリンを除外しジェムナイト・フュージョンを回収」

ジェムナイト・ルマリン 除外

ジェムナイト・フュージョン 手札

「凄い展開力……でもこれならライトニング・トライコーンが破壊されてもまだボルテック・バイコーンが出てくるから耐えられる！」「ジェムナイト・プリズムオーラの効果を発動！ジェムナイト・フュージョンを捨てて相手の表側表示で存在するカードを一枚破壊だ。対象はライトニング・トライコーン！」

「うにゃ！！？」

ジェムナイト・フュージョン 墓地

ライトニング・トライコーン 破壊

「うう……ライトニング・トライコーンの効果を発動！相手に破壊された事で、墓地からボルテック・バイコーンを特殊召喚だよ！！」

ゆりな

ボルテック・バイコーン（ATK2500）

マズイ……これじゃ耐えきれない

「いくぜ！ジエムナイト・ルビーズでボルテック・バイコーンを攻撃！」

ゆりな LP：4000 1550

ボルテック・バイコーン 破壊

「きやう！……この瞬間、ボルテック・バイコーンの効果を発動。お互いデツキトップから7枚墓地に送るよ」

「ふ……無駄な」

確かにね。ボクの場合に残されたのはリバースカードが一枚。防御できるカードじゃないからこのままじゃ負けだよ。でも、最後にボルテック・バイコーンの効果処理をする……まだ諦めたわけじゃないから

「俺様のデツキトップから送られるのは……」

ジエムナイト・エメラル 墓地

異次元からの帰還 墓地

サイクロン 墓地

冥府の使者 ゴース 墓地

死者蘇生 墓地

闇の量産工場 墓地

ジエムナイト・フュージョン

「ボクのデツキから落ちるのは……」

ロックキャット 墓地

貪欲な壺 墓地

チェインドック 墓地

グローアップ・バルブ 墓地

ハリケーン 墓地

ネコマネキング 墓地

最後の一枚……ゆっくりとデッキからカードを引く。このカードに全てがかかっているから。願いを込めて……
「……っ！」

ダンディライオン 墓地

ゆりな

綿毛トークン (DEF0)

綿毛トークン (DEF0)

「何！？何故トークンが……！」

「墓地に送られたダンディライオンの効果が発動したんだよ。このカードは墓地に送られた時に綿毛トークンを2体特殊召喚するの」

《ダンディライオン》

効果モンスター (制限カード)

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」(植物族・風・星1・攻/守0)2体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

「く！だが1ターン延びただけだ……ジェムナイト・プリズムオーラとジェムナイト・クリスタで綿毛トークンを攻撃！」

ゆりな

綿毛トークン 破壊

綿毛トークン 破壊

「俺様のターンはエンド。ジェムナイト・ルビースの攻撃力は元に戻る」

藤島 LP：2900

手札 0枚

ジェムナイト・ルビース（ATK4950 2500）

ジェムナイト・プリズムオーラ（ATK2450）

ジェムナイト・クリスタ（ATK2450）

・DDR

伏せ×0

ゆりな LP：1550

手札 0枚

伏せ×1

なんとか耐えた。でも多分このターンで決着をつけないと次のターンは防ぎきれそうにないかな……

「ボクの……ターン」

カードを引こうとするけど手が震える。初めての大会、折角ここまで来たのに、全てがこのドローにかかっていると思うと怖くて引けないよ……

「ゆりな！自分を、自分のデッキを信じる！！最後まで諦めるな！！」

「がんばって、ゆりな！」

「夜一、さん……葵……」

そんなボクに観戦していた夜一さんと葵は応援してくれる。すると何だか勇気が出てきた……そうだね。諦めちゃダメだよ、

さっきだつてこの子達はボクを守ってくれたのに
「にははは、ありがとっ ドロー!」

ゆりな 手札0 1

だから、ボクは勝ちたい!!だから力を貸して!!

「ボクは貪欲な壺を発動!墓地のライトニング・トライコーン、ボ
ルテック・バイコーン、ロックキャット2体、ダンディライオンを
デッキに戻して2枚ドロー!」

「なに!ここでドローカードだと!?!」

ゆりな 手札0 2

「ボクは金華猫を召喚!墓地のキーマウスを特殊召喚するよ!」

《金華猫》きんかびよう

スピリットモンスター

星1/闇属性/獣族/攻 400/守 200

このカードは特殊召喚できない。召喚・リバースしたターンのエン
ドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。このカードが召喚・リバース
した時、自分の墓地に存在するレベル1のモンスター1体を自分フ
ィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上
から離れた時、この効果で特殊召喚したモンスターをゲームから除
外する。

ゆりな

金華猫(ATK400)

キーマウス(ATK100)

金華猫が出てくると、さっきみたいに(多分墓地から)キーマウ

スを口に加えて来てボクの場に放り出す

「さらに墓地にいるチェインドックの効果！ボクの場に獣族モンスターが2体いるとき墓地から特殊召喚！」

ゆりな

金華猫（ATK400）

キーマウス（ATK100）

チェインドック（ATK1600）

「レベル4のチェインドックにレベル1のキーマウスをチューニング！」

4 + 1 = 5

「シンクロ召喚！ナチュラル・ビースト！」

《ナチュラル・ビースト》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 地属性 / 獣族 / 攻2200 / 守1700

地属性チューナー+チューナー以外の地属性モンスター1体以上

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る事で、魔法カードの発動を無効にし破壊する。

ゆりな

金華猫（ATK400）

ナチュラル・ビースト（ATK2200）

緑色の体をした虎がボクの場に現れる。ナチュラル・ビースト、昨日夜一さんから貰ったカード

「そしてデッキトップから1枚墓地に送って、墓地からグローアップバルブを特殊召喚するね。」

デスハムスター 墓地

ゆりな

金華猫（ATK）

ナチュル・ビースト（ATK2200）

グローアップバルブ（DEF100）

「レベル1の金華猫にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 1 = 2

「シンクロ召喚！《フォーミュラ・シンクロン》！！効果でシンクロ召喚時に1枚ドロー！」

《フォーミュラ・シンクロン》

シンクロ・チューナー（効果モンスター）

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 200 / 守 1500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる

ゆりな 手札 1 2

ナチュル・ビースト（ATK2200）

フォーミュラ・シンクロン（DEF1500）

「さらにボクは手札から《おろかな埋葬》を発動してデッキから《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送るね。そしてボクの場合にチューナーがいるから墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動！ボクの場合に特殊召喚！」

《おろかな埋葬》まいそつ

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

《ボルト・ヘッジホッグ》

効果モンスター

星2/地属性/機械族/攻 800/守 800

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

ボルト・ヘッジホッグ 墓地

ゆりな

ナチュル・ビースト（ATK2200）

フォーミュラ・シンクロン（DEF1500）

ボルト・ヘッジホッグ（DEF800）

体にネジのついたオレンジ色の可愛いネズミが出てくる

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

2 + 2 = 4

「シンクロ召喚！《アームズ・エイド》……！」

《アームズ・エイド》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1800 / 守1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

ボルト・ヘッジホッグ 除外

ゆりな

ナチュル・ビースト（ATK2200）

アームズ・エイド（ATK1800）

「アームズ・エイドの効果を発動！ナチュル・ビーストに装備するね。攻撃力を1000ポイントアップ」

ゆりな

ナチュル・ビースト（ATK2200 3200）

「アームズ・エイド

よし！これで準備かんりよ〜だねっ

「攻撃力3200……だがジェムナイト・プリズムオーラかクリスタを攻撃しても残念だが俺様のライフは残るな」

「そっかな？それじゃ試してみよう ナチュル・ビーストでジェムナイト・プリズムオーラに攻撃！」

ナチュル・ビーストはジェムナイト・プリズムオーラに攻撃を仕掛ける。何とか主人を守ろうとジェムナイト・プリズムオーラは防

御するが、攻撃力で負けてしまう

藤島 LP:2900 2150

ジエムナイト・プリズムオーラ 破壊

「これで750ダメージ」

「く……だが「そしてアームズ・エイドの効果発動！」なんだとっ
!?!」

「アームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘で破壊したモンス
ターの攻撃力分、2450ダメージを相手に与えるね」

「な、何だとおおお!!!?」

アームズ・エイドはナチュラル・ビーストから離れ、相手さんに飛
んでいった

「ゲーム・エンド、だよ」

藤島 LP:2150 0

第十一話 決勝戦二回戦目 VS 科学属

『フィニーツシユ！一回戦目のデュエル終了！！勝者はチーム「死の合唱」の春風 ゆりなちゃんです！次のデュエルは5分後に始めますので各チームはメンバーを決めておいて下さいね』

「わ〜わ〜！」

ゆりなの健闘に観客達は盛大な拍手を送る。送られている本人はやや恥ずかしかったのか、すぐに此方に走ってきた

「お帰りゆりな！もうちょっとあの場にいれば良かったのに」

そういつて葵はゆりなを迎える。確かにな、折角勝ったんだからあの雰囲気を楽しんできてもいいと思う

「にははは……ああいう雰囲気には慣れてないよ〜」

「ただど悪くはないね」と付け足す。その顔は満足げに笑っていた「お疲れさん。楽しめたようでなによりだ」

「うん」

「にしても凄いデュエルだったな。あの場面でダンディライオン、そして次のターンにしめるとは」

俺はナチュル・ビーストでジェムナイト・フュージョンを封殺して、後はビートと考えていた。だがまさかのアームズ・エイド……

「にははは それで次はどうするのかな？」

「そういうと俺とゆりなは葵に視線を向ける。葵は少しキョトンとしてから

「ふえ……私？」

「嫌なら別に俺が行ってもいいんだけどな？」

葵が迷っているので俺がデュエルスペースに行こうとする。すると葵に服を捕まれ止められた

「だ、だめ！」

「止めてくれるな葵。お前のためなら俺はこのデュエル、ワンキルや特殊勝利だとしてやる！」

「いやいや!?」

む、二人から全力で否定されちゃった。まあ俺のデッキじゃワンキルや特殊勝利なんてできないんだけどな

「うっ！私もまだデュエルしたいの！」

ありや……まあそうだろう、わかっただけだ。……にしてもぶくくと頬を膨らませて怒っている姿が可愛いな

「すまんすまん、冗談だよ。行ってこい葵！期待してるぜ」

俺はすぐに謝ると葵をデュエルスペースに送り出す。これ以上からかすと本気で泣く可能性があるからなあ……葵はというと最初はやや不満げに唸っていたが、すぐに嬉しそうに走っていった

・Side 葵

はう……兄さん、私に期待してるって言うてくれたよね？

嬉しさを隠せずにデュエルスペースに入ると、もう相手チームの人は待ってた。待たせちゃったかな？……あ、ちょうど店長さんがマイクを取りだして出てきた

『各チーム、メンバーが決まったようですよ！チーム「死の合唱」からは水城 葵ちゃん、チーム「デステイニー」からは竹中君です』

「よろしくな葵ちゃん。楽しいデュエルをしようぜ！」

相手さんは竹中さんって言うらしい。なんか熱血な人だね……やりづらいよあ

「よ、よろしく……」

「どうした？声が小さいな。まあいいか、全力で行かせて貰うぜ！」

「ふえ？は、はい！」

うっ、このままじゃペースを飲まれちゃう……ダメだよ私！兄さんの為にも期待に答えなくちゃっ

「デュエル！」

葵 LP：4000

竹中 LP：4000

「私のターンだよ。ドロー！」

葵 手札5 6

「モンスターをセット。そして手札からおろかな埋葬を発動！デッキからモンスターを一体墓地に送ってエンドだよ」

葵 LP：4000

手札 4枚

・ ??? (裏守備)

・ 伏せ×0

1ターン目でモンスターは魔知ガエル、リバーズは無いけど墓地には黄泉ガエルを送れたからまずまずのスタート……だよな？

「流石に初めは大人しいか。おれのターンだ！ドロー！」

竹中 手札5 6

竹中さんは勢い良くカードを引く。どんなデッキをつかうのかな？

「いくぜっ！手札からチューナーモンスター、TG ストライカーを特殊召喚！」

《デッキナーナス TG ストライカー》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 地属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守

0

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから「TG ストライカー」以外の「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

竹中

TG ストライカー（DEF：0）

竹中さんの場に機械のスイツ……かなあ？そんな感じのを身につけた人のモンスターが出てきた。予選の時にも1枚だけ使われたけどTGっていうカード郡なのかな？

「……って、特殊召喚!？」
簡単に出てきたよ？鬼ガエルみたいに手札一枚捨てるとかは無いみたいけど……」

「コイツは自分の場にモンスターが存在せず相手の場にのみモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚できるんだ」

ほえ……それじゃ手札にチューナー以外のモンスターがいればこのターンでシンクロ召喚できちゃうんだね。強いなあ

「そしてオレはカードガンナーを召喚!カードガンナーの効果でデッキから3枚墓地に送り、攻撃力を1枚につき500ポイントアップさせる!」

《カードガンナー》

効果モンスター（準制限カード）

星3/地属性/機械族/攻 400/守 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。また、自分フ

イールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

竹中

TG ストライカー（DEF：0）

カードガンナー（ATK：400 1900）

新たに赤い機械のモンスターが出てきた。これでモンスターが2体揃っちゃったよ……やっぱりシンクロかな？

「そしてレベル3のカードガンナーにレベル2のTG ストライカーをチューニング！」

3 + 2 = 5

「リミッター解放レベル5（ファイブ）！レギュレーターオープン！ スラスターウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリアー！ ゴー、シンクロ召喚！現れる、TG ハイパー・ライブラリアン！」

デッキジーンラス

《TG ハイパー・ライブラリアン》

シンクロ・効果モンスター

星5/闇属性/魔法使い族/攻2400/守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在し、自分または相手がシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

竹中

TG ハイパー・ライブラリアン（ATK：2400）

TG ストライカーとカードガンナーが光の輪になり、本を持った司書が出てきた。いいなあ……私もシンクロしたいなあ
「バトル！TG ハイパー・ライブラリアンでセットモンスターを攻撃だ！！」

魔知ガエル 破壊

竹中さんが攻撃宣言すると、ライブラリアンは本から波動を出して魔知ガエルを攻撃し破壊した

「でもこの瞬間、魔知ガエルの効果を発動だよ！デッキから鬼ガエルを手札に加えるね」

鬼ガエル 手札

葵 手札 4 5

「なら、オレはカードを1枚セットしてエンド」

竹中 LP：4000

手札 3枚

TG ハイパー・ライブラリアン（ATK：2400）

・伏せ×1

葵 LP：4000

手札 5枚

・伏せ×0

竹中さんの場にはライブラリアン1体とセットカード……セットが気になるけど、ここはライブラリアンを倒しに行こう

「私のターン、ドロー！」

葵 手札5 6

「スタンバイに墓地から黄泉ガエルを特殊召喚！」

葵

黄泉ガエル（ATK：1000）

私を守るように天使の羽が生えたカエルが私の前に舞い降りる。

一緒に頑張ろうね

「おろかな埋葬で送ってたのか」

「そして鬼ガエルを召喚！効果でデッキから水族・水属性・レベル2以下のモンスターを1体墓地に送るね」

葵

黄泉ガエル（ATK：1000）

鬼ガエル（ATK：1000）

私の場に角が生えた黄色の体をしたカエルが飛び跳ねながら出てきた

「鬼ガエルの効果で鬼ガエルを手札に戻して、手札の水属性モンスターを捨てて鬼ガエルを特殊召喚！またデッキから1体、墓地に送るね！そして手札から湿地草原と一族の結束を発動！」

葵

- 湿地草原 -

黄泉ガエル（ATK：1000 21000）

鬼ガエル（ATK：1000 30000）

・ 一族の結束

私と竹中さんの周りに草原が現れ、雨が降りだす。黄泉ガエルと

鬼ガエルは嬉しそう

「すげ！2000ポイントも上がった」

「湿地草原は場の水族・水属性・レベル2以下のモンスターは攻撃力が1200ポイント、一族の結束は私の墓地にいるモンスターの種族が一種類の場合、私の場にいるその種族のモンスターは攻撃力が800ポイントアップするよ」

これでライブリアンを戦闘破壊できるようになった……迷わずにバトルだね！

「いくよ皆！まずは鬼ガエルでTG ハイパー・ライブリアンを攻撃――！」

「く……」

竹中 LP：4000 3400

TG ハイパー・ライブリアン 破壊

お、セットカードは発動されなかったね。攻撃反応型のカードじゃないみたい

「黄泉ガエル、ダイレクトアタックだよ！」

「ぐあぁっ――！」

竹中 LP：3400 1300

よし、結構ライフを減らせた！このまま押しきりたい！

「ターンエンドだよ」

葵 LP：4000

手札 2枚

- 湿地草原 -

黄泉ガエル (ATK：2100)

鬼ガエル (ATK：3000)

- ・一族の結束
- ・伏せ×0

竹中 LP：1300

手札 3枚

- ・伏せ×1

「大分削られちゃったな……だがまだだ！オレのターン！」

竹中 3 4

「来い。チューナーモンスター、TG サイバー・マジシャン！」

デッキジナーナス

《TG サイバー・マジシャン》

チューナー（効果モンスター）

星1/光属性/魔法使い族/攻

0/守

0

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを「TG」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ素材とする場合、手札の「TG」と名のついたモンスターを他のチューナー以外のシンクロ素材にする事ができる。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから「TG サイバー・マジシャン」以外の「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

竹中

TG サイバー・マジシャン（ATK：0）

ちっちゃい魔法使いの男の子が出てきた。あのモンスターもチューナー……どんな効果を持つてるんだろ？

「このモンスターは手札のTGと名のつくモンスターとシンクロす

る事ができる。手札のレベル4、TG ラッシュ・ライノとチューニング！」

「え？手札のモンスターとシンクロできるの!？」

4 + 1 = 5

「リミッター開放レベル5（ファイブ）！ブースターランチ、オーケー！ インクリネイション、オーケー！グランドサポート、オールクリアー！ ゴー、シンクロ召喚！カモン！シンクロチューナー、TG ワンダー・マジシャン!！」

《^{デッキジーナス}TG ワンダー・マジシャン》

シンクロ・チューナー（効果モンスター）

星5 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻1900 / 守 0

チューナー+チューナー以外の「TG」と名のついたモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊する。フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分のデッキからカードを1枚ドロースする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚することができる。

竹中

TG ワンダー・マジシャン（ATK:1900）

手札から出てきた猪のようなモンスターとサイバー・マジシャンが光の輪になり、中からピンク色の髪をした綺麗な女の子が出てきた。シンクロチューナーって事はあのモンスターもチューナーなのかな？

「TG ワンダー・マジシャンがシンクロ召喚に成功した時に効果を発動！葵ちゃんの場の湿地草原を破壊させてもらうぜっ！」
「ふえ?!」

湿地草原 破壊

黄泉ガエル（ATK：2100 900）

鬼ガエル（ATK：3000 1800）

ワンダー・マジシャンが頭上の球体から光線を出して湿地草原を破壊しちゃった。周りの草原が消えて元のデュエルスペースに戻る。鬼ガエル達は何だか不満そうに私を見て……って、私のせいじゃないよお?!

「さあいくぜ！TG ワンダー・マジシャンで黄泉ガエルを攻撃！」
「きやつ」

葵 LP：4000 3000

黄泉ガエル 破壊

ワンダー・マジシャンは黄泉ガエルの方に飛んでくると、パンチで攻撃してきた。あれ？さっきは球体から光線出してたのに?!

「そしてTG ワンダー・マジシャンが戦闘で相手のモンスターを破壊した瞬間、リバーカード発動！TG - SX1!!」

《TG - SX1》

通常罫

自分フィールド上に存在する「TG」と名のついたモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に発動する事ができる。自分の墓地に存在する「TG」と名のついたシンクロモンスター1体を選択して特殊召喚する

「効果で墓地からTGと名のつくシンクロモンスターを特殊召喚！
来い、TG ハイパー・ライブラリアン！！」

竹中

TG ワンダー・マジシャン（ATK：1900）

TG ハイパー・ライブラリアン（ATK：2400）

「そ、そんなあ……」

さつき頑張つて倒したのに戻つて来ちゃった

「TG ハイパー・ライブラリアンで鬼ガエルを攻撃！」

葵 LP：3000 2400

鬼ガエル 破壊

うう、折角出した子達は皆倒されちゃったよ。そのうえ相手の場には2体のシンクロモンスター……次のターンでどうにかしないと！
「それじゃバトル終了！メイン2にオレはレベル5のTG ハイパー・ライブラリアンにレベル5のTG ワンダー・マジシャンをチューニング！」

5 + 5 = 10

「2体のシンクロモンスターをチューニング?!」
しかもレベルは10。どんなモンスターが出てくるのかな？
「リミッター解放レベル10（テン）！メインバスブースターコントロール、オールクリアー！ 無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め！ ゴー、アクセルシンクロ！カモン、TG ブリード・ガンナー！」

デッキジナーナス

《TG ブレード・ガンナー》

シンクロ・効果モンスター

星10/地属性/機械族/攻3300/守2200

シンクロモンスターのチューナー1体+チューナー以外のシンクロモンスター1体以上

このカードを対象とする相手の魔法・罫カードが発動した時、手札を1枚墓地へ送る事で、その効果を無効にする。また、相手ターンに1度、自分の墓地に存在する「TG」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外する。次のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

竹中

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

ワンダー・マジシャンが五つの光の球になり、ハイパー・ライブラリアンが緑色の光の輪になる。そして輪の中に光が差し込み中から新たに緑の体をした戦士のモンスターが出てきた。攻撃力3300……凄いいけど多分それだけじゃないよね
「そしてカードを2枚セットしてターンエンド!!」

竹中 LP：1300

手札 0枚

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

・伏せ×2

葵 LP：2400

手札 2枚

・一族の結束

・伏せ×0

手札を全部伏せてきた。気を付けるべきなのは確か召喚反応型の罠……だっけ？あとはカウンター罠とかかな

「まあ、考えても何も変わらないよねっ！私のターン！」

葵 手札2 3

「手札から魔法カード、強欲なウツボを発動！」

《強欲なウツボ》

通常魔法

自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「手札のサシカエルと貫ガエルをデッキに戻して3枚ドローするよ！」

ちなみに貫ガエルは今引いたカード。前のターンにガエルを引けていれば勝ってたけどそれは仕方がないや

葵 手札0 3

「……きたっ！それじゃ墓地の鬼ガエルを除外して墓地から粹カエルを特殊召喚！！」

葵

粹カエル（DEF：2000）

私の前に煙管を加え、刀を持ったカエルが意気揚々と現れる

「……やる気満々なのにゴメンね？粹カエルをリリースしてデスクガエルをアドバンス召喚っ！」

葵

粹カエル リリース

デスガエル（ATK：1900 2700）

・一族の結束

粹カエルの声がフィードバックしながらシンプルな緑色のカエルが私の前に出てきた。そして仲間を呼ぶために鳴き出す

「アドバンス召喚に成功した時にデスガエルの効果を発動！墓地の悪魂邪苦止の数までデッキ・手札からデスガエルを特殊召喚できるよ！墓地には2体いるからデッキと手札から1体ずつ呼ぶねっ！」

葵

デスガエル（ATK：2700）

デスガエル（ATK：1900 2700）

デスガエル（ATK：1900 2700）

・一族の結束

1体目のデスガエルの呼びかけに応えて2体目、3体目のデスガエルが私の前に現れた

「成る程、粹カエルと悪魂邪苦止は前のターンに鬼ガエルで落としておいたんだな。だがそんな攻撃力じゃ、オレのブレード・ガンナーは倒せないぜ？」

「確かに。でも戦闘で倒せないんだっいたらカードの効果を使って破壊するまでだよ！手札から魔法カード、死の合唱を発動っ！」

死の合唱が発動されると私の場のデスガエル達は綺麗に横に並び、そして一斉に鳴き出し、その衝撃が相手の場のカードを襲う

「このカードは私の場にデスガエルが3体いる時に発動できる魔法カード。効果は相手の場に存在するカードを全て破壊する、だよ！」
「んなっ！？だったらチェインしてTG ブレード・ガンナーの効

果を発動！」

む！やっぱり何か効果を持つてたみたいだね

「相手のターンに一度だけ墓地のTGと名のつくモンスターを1体除外することで、このカードを次のスタンバイまで除外する！TG
ラッシュ・ライノを除外」

TG ラッシュ・ライノ 除外

「ふえ！？」

そんな効果があつたんだ……でもこれでモンスターは消える！セ
ットを破壊できればっ

「そしてリバースカード、TGX3 - DX2発動！」

《TGX3 - DX2》

通常罫

自分の墓地に存在する「TG」と名のついたモンスター3体を選択
して発動する。選択したモンスターをデッキに加えてシャッフルす
る。その後、自分のデッキからカードを2枚ドロウする

「墓地のTGと名のつくモンスターを3体デッキに戻して2枚ドロ
ウするカードだ。TG ハイパー・ライブラリアン、TG TG
ストライカー、TG サイバー・マジシャンを選択するぜ？さらに
チェーンしてリビングデッドの呼び声を発動！それじゃまずはリビ
ングデッドの効果で墓地からTG ワンダー・マジシャンを特殊召
喚！」

《リビングデッドの呼び声》

永続罫（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスター

を破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

竹中

TG ワンダー・マジシャン（ATK：1900）

・リビングデッドの呼び声

全部フリーチェーンだったんだ……でも防御カードは無かったみたいだね

「今モンスターを出しても破壊だよ？」

「まあな。とりあえずTGX3 - DX2の効果で3枚デッキに戻して2枚ドロー！」

竹中 手札0 2

「そしてTG ブレード・ガンナーの効果、次のターンまで除外する」

TG ブレード・ガンナー 除外

ブレード・ガンナーは次元に裂け目を作り出し、中へと消えた
「それじゃ死の合唱の効果で破壊だよ！」

TG ワンダー・マジシャン 破壊

リビングデッドの呼び声 破壊

TGX3 - DX2 破壊

これで場にカードはなくなったよ！あとは攻撃すれば勝てるっ
「オレはまだ諦めはしない！破壊されたTG ワンダー・マジシャンの効果を発動！1枚ドローするぜ！」

竹中 手札2 3

へえ〜。ワンダー・マジシャンは破壊されたらドローする効果を持つてたんだ

「でも手札を増やしたって意味無いよ！デスガエルでダイレクトアタック！！」

デスガエルは大きく口を開けて鳴き、衝撃が相手を襲う

「葵ちゃん、手札は無限の可能性なんだ、無意味なんかじゃないぜ！手札からバトルフェーダーの効果を発動！！」

《バトルフェーダー》

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

竹中 LP:1300

バトルフェーダー (DEF:0)

「ふえ！？」

どこからか鐘の音がしたかと思うと、竹中さんの場に振り子時計のようなモンスターが出てきた

「相手の直接攻撃時、このカードは特殊召喚され、このターンのバトルフェイズを終了する！」

「そんなあ！？」

死の合唱まで使ったのにこのターンで倒せなかったなんて……私の手札は0、もう何も出来ない。不安だけどこのまま終了するし

かないや

「うっ、ターンエンドだよ」

葵 LP：2400

手札 0枚

デスガエル（ATK：2700）

デスガエル（ATK：2700）

デスガエル（ATK：2700）

・一族の結束

・伏せ×0

竹中 LP：1300

手札 2枚

バトルフェーダー（DEF：0）

伏せ×0

「オレのターンだ、ドロー！」

竹中 手札2 3

「スタンバイ、舞い戻れ！TG ブレード・ガンナー！」

竹中

バトルフェーダー（DEF：0）

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

先ほどの次元の裂け目からブレード・ガンナーが竹中さんの場に
戻ってくる

「バトル！TG ブレード・ガンナー、デスガエルを攻撃しろ！」

「きゃっ、デスガエル……っ！」

葵 LP：2400 1800
デスガエル 破壊

ブレード・ガンナーは剣を振り上げ、デスガエルに襲いかかる。
デスガエルは私を守ろうとしたけど抵抗すらできずに破壊された
「モンスターをセット、ターンエンドだ！」

竹中 LP：1300

手札 2枚

バトルフェーダー（DEF：0）

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

???（裏守備）

・伏せ×0

葵 LP：1800

手札 0枚

デスガエル（ATK：2700）

デスガエル（ATK：2700）

・一族の結束

・伏せ×0

このままじゃ私のモンスターは皆倒されちゃう……次のドロで
今の状況を切り抜けなくちゃ……

「私のターン、ドロー!!」

葵 手札0 1

「……やたっ！貪欲な壺を発動！！悪魂邪苦止2体と黄泉ガエル、
デスガエル、そして魔知ガエルを戻して2枚ドロー！」

葵 手札0 2

引いたカードを見る。よし、これなら……

「バトル！デスガエルでバトルフェーダーを攻撃だよ！」

バトルフェーダー 破壊

「さらにもう1体のデスガエルでセットモンスターを攻撃っ！」

TG ワーウルフ 破壊

デッキジーンラス

《TG ワーウルフ》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 獣戦士族 / 攻1200 / 守 0

レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから「TG ワーウルフ」以外の「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

デスガエルがセットモンスターに攻撃すると、機械の腕がついた狼が現れ、破壊された

「それじゃカードを2枚セットして、ターンエン」

「エンドフェイズ！破壊されたTG ワーウルフの効果を発動！」

「ふえ！？」

「デッキからTG ワーウルフ以外のTGと名のつくモンスターを手札に加える。TG カタパルト・ドラゴンを手札へ」

デッキジーンラス

《TG カタパルト・ドラゴン》

効果モンスター

星2 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻 900 / 守 1300

1ターンに1度、手札からレベル3以下の「TG」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

TG カタパルト・ドラゴン 手札

竹中 手札 2 3

ほえ、破壊されたらデッキからサーチができるんだ……そういえばワンダー・マジシャンのドロも破壊されたらだったね。TGは破壊されたら発動する効果があるみたい

葵 LP : 1800

手札 0枚

デスガエル (ATK : 2700)

デスガエル (ATK : 2700)

・一族の結束

・伏せ x 2

竹中 LP : 1300

手札 3枚

TG ブレード・ガンナー (ATK : 3300)

伏せ x 0

リバースの1枚はフロッグ・バリア。これなら流石にTG ブレード・ガンナーを破壊できるはず！

「オレのターン、ドロ！」

竹中 手札 3 4

「セットが怖いな。サイクロンを発動！葵ちゃんから見て左側のカードを破壊するぜ！」

「……………え？」

フロッグ・バリア 破壊

「orz

よりによってフロッグ・バリアを破壊ー！？うう、泣きたいよお

……

「ど、どうやら良いカードだったらしいな。んじゃバトル！TG

ブレード・ガンナーでデスガエルを攻撃！」

「うう……………」

葵 LP：1800 1200

デスガエル 破壊

またデスガエルが破壊されちゃった。これで私の場のモンスターはデスガエル1体のみ

「あと少しだな。モンスターとリバーズを1枚ずつセットしてエンド！」

竹中 LP：1300

手札 1枚

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

????（裏守備）

・伏せ×1

葵 LP：1200

手札 0枚

デスガエル（ATK：2700）

- ・一族の結束
- ・伏せ×1

残りライフは1200……そろそろデスガエルを守備にしないと、守備力が0だから下級モンスターに破壊されちゃうかもしれないけど、そんなことは言ってもらえないっ

「私のターン！！ドロー！」

葵 手札0 1

「今だ。リバースカード、闇の呪縛を発動！対象はデスガエルだ！」
「闇の、呪縛……？」

《闇の呪縛》
やみ じばく

永続罫

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターの攻撃力は700ポイントダウンし、攻撃と表示形式の変更ができない。そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

「このカードが存在し続ける限り、対象のモンスターは攻撃力が700ポイント下がり、攻撃・表示形式の変更を封じられる！」
「ふええ！？」

デスガエル（ATK：2700 2000 攻撃・表示形式の変更不可）

デスガエルが鎖によって動きを拘束されちゃった。ま、まずいよ！これじゃ次のターン、戦闘ダメージで1300ポイント受けて終わっちゃう……引いたカードはモンスター、効果は発動さえ出来ね

ば強いんだけど……………あ

「まだまだよ！墓地のデスガエルを除外して粹カエルを特殊召喚、モンスターをセットしてターンエンド！」

葵 LP：1200

手札 0枚

デスガエル（ATK：2000 攻撃・表示形式の変更不可）

粹カエル（DEF：2000）

???（裏守備）

・一族の結束

・伏せ×1

竹中 LP：1300

手札 1枚

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

???（裏守備）

・闇の呪縛（デスガエル）

「オレのターン、ドロー！」

竹中 手札1 2

「いくぜ！TG カタパルト・ドラゴンを反転召喚！」

竹中

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

TG カタパルト・ドラゴン（ATK：900）

竹中さんの場に頭が大砲みたいなドラゴンが出てきた。さっきサ
ーチしていたカードだね

「TG カタパルト・ドラゴンの効果を発動。手札からTGと名のつくレベル3以下のモンスターを特殊召喚できる！現れる！チューナーモンスター、TG ジェット・ファルコン！！」

デッキジーンナス

《TG ジェット・ファルコン》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1400 / 守1200

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

竹中

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

TG カタパルト・ドラゴン（ATK：900）

TG ジェット・ファルコン（ATK：1400）

カタパルト・ドラゴンの後ろから背中にジェットをつけた鳥が現れる

「またシンクロ召喚？」

「ああ！レベル2のTG カタパルト・ドラゴンにレベル3のTG ジェット・ファルコンをチューニング！！」

2 + 3 = 5

「シンクロフライトコントロール！リミッター解放レベル5（ファイブ）！ ブースター注入120%！リカバリーネットワーク、レンジ修正、オールクリアー！ ゴー、シンクロ召喚！カモン、TG パワー・グラディエイター！」

デッキジーンナス

《TG パワー・グラディエイター》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1000
チューナー+チューナー以外の「TG」と名のついたモンスター1
体以上

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

竹中

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

TG パワー・グラディエーター（ATK：2300）

カタパルト・カタパルトとジェット・ファルコンが光の輪になり、斧を持った戦士が出てきた

「シンクロ召喚の材料となったTG ジェット・ファルコンの効果を発動！500ポイントダメージを受けて貰うぜ！」

そうとうと炎が私に襲ってきた

「ひゃう！？」

葵 LP：1200 700

「んっ……はぁ」

残りライフは700……ダメージを受けすぎたからかな？ちよつと疲れてきたよ……

「これで終わりだぜ、バトル！TG ブレード・ガンナーでデスガエルを攻撃っ！」

ブレード・ガンナーが鎖によって動けないデスガエルへと攻撃を繰り返す

「……………させないっ！リバースカード発動！和睦の使者！」

《和睦の使者》
（わはくしごき）

通常罠

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

私の場に虹色のベールが張られ、ブレード・ガンナーの攻撃からデスガエルを守ってくれた

「このカードが発動されたターン、私のモンスターは戦闘で破壊されずに戦闘によるダメージは0になるよ！」

さつきから伏せてあったけどフロッグ・バリアが破壊されたショックで忘れてたカード。まあ、そのおかげで今を何とか切り抜けたんだけどねっ

「くっ、防がれたか。モンスターをセットしてターンエンド！」

竹中 LP：1300

手札 0枚

TG ブレード・ガンナー（ATK：3300）

TG パワー・グラディエーター（ATK：2300）

???（裏守備）

・闇の呪縛（デスガエル）

・伏せ×0

葵 LP：700

手札 0枚

デスガエル（ATK：2000 攻撃・表示形式の変更不可）

粹力エル（DEF：2000）

???（裏守備）

・一族の結束

・伏せ×0

「私の、ターン!!!」

葵 手札0 1

多分このターンが私に残された最後のチャンス!

「いくよ!私は裏ガエルを反転召喚!!!」

葵

デスガエル(ATK:2000 攻撃・表示形式の変更不可)

粹カエル(DEF:2000)

裏ガエル(ATK:500 1300)

・一族の結束

私の場のセットされていたモンスターが反転され、一匹のカエルが現れる

「裏ガエルの効果を発動!私の場のガエルの数まで相手のモンスターを手札に戻す!私の場にはデスガエル、裏ガエル……そしてデスガエルとして扱う粹カエルの3体!よって3枚まで戻せるよ!」

「何だつて!?!……一応対象は?」

「この効果は対象を効果解決時に決めるの。だからTG ブレード・ガンナーの効果を発動するなら今だよ」

「く……一応発動するぜ。墓地のTG カタパルト・ドラゴンを除外してTG ブレード・ガンナーを除外」

TG カタパルト・ドラゴン 除外

TG ブレード・ガンナー 除外

「それじゃ裏ガエルの効果でTG パワー・グラディエーターとセ

ツトモンスターの2枚をバウンス！」

TG パワー・グラディエーター エクストラ

??? (裏守備) 手札

裏ガエルは舌を伸ばして竹中さんのモンスターを全て戻した

「裏ガエルの攻撃力は1300……か。丁度0になるなく、オレの負けだ。楽しかったぜ！」

「え、えと……私も楽しかったよ！」

この言葉は本心だった。全力のデュエルしてくれたから、かな？

「それじゃ今度こそ終わりだね……裏ガエルで、攻撃っ!!」

裏ガエルが竹中さんへと向かっていき、体当たりする

竹中 LP：1300 0

第十二話 楽しかった日の終わり

・Side 夜一

「……………」

目の前で繰り広げられた白熱したデュエルに俺やゆりな、観客達はしばし言葉が出なかった

「……………つと、店長!!」

『……………あつ! デュ、デュエル終了! 勝者は葵ちゃん。よって今大会の優勝チームは「死の合唱」です!」

「おー!」

「……………や、やったあ! やったよ兄さんっ! ゆりなあ!」

店長の言葉、観客達の歓声を聞いて葵は俺達が優勝した事を実感したようだ。余程嬉しいのか、周りなど気にしないで俺の元に走ってくる

「ああ、俺達の勝ちだぜ! 葵っ」

「ふえっ!?! / / /」

俺はそんな葵の体を抱きしめ頭を撫でてやる。やや葵の顔が赤くなつたが気にしない。今日は本当によく頑張ってくれたな

「にははは ボク達のゆうしょーだよ! あゝおいっ!」

「ひゃうっ?!」

ゆりなに抱きつかれた葵は驚くが、すぐに二人で嬉しそうに笑う。そんな様子を見ていて俺は心から思った。今日は彼女達と来れて、本当に良かったなと

・Side 黒野

「あゝあ、竹中のせいで負けちまったのかよお」

「お前だつて負けただる藤島っ！」

「んだと、やるか？」

「ああ……デュエ」

「バカやってないで行くぞ」

「う……」

デュエルで負けた俺達は、チーム「死の合唱」の3人がいるデュエルスペースから離れた所にいる。今日、俺達はこの大会に気まぐれで参加していた。強い相手を求めていたが準決勝までの相手は弱く、全く楽しめなかった。……だが

「水城 夜一、か……」

俺はデュエルスペースにいる夜一と呼ばれる男を一瞥する。奴のデュエルを見てはいないが、何故か不思議な力を感じる……何かとつもなく強力なものを隠している気がした。それに……

「……似ている」

そう呟き、俺は馬鹿共を連れてこの場を去っていった

・Side 夜一

楽しみに感じれば感じる程、終われば残念に思う……特に今日は楽しみだった。初めて葵、ゆりなの二人と一緒に大会に出られたからか。そんなことを考えつつ、店長から賞金を受け取った俺は二人と帰ろうとする。しかし何か忘れているような……

「あ！そうだ。黒野とデュエル……」

大会ではデュエル出来なかった……だが、何故かアイツを放っておけなかった。しかし、デュエルスペースを見渡しても、既に姿は無かった

「ありや、フラれちゃったね」

そんな俺を見てゆりなは楽しそうに笑う

「ははっ！確かに」

だが、黒野の事が頭から離れる事はなかった。……次に会ったときにデュエル出来れば良いな

「に、兄さん」

「ん？」

葵はギョツと俺の手を握る。いきなりどうしたのだろうか

「今日はありがとね！」

「っ！」

葵は笑顔でそう言った。俺は不覚にも、そんな葵の笑顔に少しの間見とれてしまった

「……ん、どうしたの兄さん？顔が赤い」

「き、気にするな……」

「……？」

手には葵の体温を感じる。何だか葵の顔を直視出来ない……俺は無意識に家に帰る足を早めるのだった

第十二話 楽しかった日の終わり（後書き）

「あゝ……夜一だ。いつも『遊戯王 罪を背負いし男と蒼き少女』を読んでくれて感謝するぜ」

「どもっ 皆のアイドル、ゆりなちゃんだよお」

「どうやら俺達、今回からちよくちよく後書きに出して貰えるらしいな。主にデュエルでの解説がメイン……って、今回の話はデュエルしてねえんだが？」

「にやはは。それじゃ今回は大会について振り返ってみよーっ！大会の内容が書かれた物を持ってきました」

そういつてゆりなは俺にバンツ！と紙の束を差し出してきた

「おお、準備が良いな。どれどれ……（ペラペラ）………ありや？」

「んにゃ？どしたの難しい顔して」

「む……あつ！そうか今回の大会、俺は一度しかデュエル出来てないじゃねえか！！これならデュエル描写を一度省かれたが2回しているゆりなの方が断然マシだ！！めちゃくちや盛り上がってるし」

「そつかなあ？まゝ確かに夜一さんのデュエルってモブキャラとだけかあ……切り札のウリアも断殺されちゃったし、全然見せ場無かったね」

グサグサッ

「orz 夜一さんだよ

「ありやりや、落ち込んだじゃったよ……それじゃ今回はこれまでだよ
じゃねっ！」

第十三話 水城家の朝

「るる〜」

おつす、夜一だ。只今俺は朝早く台所にて、歌を口ずさみながら食材と格闘中。面倒なんだが葵に作らせるわけにはいかないからな。ちなみに葵はまだ起きてこない。今日は俺の布団に忍び込んでくることもなかったし、自分の部屋で寝ていることだろう。

「あいしてる〜」

うし、これで朝食と三人分の弁当は完了。後は葵を起こして朝食を済ませ、学校に行くだけだ。それで授業が終わったら今日は晴れているし、葵とゆりなを誘いどっか行くか。

「ボクも愛してるよお」

「……………」

後ろから声が聞こえ、振り返るとゆりながいた。コイツは一人暮らしのため、生活費削減だよ。とかいつて朝食の時間は毎日くる。一応許可はしてあり、合鍵も渡してあるから今みたいにいきなり現れたりする。

「おはよう。今日は早いな」

「おはよ。休み明けだし気合い入れないとね」

ふむ、それでいつも来る時間より早いのか…………

「それじゃ、今日は早めに葵を起こすとするか」

「うん！」

とは言ったものの、葵は一筋縄では起きない。今回こそはと意気込み、台所から秘密道具を取り出す。

「……………今回は大人しく起きてくれるといいね」

「全くだ」

「すう…………すう…………」

ゆりなを先頭に一階にある葵の部屋に入る。すると案の定、葵は熟睡していた。規則正しい寝息をたてつつ、長く纏まっていない髪は寝癖で大変なことになっていた。……とりあえず静かにおたまとフライパンを取り出す。

「夜一さん、ふぁいと〜」

「おう……右手に盾、ではなくおたまを、左手に剣、ではなくフライパンを」

そして二つの武器を葵の耳元に近づける。横で見ていたゆりなはすかさず耳栓を着けた……しくじったな、俺も持ってきてくりや良かった。

「いくぜつ、死の目覚めー!!」

俺は騒音を覚悟し、おたまをフライパンに向かって思いきり叩きつける！

ポフンツ

「……………」

「にゃはは……………」

しかし、何故か予想していた大きな音は聞こえなかった。状況を確認するとおたまとフライパンの間に枕が挟まっている。これは間違いなく葵の仕業なんだろうが……

「ふへへえ……………」

起きることなく、幸せそうな顔して寝てる……その後何度も繰り返したが全て防がれた……神業だな。

「仕方無い…………ゆりな、頼んだ」

「は……………」

俺の言葉に返事をするゆりなは楽しそうに寝ている葵の上に馬乗りになる。そして手を葵のパジャマの中に素早く差し込んだ。

「んっ……………」

「にゅふぶ…………可愛いなあ……………」

服の中にゆりなの手が侵入したことにより葵の身体がビクンツと揺れる。葵の反応に気を良くしたゆりなは身体中をこちょこちょとくすぐりだす。

「ひゃ……あんっ………っ、ゆりなあ！？や、やめっ / /」

「よいではないか」

くすぐられて流石に起きた葵は身の危険を感じたのか、体をよじって逃げようとする。しかしゆりなは上から押さえつけ、決して逃がしはしない。ゆりないわく葵を起こすのはくすぐるのが一番らしい……だが目の前に広がっている光景は目に毒でしかないのです。そろそろ止めるためにゆりなの頭に軽くチョップをいれる。

「あうちっ！？」

「悪ふざけはやめい。もう起きてるだろうが」

「え」

ゆりな、流石にこれ以上は何かとマズイだろうから自重してくれ

……

「はあ……はあ…… / / /」

無理矢理起こされた葵はというと、ベッドの上で羞恥と怒りで顔を真っ赤にしながら荒く息をしていた。まだ起きたばかりであり思考が追いついてはいないようだ。

「それじゃ飯の用意は出来てるから俺達はリビングで待ってるぞ」

「……はい」

「……おはよう」

「おはよう、葵」

「ゲツモ〜ニン、葵」

数分後、ゆりなとリビングでのんびり話していると、服を着替え髪を整えた葵が来た。何故か少し不機嫌な様子だが。

「うー……あの起こし方はいつもやめてっ言ってるのに！」

そう葵は抗議してきた。確かに毎日ゆりなに任せているからなあ……だが。

「だったら大人しく起きてくれ……」

「あう……」

一応自分に非があるのは自覚しているようで、しゅん……としていまう。

「まあいいさ、それより飯にしよう」

「……うん」

「……頂きます」

3人が食卓に揃ったので、手を合わせて食材と作ってくれた人達に感謝しつつ食事を始める。ちなみにメニューは米と玉ねぎの味噌汁、焼き魚にサラダという至ってシンプルなものだ。

「そっぴやお前ら、進路は決めたのか？」

しばらくして何事もなかったように二人が楽しそうに会話している中、不意に思い出した。数ヶ月後に俺はもう新学年。二人に至っては新入生となる。なのに葵からそっぴった話を聞いた覚えがない。すると葵の動きが止まった。

「う……」

「にやはは、ボクは決めてあるよ」

葵は俺の問いに言葉を詰まらせる。……それは大丈夫なのかと不安になった。対してゆりなは決めていたらしく、えへんっ！と胸を張った。それが普通の事なんだが、葵のせいで感心してしまう

「ちなみに何処だ？葵の参考のために聞きたい」

ゆりなと葵の成績は揃ってよろしくない。なので一応聞いとけば後で選択肢にはなりうる。なんて考えていたらゆりなは妖しく笑いながら言った。

「にゅふふ……夜一さんと同じとこだよっ」

「……え？」

ゆりなの言葉に俺達は哑然とする。俺と同じところって事は……

「デュエルアカデミア、か？」

そう、俺はデュエルアカデミアの生徒だ。しかし本校のような島にある大きな所ではなく、学校自体は一般的な高校と大差ない。ただ3つのランクで分けられている点や、授業がデュエルモンスターズをメインに行われているのは同じ。

「うん」

そういや、もうそろそろ入試試験か……まあ彼処ならデュエルが成績に繋がるし、デュエルモンスターズの知識があるゆりななら筆記テストもある程度問題ないだろう。

「ん〜でも葵にはな……」

実施試験はデュエルだし何とかなるかもしれない。だが問題は筆記テストだ。通常科目もそうだが、デュエルモンスターズの問題はつい先日始めたばかりの葵には難しいだろう……デュエルモンスターズ自体は好きになったみたいだから行くことには問題なさそうだが。

「（デュエルアカデミア……兄さんがいる所、だよな。あれ？と言うことは）そ……そ……」

するとゆりなの答えを聞いた葵は少し考えた後、体をワナワナと震わせていた。何か良からぬ予感しかしない。

「お……おい、葵？」

「そこだよ！私もデュエルアカデミアに行きたい……！」

葵はバンツとテールを乗り出しながらそう言い出したのだった

……

第十四話 提案

「はあ……やっと思ひみか」

なんて独り言を言いつつ食堂で席を取り弁当を広げる。今日は朝から色々あったからか、少し疲れたな。とは言っても、今朝の出来事の後にとりあえず二人に弁当を渡して見送り、デュエルアカデミアへと登校して普通に授業を受けただけのだが。しかし葵をアカデミアに……ね。

「やろうと思えば何とか出来るんだがな……」

孝矢さんも葵をアカデミアに入りたいと言ってたが……果たしてそれが葵にとつてプラスになるか、だよなあ。

「……どうかした？水城」

「ん、中園か」

弁当に手をつけずにぼーっと考えていたら、オベリスクブルーを表す青い服を着た一人の女の子が俺の横の席に座りながら聞いてきた。猫を連想させる切れ目の瞳、纏めていない長めの黒髪をした彼女は中園 なかその 美憂 みゆう。このアカデミアに入学した時に知り合い、ちょっとしたきっかけでこうして度々話すことになった。

「いや、何でもないさ」

「そ、そう？ それじゃあちょっと相談したいんだけど時間あるわよね？」

何のだ？と聞こうとすると中園は腰のホルダーからデッキを取り出す。成る程……デッキ構築についてご相談だな。

「ああ、別に問題ないぞ」

とは言っても中園はオベリスクブルー一年、対して俺はオシリスレッド一年。学年は同じとはいえランクの違う俺達は周りからは良く思われない。それでもコイツが相談してくるのは、以前デュエルした後俺が少しだけ構築のアドバイスをしたからか……いや、デッキタイプが元々似ていたのもあるか。

「んで、今日は具体的にどういったご相談なんだ？」

「えっと、このモンスターなだけど」

中園はそういつて一枚のカードを別のカードケースから取り出して俺に渡してくる。モンスターのようだな。

「……おー、中園のデッキと相性いいな。毎ターンアドが稼げるしない効果だったが、彼女のデッキには使えるものだった。

「でもちよつと攻撃力が低いのよね……守るのは難しいんじゃない？」

「そうだな……。だったら効果を使った後シンクロすればいいんじゃないか？ レベル3の海竜族だから深海のディーヴァから呼べるしさ」

「あ、成る程」

ピンポンパンポン

中園とテーブルにカードを広げ、構築について話し合っているとアナウンスが流れ始めた。誰か面倒事でも起こしたか？なんて

『水城 夜一君、今すぐ校長室にかもんっ!!』

「つて、俺かよ……」

何でこのタイミングなんだろうか……目の前をみると中園はジト目で俺を睨んでいる。

「……すまん中園、この埋め合わせはまた今度する」

「ふん！別にいいわよ、早く行つてきなさい」

そのわりに不機嫌なご様子なんだが……指摘したらヤバそうなのではないでおこつ。

「じゃあ、また今度な？」

急いで弁当をしまい、それだけ言つて俺は食堂を後にした。

「……今日は厄日か」

しばらくして昼休みに校内放送で呼び出された俺は、このアカデミアで一番偉い人のいる場所……つまり校長室の前に来た。

「はあ……」

自然とため息が出てしまう。どうせ校長にまた昇格しろーとか言われんだろうなあ……最近は言われることが無かったから、もう諦めたと思ったのに。

「……失礼します」

覚悟を決め、ドアを開けて中へと入った。校長室の中は狭く、机や椅子、本棚といった最低限の物しか置かれていない。

「夜一君じゃない！よく来たね、何か用？」

椅子に座っていた女性は俺を確認するなりどこか気の抜けた声を出す。この人は水城 佳苗^{かなえ}、俺と葵の父である水城 孝矢^{こうや}の妹で、まだ20代と若いが一応この校長だ。二人暮らしをしている俺達はまだ子供なんだからーとか言われてよく助けて貰っている。

「校長が呼んだんでしようが……」

校内放送で水城 夜一君、今すぐ校長室にかもんっ！とか言いやがって……おかげで俺はアカデミア中で笑いだ。

「そうだったねー。今日来て貰った理由、わかる？」

「昇格の件ですかね。だったら」

「ふふ……違うのだよ。あ、いや！それもあるけどね？」

佳苗さんは不敵に笑ったかと思っただけに慌てて否定する、面白い人だよな。ちなみに昇格の件というのは俺がアカデミアに入学する時、筆記テストでは上の方だったのだが実施試験で試験官相手に解除が面倒なロックをかけてデッキレスによって勝利を収めたところ、試験官の心象が滅茶苦茶悪くなりオシリスレッドにさせられた。俺は気にしていないのだが、佳苗さんはそれが不服らしい。「えーと、それじゃ何なんですか？」

「実はお昼休みが始まってすぐにね、葵ちゃんから電話があったのよっ」

葵から佳苗さんに電話ね。ふむふむ、なるほ……………はあ!?

「葵から……………ですか?」

「うん」

何故この時間に葵が佳苗さんに電話をする必要がある? 小遣い稼ぎ……………いや、つい先日大会の賞金を分けたしそれはないだろう。

あ。

「もしかして……………アカデミアに入りたい、とか言っていました?」

「あ、やっぱり知ってたんだ。そう! 私ったら嬉しくてついオツケしちゃった」

しちゃった って……………もう願書の受付はとっくに終わっているはずなんだが? そうか、これが職権乱用か。

「あ、ありがとうございます。葵も嬉しいはずです」

「でしょでしょ!……………でもやっぱり問題あるじゃない? それで夜一君を呼んだのよ」

「はあ」

何だろう。もの凄く嫌な予感しかしないわけだが……………

「お昼休みも短いし手短に話すね。えっと」

・せつめーちゅーだぜい

「 てゆうわけ」

「……………」

佳苗さんの話はこういうものだった。葵が入学するにはまずは試験をパスする、これは普通の事だから問題ない。だが、それにプラスして学園のお手伝いとして入学式でのイベントでクジで選ばれた生徒二名を相手に俺ともう一人の生徒でタッグデュエルをしてほしい、だそうだ。ちょっとした見せ物みたいで嫌だな……………

「そしてそのデュエルで負けたら俺はブルーに昇格……………ね」

今更昇格するのは御免だし勝てばいいのだが、相手は期待に胸を膨らませた後輩、出来れば勝たせてやりたい。

「一応聞きますがウリアは使用していいですか？」

「駄目に決まってるじゃない！ 入学式にはデュエルモンスターズのお偉いさんとかくるし、元々危険なカードなんだから……」

俺の問いに佳苗さんは全力で否定する。確かにウリアは危険なカードだった。あの有名な“三幻神”と言われる3枚の神のカードを元に作られたとされる“三幻魔”のカード。他の2枚を俺は知らないが、神炎皇ウリアはその三幻魔の1枚で三幻神、《オシリスの天空竜》をモチーフに作られたカードだそうだ。孝矢さんはその力が強力すぎて昔は封印されていた、とか言ってたな……だがそんなものは関係無い。それに今、佳苗さんは言っただじやないか……“元々は”と。コイツはもう

「え」と……夜一君？

「っ！ す、すみません……」

「夜一君……」

どうやらぼーっとしてしまったらしく、佳苗さんは心配していた。つたく、ダメだな……こんなことじゃ。

「ははっ、大丈夫ですよ。んで……タッグデュエルのパートナーは決めていいんですかね？」

「あ、うん。一応決まったら教えてね？ 当日の打ち合わせとかしたいし」

「了解です。そんじゃ話は終わりですよ。俺はこれで、飯をまだ食って無いんですよ」

もう少しで休み時間が終わってしまうし

キーンコーンカーンコーン

「あ……」

昼休みの終了を告げる鐘の音が響いた。どうやら午後の授業は厳しい事になりそうだ。

第十五話 放課後

キーンコーンカーンコーン

本日最後の授業終了を告げる鐘がなり、担任がさつさとホームルームを終えると教室の中にいた生徒は次々と消えていく

「やっと……やっと終わった」

なんて言いつつ俺は机に突っ伏す。育ち盛りの俺には昼飯抜きはキツすぎたようだ……あいにくと授業中に飯を食うような度胸も無いので、こうして終わるまで耐えた

「おーい夜一、デュエルしようぜ？」

「知哉……」

そんな俺に声をかけてきたコイツは森田^{もりた} 知哉^{とせ}。俺と同じくオシリスレッドで中園と同じ中学から来たらしい。黒く短い髪に細目の容姿をした彼は誰とでも気軽に話すので、異性からは結構モテてるとか……俺から見た見たコイツはこの学園で知り合ったよくつるむ悪友か「昼飯を食い損なってるんだ……すまんが後にしてくれ」

「そっか？んじゃ早く食えよ」

そういつて俺の了解を聞かずに横の席に座る

「……食堂で食う。さつさと済ませるからお前はここで待ってるい教室^{じゅう}じゃなんか落ち着かないし……うん、そうしよう。そうと決まれば善は急げ、だな

「ちよっ……待ってるからな?!」

「へいよ」

「「ちよつさま、つと」

食堂についた俺は持参した弁当をやつと食べることができ、一息つく。ふう……生き返った

「さて、今日はどうするかな」

とりあえず教室に戻って知哉とデュエルするか……葵の件もあるしのんびりは出来ないんだが仕方がない。タッグデュエルのパートナーを探すのは俺のデッキと相性の良い奴探さねえと行けないし後回しだな

「水城、ここにいたのね」

弁当を片付け、教室に戻ろうとすると後ろから声が聞こえた。後ろを見ると中園がいた

「……中園、今日はよく会うな」

「まあ、アンタを探してたからね」

「は……?」

中園の言葉の意味がわからず、ポカンとしていると彼女は鞆からデッキと紙製のデュエルフィールドを取り出し、テーブルに広げる

「……デュエルをしろ、と?」

「そういう事。お昼休みに頼んだ相談の続きね」

成る程、どうやら調整は済んだみたいだな

「だけど悪いんだが先約が教室で待ってるんだ。また今度じゃダメか?」

「……ちなみに誰」

知哉との約束のために断ると中園は怒ったらしく、何だか物凄いプレッシャーが……

「……知哉だ」

「ふーん……アイツならさつき女子にカラオケ行こうって誘われて帰ったわよ?ほら」

中園は窓から外を見て、正門の方を指差す

「はあ?!」

確認するため急いで見ると本当にいた。クラスの女子数人と笑いながら歩いている。とりあえず携帯電話にかけてみると、気付いた素振りを見せたがすぐに切り、メールで「用事が出来たから帰る」と送ってきた

「あんの野郎……」

自分からデュエルしようと言ったくせに帰るとは……明日は覚悟しとけよ

「ほらね。さ、私とデュエルしなさい！」

そんな俺に中園は何処か楽しそうに椅子に座り、デッキをカットし始める

「はあ……仕方ない」

少しだけ付き合ってやるとするか。時間もあるしな

「加減しながらやるか？」

調整したばかりのデッキにスキルドレイン等は流石にNGだろうし

「うっん、本気で来て良いわ」

「そうか？そういうならまあいいか、んじゃ……」

ホルダーからデッキを取り出し、フィールドに置く。軽くカットをしてお互い準備ができた

「デュエル！」

「デュエルスタートだ」

第十六話 驚異のアド?!天変地異コントロール

「先攻は貰うわ。ドロ―」

む、先攻を取られちゃった……この手札だと先に動く方が良さそうだったのだが。

中園

手札：5 6

「魔法カード、成金ゴブリンを発動。1枚ドロ―、その後アンタのライフを1000ポイント回復よ」

《成金ゴブリン》
なりきん

通常魔法

自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。その後、相手は1000ライフポイント回復する。

夜一

LP：4000 5000

中園

手札：5 6

成金ゴブリンか。キーカードを早く引くためのデッキ圧縮だな

「そんで永続魔法、天変地異を発動するわよ。効果でお互いのデッキを裏返す」

「いきなりか」

《天変地異》
てんぺんちい

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはデッキを裏返しにしてデュエルを進行する。

中園

デッキトップ（禁止令）

夜一

デッキトップ（激流葬）

……まずい。中園のデッキは天変地異を使ったコントロールデッキ。早めに天変地異を破壊しなければならぬ……しかし手札にサイクロンは無い。早く引かねえと

「さらに永続魔法、デーモンの宣告を発動」

《デーモンの宣告》せたいく

永続魔法

1ターンに1度だけ、500ライフポイントを払いカード名を宣言する事ができる。

その場合、自分のデッキの一番上のカードをめくり、宣言したカードだった場合手札に加える。

違った場合はめくったカードを墓地へ送る。

「水城は知ってるだろうけど、このカードは1ターンに1度ライフを500ポイント払いカード名を1つ宣言し、デッキトップが宣言したカードなら手札に、違うなら墓地に送る。私は効果で500ポイント払い、“禁止令”を宣告よ。まあ当然当たるから手札に加えるわ」

中園

LP：4000 3500 手札：4 5

デッキトップ（コアキメイル・アイス）

デーモンの宣告は普通に使ってもまず当たらないだろう。だが天変地異によってデッキトップがわかる今、毎ターンライフを500払うだけで1枚ドローするカードとなる

「手札から深海のディーヴァを召喚。ディーヴァの効果でデッキからリチュア・ディバイナーを特殊召喚するわね」

《しんかい深海のディーヴァ》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 水属性 / 海竜族 / 攻 200 / 守 400

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

《リチュア・ディバイナー》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 海竜族 / 攻 1200 / 守 800

1ターンに1度、カード名を1つ宣言して発動する事ができる。

デッキの一番上のカードをめくり、それが宣言したカードだった場合手札に加える。

違った場合、自分のデッキの一番上に戻る。

中園

深海のディーヴァ（ATK200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

デッキトップ（バッド・エンド・クイーン・ドラゴン）

リチュア・ディバイナー……昼に相談された時に見たカードだ。

効果はデーモンの宣告に近く、カード名を宣言し、デッキトップのカードが宣言したカードなら手札に、違うなら元に戻る事から失敗しても墓地に送る事はないため、後からデーモンの宣告を使えば天

変地異が無くても1ターンに1度は成功できる

「リチュア・ディバイナーの効果で“バッド・エンド・クイーン・ドラゴン”を宣言、成功だから手札に加えるわね」

中園

手札：4 5

デッキトップ（異次元の指名者）

「あら……運が良いわね。それじゃ手札から一時休戦を発動よ」

《一時休戦》
いちじきゅうせん

通常魔法

お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。

次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。

「効果でお互い1枚ドロー、そして次のアンタのターンのエンドフェイズまでお互いはダメージを受けないわ」

中園

手札：4 5

デッキトップ（ハリケーン）

夜一

手札：5 6

デッキトップ（宮廷のしきたり）

よっし、いきなり手札が増え……あれ？そう言えば今中園が加えたカードって

「異次元の指名者を発動。このカードはカード名を1枚宣言し、そのカードが相手の手札にあればそのカードを1枚除外、無ければ私

の手札を1枚ランダムに除外するわ。“激流葬”を宣言。さ、手札を見せなさい」

《異次元の指名者》

通常魔法

カード名を1つ宣言する。

相手の手札を確認し、宣言したカードが相手の手札に存在する場合、そのカード1枚をゲームから除外する。

宣言したカードが相手の手札に存在しなかった場合、自分の手札をランダムに1枚ゲームから除外する。

「く……」

いきなり手札を公開かよ……中園の手札には禁止令もあるしなあ

……

夜一

・手札（6枚）

激流葬

宮廷のしきたり

ソウル・オブ・スタチュー

魔宮の賄賂

マジック・プリンター

機動砦 ストロング・ホールド

「ふーん……成る程。んじゃ激流葬、除外ね」

「へいへい」

激流葬 除外

「じゃあ永続魔法、禁止令を発動。カード名を1つ宣言し、この力

カードが存在する限り宣言されたカードは使えなくなるわ。“魔宮の賄賂”を宣言するわね？」

「……了解」

《禁止令》きんしれい

永続魔法

カード名を1つ宣言して発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、宣言されたカードをブレイする事はできない。

このカードの効果が適用される前からフィールド上に存在するカードにはこのカードの効果は適用されない。

中園のデッキトップはハリケーン……魔宮の賄賂が使えないから防げそうにないな

「更に私のフィールドに永続魔法は3枚、よって手札からバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを守備表示で特殊召喚」

《バッド・エンド・クイーン・ドラゴン》

効果モンスター

星6 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻1900 / 守2600

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に永続魔法カードが3枚以上表側表示で存在する場合に特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手は手札を1枚選択して墓地へ送り、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

また、このカードがフィールド上から墓地へ送られていた場合、自分のスタンバイフェイズ時に、自分フィールド上に表側表示で存在する永続魔法カード1枚を墓地へ送る事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

中園

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン) (DEF2600)

「最後にカードを1枚セットしてターンエンド」

中園

LP:3500 手札:1枚

深海のディーヴァ (ATK200)

リチュア・ディバイナー (ATK1200)

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン) (DEF2600)

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令 (魔宮の賄賂)

伏せ×1

デッキトップ (ハリケーン)

夜一

LP:5000 手札:5枚

伏せ×0

デッキトップ (宮廷のしきたり)

「始めから滅茶苦茶な展開しやがって……だがまだ諦めるには早い
ぜ。俺のターン、ドロー！」

夜一

手札:5 6

デッキトップ (アポピスの化神)

「その瞬間、リバースカードを発動するわ。マインドクラッシュよ」

「んな……」

《マインドクラッシュ》

通常罫

カード名を1つ宣言して発動する。

宣言したカードが相手の手札にある場合、相手はそのカードを全て墓地へ捨てる。

宣言したカードが相手の手札に無い場合、自分は手札をランダムに1枚捨てる。

「カード名を1つ宣言し、そのカードが相手の手札にあればそのカードを全て捨てる。無ければ私の手札をランダムに1枚捨てるわ。」

“ 宮廷のしきたり ” を宣言

「……俺の手札に宮廷のしきたりは2枚、マインドクラッシュの効果により墓地へ」

いきなり宮廷のしきたりを2枚潰されるとは、辛いな……

宮廷のしきたり×2 墓地

「……カードを3枚セットしてターンエンドだ」

夜一

LP：5000 手札：1枚

伏せ×3

デッキトップ（アポピスの化神）

中園

LP：3500 手札：1枚

深海のディーヴァ（ATK200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン) DEF2600)

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令(魔宮の賄賂)

伏せ×0

デッキトップ(ハリケーン)

「それじゃ私のターンね。ドロー」

中園

手札：1 2

デッキトップ(地盤沈下)

「地盤沈下か……水城にはあまり意味ないわね。まあ一応リチュア・
ディバイナーの効果で“地盤沈下”を宣言、手札へ」

中園

手札：2 3

デッキトップ(リチュア・ディバイナー)

「ライフを500ポイント払いデーモンの宣告の効果で“リチュア・
ディバイナー”を宣言し、手札へ」

中園

LP：3500 3000 手札：3 4

デッキトップ(徴兵令)

「そしてハリケーンを発動するわ。全ての魔法・罫カードを手札へ
……。その後天変地異、デーモンの宣告を発動。デーモンの宣告
の効果で500ポイント払い“徴兵令”を宣言、手札に」

中園

LP:3000 2500 手札:4 5

デッキトップ(非常食)

「更にはリチュア・デイバイナーを召喚！効果で“非常食”を宣言、手札に加える」

中園

リチュア・デイバイナー(ATK1200)

手札:4 5

デッキトップ(地盤沈下)

おいおい……こんなに展開しといて手札が増え続けてんだが？しかもこつちの行動が制限され続けてるし

「バッド・エンド・クイーン・ドラゴンを攻撃表示に変更、バトルフェイズよ！バッド・エンド・クイーン・ドラゴンでダイレクトアタック！1900ポイントのダメージね」

「了解」

夜一

LP:5000 3100

「バッド・エンド・クイーン・ドラゴンの効果でアンタは手札を1枚、選択して墓地へ。そして私は1枚ドロー」

またハンデスカ。選択して、なら……一応賄賂は持っておきたいし、ここはとりあえずコイツにしておくかな。

中園

手札:5 6

デッキトップ（波動キャノン）

夜一

マジック・プランター 墓地

「そして深海のディーヴァ、リチュア・ディバイナー2体で追撃！」

夜一

LP：3100 2900 1700 500

「む……成金ゴブリンのおかげで何とか耐えたな。しかしデッキトップのカードは波動キャノンか」

危なかった……もしさつき手札に加えたカードが天変地異じゃなくて波動キャノンだったら次のターン負けてた。だがまだ安心は出来ない。

「そうね、まあそれでも次のターンで終わりよ？バトル終了、禁止令を発動して魔宮の賄賂を宣言。ターンエンド」

中園

LP：2500 手札：5枚

深海のディーヴァ（ATK200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令（魔宮の賄賂）

伏せ×0

デッキトップ（波動キャノン）

夜一

LP：500 手札：3枚

伏せ×0

デッキトップ（アポピスの化神）

また魔宮の賄賂を宣言されたか……これで波動キャノンを止めるには次のデッキトップに賭けるしかない

「俺のターン、ドロー！」

夜一

手札：3 4

デッキトップ（サイクロン）

「よし！ 次はサイクロンだ。カードを3枚セットしてターンエンド！」

魔宮の賄賂はブラフとして使うくらいはしたいのだが、禁止令を使われているとセットもできない。相変わらず禁止令はわかりづらい効果だ。

夜一

LP：500 手札：1枚

伏せ×3

デッキトップ（サイクロン）

中園

LP：2500 手札：5枚

深海のディーヴァ（ATK200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

リチュア・ディバイナー（ATK1200）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令（魔宮の賄賂）

伏せ×0

デッキトップ（波動キャノン）

「私のターン」

中園

手札：5 6

デッキトップ（霧の谷のファルコン）

「デーモンの宣告の効果で500ポイント払い“霧の谷のファルコン”を宣言、手札に加える」

中園

LP：2500 2000 手札：6 7

デッキトップ（夜霧のスナイパー）

「リチュア・ディバイナーの効果で“夜霧のスナイパー”を宣言し、手札に……」

中園

手札：7 8

デッキトップ（成金ゴ布林）

「そしてもう1体のリチュア・ディバイナーの効果で“成金ゴ布林”を宣言、手札に加えるわ」

中園

手札：8 9

デッキトップ（異次元の指名者）

「トップは異次元の指名者、か……そうね、それじゃ霧の谷のファルコンを召喚」

《ミスト・バレー霧の谷のファルコン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守1200

このカードは、自分フィールド上に存在するカード1枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

中園

霧の谷のファルコン（ATK2000）

「うげ……」

ここで霧の谷のファルコンかよ……下級モンスターにしては攻撃力が2000と高く、自分のフィールドに存在するカードを1枚手札に戻さなければ攻撃できない。一見デメリットには見えぬが、中園の場合は禁止令やデーモンの宣告を戻すことでまた効果を回す事ができるので、メリットになっってしまう

「後は……そうだ。レベル3のリチュア・ディバイナーにレベル2の深海のディーヴァをチューニング。A・O・J カタストルをリンク召喚よ」

3 + 2 = 5

中園

A・O・J カタストル（ATK2200）

「バトルフェイズ、A・O・J カタストルでダイレクトアタック」

「させるか、リバースオープン、ソウル・オブ・スタチュー。守備表示で特殊召喚」

夜一

ソウル・オブ・スタチュー（DEF1800）

「わかってたわ。攻撃続行、A・O・J カタストルの効果でソウル・オブ・スタチューを破壊よ」
「く……」

ソウル・オブ・スタチュー 破壊

「デーモンの宣告を手札に戻して霧の谷のファルコンでダイレクトアタック」

「んじゃリバースオープン、機動砦 ストロング・ホールド」

夜一

機動砦 ストロング・ホールド（DEF2000）

「……往生際が悪いわね」
「まあな」

少し疲れた様子の中園に対して俺は涼しい顔で返してやる。すると中園は昼休みの時みたくジト目で睨んできた

「ふん……サイクロンを引いたところでどうせ次のターンで終わらせるわ。メイン2でデーモンの宣告を発動。効果で500ポイント払い“異次元の指名者”を宣言し、手札に加えるわ」

中園

LP：2000 1500 手札：8 9

デッキトップ（霧の谷のファルコン）

「そして波動キャノンを発動。カードを1枚セットしてターンエンド」

《波動キャノン》

永続魔法

自分のメインフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、このカードの発動後に経過した自分のスタンバイフェイズの数×1000ポイントダメージを相手ライフに与える。

1枚セット、か。さっきから手札に加えていたカードは……

「……って！夜霧のスナイパーかもしれないじゃねえか！メインフェイズ2の終了時にリバースオープン、アポピスの化神を守備表示で特殊召喚だ」

《アポピスの化神》

永続罫

このカードは自分または相手のメインフェイズにしか発動できない。このカードは発動後モンスターカード（爬虫類族・地・星4・攻1600/守1800）となり、自分のモンスターカードゾーンに特殊召喚する。

このカードは罫カードとしても扱う。

夜一

アポピスの化神（DEF1800）

「（あゝあ、気付かれちゃったか）……まあ、このままエンドよ。手札が多いから地盤沈下を捨てるわ」

中園

LP：1500 手札：7 6枚

リチュア・デイバイナー（ATK1200）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）

霧の谷のファルコン（ATK2000）

A・O・J カタストル（ATK2200）

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令（魔宮の賄賂）

・波動キャノン（0）

伏せ×1

デッキトップ（霧の谷のファルコン）

夜一

LP：500 手札：1枚

機動砦 ストロング・ホールド（DEF2000）

アポピスの化神（DEF1800）

伏せ×0

デッキトップ（サイクロン）

「さ、この状況をひっくり返してみて？」

「……やれるだけやってみるさ、俺のターン」

夜一

手札：1 2

デッキトップ（聖なるバリア・ミラーフォース）

中園のライフは残り1500、それに対して俺のライフは500

……そして次のターン、波動キャノンを破壊しなければ効果で10

00ポイントダメージを受ける、か

「メイン、手札のサイクロンを発動！波動キャノンを破壊だ」

中園

波動キャノン 破壊

「そして……レベル4の機動砦 ストロング・ホールドとレベル4のアポピスの化神でオーバーレイネットワークを構築する」

そう宣言し、俺は2枚の罾モンスターを重ね、エクストラデッキから1枚のカードを取り出し中園に見せてやる

「んな……エクシースモンスター!？」

「ああ。現れる……エクシース召喚、No.39 希望皇ホープ！」

《ナンバーズNo.39 きぼうおう希望皇ホープ》

エクシース・効果モンスター

ランク4 / 光属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

レベル4モンスター×2

自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシース素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

このカードがエクシース素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

夜一

No.39 希望皇ホープ (ATK2500 ?)

そして取り出したカードを2枚の罾モンスターの上に乗せる。すると何故か中園は希望皇ホープを珍しそうにじーっと見ていた

「……どした」

「へ?……あ、いや!何でも無いわ?!」

そういつて顔を背ける。……しかしまたすぐに希望皇ホープを凝

視する

「……ははっ！珍しいか？いいだろ」

凝視する中園の反応が面白いのでエクシーズモンスターカードを目の前でちらつかせてみる。すると中園は目で何度か追いかけて

「……………コロスわよ？」

「すみませんでした！」

ドスのきいた声で恐ろしい事を言ってきた……反射的に謝ってしまう

「……………コイツは最近発売されたパックで出たから、欲しいなら買え。俺はこの1枚しか持ってないし」

「う、そうするわ……………そ、それにしても罨モンスターでエクシーズ召喚出来るのね？」

コイツ……………無理矢理話を変えやがった……………

「まあな。トークンは流石に無理だが……………つと、そろそろデュエルを進めるぞ？」

「どうぞ」

「それじゃバトルだ。希望皇ホープでリチュア・ディバイナーを攻撃！」

中園

LP：1500 200

リチュア・ディバイナー 破壊

「残りライフは200……………危なかったー。まさかエクシーズしてくるとは思わなかったわ」

「へっ、余裕でいられるのも今のうちだ。ターンエンド」

夜一

LP：500 手札：1枚

NO.39 希望皇ホープ（ATK2500？）

伏せ×0

デッキトップ（聖なるバリア・ミラーフォース）

中園

LP：200 手札：6枚

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）

霧の谷のファルコン（ATK2000）

A・O・J カタストル（ATK2200）

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令（魔宮の賄賂）

伏せ×1

デッキトップ（霧の谷のファルコン）

「私のターン、ドロー」

中園

手札：6 7

デッキトップ（バッド・エンド・クイーン・ドラゴン）

「手札から非常食を発動。セットされていた夜霧のスナイパーを墓地に送って1000ポイント回復するわ」

《非常食》
ぐんぐんぐんぐん

速攻魔法

このカード以外の自分フィールド上に存在する魔法・罫カードを任意の枚数墓地へ送って発動する。

墓地へ送ったカード1枚につき、自分は1000ライフポイント回復する。

中園

LP:200 1200

「更にデーモンの宣告の効果で500ポイント払い“バッド・エンド・クイーン・ドラゴン”を宣言、手札に加える」

中園

LP:1200 700 手札:6 7

デッキトップ(深海のディーヴァ)

「このバトルで終わらせてあげる。A・O・J カタストルで希望皇ホープを攻撃！」

「……その攻撃は通らないぜ。希望皇ホープの効果を発動！オーバーレイユニットを1つ取り除くことでモンスターの攻撃を無効にする」

夜一

NO.39 希望皇ホープ(???)

「なっ……そんな効果を持ってたのね」

「まあ、その代わりこのモンスターはオーバーレイユニットが無いときに攻撃対象に選択されると破壊されちゃう」

「成る程。それじゃバトルを終了してメイン2に霧の谷のファルコン、バッド・エンド・クイーン・ドラゴンを守備表示に変更してカードを1枚セット、ターンエンドよ」

中園

LP:700 手札:6枚

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン(DEF2600)

霧の谷のファルコン(DEF1200)

A・O・J カタストル(ATK2200)

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令(魔宮の賄賂)

伏せ×1

デッキトップ(深海のディーヴァ)

夜一

LP:500 手札:1枚

No.39 希望皇ホープ(ATK2500?)

伏せ×1

デッキトップ(聖なるバリア・ミラーフォース)

「いくぜっ！俺のターン」

夜一

手札:1 2

デッキトップ(メタル・リフレクト・スライム)

次にドロウするカードはメタル・リフレクト・スライムか……これなら聖なるバリアをセットして時間を稼げばまだ勝算は

「水城……私のこのセットカード、わかる？」

俺が次のドロウするカードを確認し逆転する手立てを考えていると、中園は1枚のカードに指を乗せながらそんな事を聞いてきた

「……いや、わからない」

そう、わからない。天変地異で公開されていて使用していないカードは地盤沈下、異次元の指名者、徴兵令、成金ゴブリン、霧の谷のファルコン、バッド・エンド・クイーン・ドラゴン……そして、始めから手札にあった1枚のカード

「俺に徴兵令は効かないし、今の状況でブラフはセットする必要は

無い……始めから手札にあったカードだろ？」

推測を言つてやると中園は少し驚き、そしてニヤリと笑った

「ふ〜ん、流石ね？ま、大当たりよ。そしてこれで終わり……リバースカード、強烈なはたき落としを発動。今手札に加えたカードを捨てさせるわ！」

「んなあ！？」

《強烈なはたき落とし》

カウンター罠

相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地へ捨てる。

夜一

聖なるバリア・ミラーフォース - 墓地

このタイミングで強烈なはたき落としかよ……聖なるバリアが落とされて防ぐ手段が無くなっちゃった

「……バトルだ。希望皇ホープで霧の谷のファルコンを攻撃！」

中園

霧の谷のファルコン 破壊

「ふふ、これで終わり？」

「わかってるくせに……ターンエンド」

夜一

LP：500 手札：1枚

No.39 希望皇ホープ（ATK2500？）

伏せ×0

デッキトップ（メタル・リフレクト・スライム）

中園

LP:700 手札:6枚

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン(DEF2600)

A・O・J カタストル(ATK2200)

・天変地異

・デーモンの宣告

・禁止令(魔宮の賄賂)

伏せ×0

デッキトップ(深海のディーヴァ)

「ふふつ、私のターン」

中園

手札:6 7

「バッド・エンド・クイーン・ドラゴンの表示形式を変更してバトルよ。A・O・J カタストルで希望皇ホープを攻撃」

「ふ……ふははっ！ナンバーズはナンバーズでしか倒せない！よつて」

「煩いわね……今ホープの効果を使う必要はないわよね？破壊よ」
「orz」

夜一

No.39 希望皇ホープ 破壊

「はい、これでトドメ。バッドエンドクイーンドラゴン、攻撃！」
「ちえ……負けちまったか」

夜一

L
P
5
0
0
0

第十六話 驚異のアド?!天変地異コントロール(後書き)

「おつす、夜一だ。今回のデュエルについて解説しようと思う。ちなみに今回はゆりなの代わりにゲストが来たぜ！」

「え、えつと……中園よ。よろしく」

「さあ、今回の最強カードは……コイツだ！」

《天変地異^{てんぺんちい}》

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはデッキを裏返しにしてデュエルを進行する。

「私のデッキのメインカードね。単体ではあまり意味無いけど、このカードを使う事でデーモンの宣告やりチュア・ディバイナーの効果を実に成功させたり、マインドクラッシュや禁止令で相手の行動を邪魔できるわ」

「戦闘が心もとない感じだが？」

「それでも無いわよ？霧の谷のファルコンやバッド・エンド・クイン・ドラゴンだってあるし……今回は使わなかったけど、地盤沈下も相手の展開を制限出来るしね。あとは夜霧のスナイパーかな？蘇生カードにチェーンしたりグラファの効果にチェーンすると面白いかもね。私は結構気に入っているわ」

「成る程。ちなみに夜霧のスナイパーは罨モンスターを使う俺には刺さりまくる……つと、そろそろ終わりか」

「そっつっそれじゃまたね」

「じゃあなっ」

第十七話 下校

「よっし！今回の調整で結構回ったし、次も私が勝たせてもらうわね」

「言ってる。次は俺が勝つてやる」

デュエルが終わり、少しの間今回のデュエルについて話し合った俺は、デッキを鞆にしまい時間を確認するともう下校時間までそんなに時間が無かった。結構デュエルが長引いてしまったらしいな。

「つと、それじゃ私は用事があるし帰るわ。水城は？」

「ん？そうだな……」

今日はもう知哉帰っちゃったしなあ……パートナーを探すにも時間が無いし生徒もあまり残っていない。

「……ああ、俺も帰るよ」

「そう？それじゃ一緒に帰りましょ」

「そうだな」

「そういえば水城。何で昼休みに呼び出しくらったのよ？」

下駄箱で靴を履き替えていると、すでに履き替えた中園が俺の前に仁王立ちしながらそんなことを聞いてきた。……教えるべきだろうか？妹が無理矢理このアカデミアに入学しようとしたんだ、と……やめた方がいいだろう。よし、話を変えるか。

「んな事より少し離れてくれ。そこだと丁度パンツが見え　ぐあ　っ！？」

「な、殴るわよ?!ノノノ」

「すでに殴ってんじゃねえか！とりあえずその次に備えている拳を下ろしてくれ!!」

「うぐぐ……」

ふう、とりあえず拳を引っ込めたので一安心。中園はという顔を赤くしてスカート裾を引っ張りながら俺を睨みつけている。

「……すまんすまん、冗談が過ぎたな。悪かった」

「う、まあ私も注意が足りなかったわ。ごめん」

俺は自分の非を認めて謝ると、何故か中園も謝ってきた。そんな俺達の様子に我ながら少し笑ってしまう。

「な、なに笑ってんの……んで？どうして呼び出されたのよ」

中園は笑われて少し怒ったのか、顔をほんのり赤くし、口を尖らせながら話題を戻してきた。

「あゝ……とりあえず特に大したことは無かったから気にしないでくれ」

「……本当に？」

中園は疑り深いな。そんなに信用無いか？俺は。

「ああ」

「そう……ならいいわ。でも何かあったら頼ってもいいんだからね？今日はお世話になったし……そ、それじゃ私、帰るわ」

俺の返事にまだ納得していないようだが、中園はそれだけ言うと颯爽と走り去ってしまった。突然の事にしばらくポカンとしてしま

う。

「……何だったんだ？アイツ」

なんて呟いてみるが当然ながら答えは返ってこない。……まあいいや、んじゃ葵の待つ我が家に帰るとしよう。

第十八話 帰宅

「ただいま」

鍵を開けて家に入る。すると玄関には葵の靴と他にもう一組の靴があった。

どうやらゆりなが来ているらしいな。なんて考えていると、葵の部屋の方からドタドタと音をたてながらゆりなが出迎えてくれた。

「お帰りだよ夜一さん！ お邪魔してるよ」

「おう、ただいま。そしていらっしやい、だな。……葵は？」

てつきりいつもの様に出迎えてくれるかと思っていたんだが……少し残念

ガタガタンツ！

「ひゃう!？」

「……今、物凄く大きな音と可愛らしい悲鳴が妹の部屋の方からしなかったか？」

「にははは、夜一さんが帰ってきた途端に葵ったら吃驚して机の下に隠れてたから……多分頭をぶつけたのかと」

「……やれやれ」

アカデミア入学の件が少し後ろめたいのかな。大きくため息をつき、ゆりなと一緒に葵の部屋へと向かった。

「葵、入るぞ〜？」

俺はそれだけいい、返事を聞かずにドアを開けて葵の部屋に入る。すると葵はゆりなの言っていた通り、机の下に隠れていた。

「葵」

「う……………」

俺の姿を確認すると、葵はすまなさそうに俯く。どうやら入学を勝手に決めた事に反省はしているようだな。

葵は多分、俺にアカデミアの入学を許可してもらえないと思っただろう。だが俺は、どのみち入学手続きをやっていた。葵がやりたいといってくれたからな。なので結果オーライではあるが……事前に言っておいてくれたらな、と少しだけ寂しく思ってしまう。

「っ！ に、兄さ」

「葵、大丈夫か？ さっき大きな音がしたけど……」

そんな俺を見た葵は、一瞬苦しそうな顔をして、何かを言おうとする。だが俺は、結局笑いながら優しく葵の声を遮ってやった。

俺はそんな葵を怒ることなんか出来なかったんだ。つくづく俺は葵に甘い、なんて我ながら思う。

「あう……痛かった」

そういう葵をよく見ると頭を押さえていた。しかも少し涙目……どうやらさっきの音は頭をぶつけたもので間違いないようだな。

> i333562 — 3228 <

「（ふにやつ？！ か、可愛いつ）」

「ははっ！ とりあえず出てきてくれ、な？」

「……兄さんっ」

なんとか安心してくれたのか、葵は出てくると俺の胸に飛び込んできた。

怒られるかと不安だったんだろうな。俺は葵の頭をゆっくりと撫でてやる。

「よしよし……」

「うぐ、ふえ……ごめんなさい」

頭を撫でられた葵は、俺の胸に顔を埋め、泣きながら謝ってくる。「良いよ。でも、どうしてそんなに急いで入ろうとしたんだ？ 昼休みに電話までして」

「それは……」

「それは……」

「うっ……」

あれ？俺は葵に疑問を投げかけたのだが……ゆりな、何故お

前が目を逸らす。

「……ゆりな、お前から詳しく話聞きたくなってきたんだが」「や、夜一さん……そ、その……ね？」

「ん、聞こうか」

「う……ボクが葵に、一緒にアカデミアに入学するためにやるって言ったのです」

……成る程、ね。

「朝の出来事の後からなんだが葵ったら元気無かったし……それにやっぱりボクは、今のように葵と一緒に学校に行きたかったの。だから」

「ゆりな……」

「ゆりな。サンキューな」

礼を言つとゆりなは少し驚き、そして照れ隠しに笑った。コイツが葵の友達で本当に良かったと思つた。

「さて、話も済んだし デュエルするか」

「何故いきなり!？」

ぐうぐうぐう

「……!?!?!」

いきなり大きく腹の虫が鳴き、そして二人とも顔を真っ赤にしてしまった。どうやらお腹が空いているようだな。

「……ははっ!それじゃ飯にするか。ゆりな、今日はお前も食っていけ」

「……はい」

第十九話 食後

「ご、ごちそうさま」

「ごちそうさまでしたー ふにゃ〜美味しかったよお」

テーブルを挟んで俺の前にて食事をしていた葵とゆりなは手を合わせて食べ終わる。美味しそうに食べてもらい、料理した俺としては嬉しくあるな。

「お粗末様でした。それじゃあ俺は洗い物を片付けちまうから、二人はテレビでも見ててくれい」

「んにゃっ!? 晩ごはん頂いたのにそんなことできないよ。……」

ボクが食器洗うから、夜一さんは葵とゆっくりしてて?」

そういつてゆりなは食器を台所に運び始める。流石というか、ゆりなはさっきの事はもう無かったかのように元気になってくれた。

「……そうだな。それじゃ、ゆりなの言葉に甘えてリビングにてゆつくりさせてもらうか。あお」

「!?!?!?!?!」

……しかし葵は俺と目が合うと、さっきの事がまだ頭から離れていないのか、顔を赤くしながらゆりなを手伝おうと慌てて立ち上がる。しかし、葵は料理も含め家事は全般的に不器用……

なので、少し悪いが俺は素早く葵の首根っこを掴み捕獲した。

「はうっ!?!」

「葵は此方だぞー」

「う〜……」

「にゃはは」

俺は葵を引きずってダイニングからリビングに移動すると、葵はソファに座って俯いてしまう。余程泣いたのが恥ずかったようだな。

「葵」

「な、何？兄さん!？」

なんとなく声をかけてみると、葵は少し声を上ずらせながら返事を
をする。

……やれやれ、結構重症だな。俺は苦笑しつつ窓の方に向かい、
カーテンを開けて外を見渡す。空は綺麗だった。

それだけ確認すると、俺は葵へと振り返り

「よし、今からデュエルしようぜ」

「……………へ？」

第二十話 兄妹対決！！

「あゝ、デュエル……って、ええっ?!」

ありや、自然に切り出してみたけどやはり驚かれましたようだな。だが説明する時間が惜しいので強引に話を進めるとしよう。

「ほれほれ、早く部屋からデッキを持ってきな? あ、庭に出るからデュエルディスクと上着も忘れずに」

「わ、わかった」

突然の事に葵は戸惑うが、俺の突拍子な行動には不本意ながら慣れてしまっているらしく、用意するために部屋に戻った。

俺は帰ってからリビングに置きっぱなしにしてあったデュエルディスクとデッキだけ持つと、まだ支度をしている葵より先に靴を履いて庭に出る。すると冷たい夜風が肌に突き刺さった。

「う……少し寒いな」

「兄さん」

「ん」

少し遅れて葵が支度が済んだらしく庭に出てきた。

そして俺の方に走ってくると、俺が何時も使っている上着をそっとかけてくれる。

「お、サンキュー。葵」

「うん」

わざわざ俺の部屋から持ってきてくれたのか……正直寒かったのでも、どうしていきなりデュエルするの?」

上着に袖を通し、デュエルディスクを着け直していると、葵はそんな事を聞いていた。少しは余裕が出てきたようだな。

「ん? そうだな……」

そう呟くと、俺は葵を見据えて自然な動作でデュエルディスクを構える。

「デュエルアカデミアに入学するんだろ？ その覚悟を、決意をこのデュエルで示してみせる」

「……うん！」

俺の言葉に葵はゆっくりと頷き、デュエルディスクを構える。なかなか良い目付きだ。

「それじゃあ、いくぜ？ 本気で来い」

「デュエル、スタート！」

「デュエル！」

「先攻は頂くぜ！ 俺のターン！」

夜一

手札：5 6

……よし、良い引きだ。この手札なら問題ない。

「手札から魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動だ。デッキトップを3枚確認する」

夜一

ソウル・オブ・スタチュー

神炎皇ウリア

サイクロン

「……っ！？いきなりウリア……」

んー……葵は驚いているが、ウリアはまだ出番には早すぎるな。

「俺はソウル・オブ・スタチューを選択。手札に加えて他の2枚はデッキへ戻す」

夜一

ソウル・オブ・スタチュー 手札
神炎皇ウリア デッキ
サイクロン デッキ

「カードを4枚セットして、ターンエンド」
いつものようにデュエルディスクにカードをセットする。俺の前にソリッドヴィジョンにより裏側のカードが映し出され、それを確認して葵にターンを譲る。

夜一

LP：4000 手札：2枚

伏せ×4

葵

LP：4000 手札：5枚

伏せ×0

「やっぱりそのデッキかあ……私は初めてデュエルするから楽しみだよ」

「ああ。そう、だな」

「……？それじゃいくよ、私のターン」

葵

手札：5 6

「手札の悪魂邪苦止を墓地に捨てて鬼ガエルを特殊召喚！ 効果でデッキからもう1体悪魂邪苦止を墓地に送るね」

葵

鬼ガエル (ATK：1000)

悪魂邪苦止×2 墓地

鬼ガエルが葵の場に現れる。その効果でいきなり悪魂邪苦止を2体送られてしまったか。

「鬼ガエルの効果で自身を手札に、そして鬼ガエルの効果で未知ガエルを召喚！」

葵

鬼ガエル 手札

未知ガエル (ATK:1200)

「バトルだよ。未知ガエルでダイレクトアタック！」

葵に指示され、未知ガエルは俺目掛けて跳んでくる。

「その瞬間リバーソープン、ソウル・オブ・スタチュー！」

未知ガエルの攻撃を遮るべく、1枚のセットを発動する。コイツは守備力が1800のモンスターになるからこれで

「なら、それにチェインして手札からサイクロンを発動だよ。ソウル・オブ・スタチューを破壊！」

「んなっ！？ ちい……」

葵の場から出現した竜巻によってソウル・オブ・スタチューが破壊されてしまった。破壊から守る手段はあるが、少ないから今は通すでしょう。

夜一

ソウル・オブ・スタチュー 破壊

「そして未知ガエルの攻撃が通るよ！」

「のわっ!?!」

夜一

LP：4000 2800

止める事が出来なかった未知ガエルの槍が俺の体に直撃する。ソ
リッドヴィジョンとはいえやはり怖いな……

「それじゃ私はモンスター、リバーズを1枚ずつセットしてターン
エンド！」

葵

LP：4000 手札：2枚

未知ガエル（ATK：1200）

???（裏守備）

伏せ×1

夜一

LP：2800 手札：2枚

伏せ×3

「ははっ！ 流石だな。次は此方からいくぜっ、俺のターン！ドロ
ー！」

夜一

手札：2 3

「メインフェイス。リバーズカード、アポピスの化神をオープンす
る。現れる、アポピスの化神！」

夜一

アポピスの化神（ATK：1600）

俺のデュエルではお馴染み、永続罠から出てくる罠モンスター。

効果によって爬虫類の戦士が剣を構えながら俺の前に現れる。

「あれ？ まだ畏モンスターあったのに何でさっきの攻撃を受けたの？ ……もしかして、手加減!？」

「するかっ！ コイツはお互いのメインフェイズにしか発動出来ないんだ」

「あ、成る程……」

「わかったな？ んじゃ、いくぜっ！ アポピスの化神で未知ガエルをアタック！」

「きゃっっ」

アポピスの化神が未知ガエルを斬り倒し、その余波が葵を襲った。

葵

LP：4000 3600

未知ガエル 破壊

「それじゃバトルを終了して手札から魔法カード、マジック・プラントアを発動だ。アポピスの化神を墓地に送り2枚ドロー！ カードを2枚セットしてターンエンドだ」

夜一

LP：2800 手札：2枚

伏せ×4

葵

LP：3600 手札：2枚

???? (裏守備)

伏せ×1

「また伏せカードだけになった……私のターン、ドロー」

葵

手札：2 3

「あ！ 手札からハリケー」「させるか！ 魔宮の賄賂をオープン」
……だよ。それじゃ1枚ドロ」

葵

手札：2 3

ハリケーン 無効

「なら鬼ガエルを召喚！ 効果でデッキから粹力エルを墓地へ送る
ね」

葵

鬼ガエル（ATK：1000）

粹力エル 墓地

「そして鬼ガエルの効果で手札へ。手札から魔法カード、強欲なウツボ発動！ 手札の鬼ガエルと引きガエルをデッキに戻して3枚ドロ！」

《強欲なウツボ》
じつよく

通常魔法

自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドロする。

葵

鬼ガエル デッキ

引きガエル デッキ

手札：0 3

ここで手札交換か……。さて、どうくるかな。

「むう……サシカエルを反転召喚。サシカエルの効果でサシカエルをリリースして墓地の未知ガエルを特殊召喚だよ！ 更にフィールド魔法、湿地草原を発動！」

葵

- 湿地草原 -

サシカエル リリース

未知ガエル (ATK: 1200 2400)

「行くよ！ 未知ガエルで兄さんに攻撃！」

未知ガエルは貫通能力を持っている。ここは耐えるしか無いな。

「ならリバーソープン、カース・オブ・スタチューだ！ 更に宮廷のしきたりをオープンする」

夜一

カース・オブ・スタチュー (ATK: 1800)

・宮廷のしきたり

「宮廷のしきたりが存在する限り、カース・オブ・スタチューはあらゆる破壊から守られる」

「でもダメージは通るよ。未知ガエルでカース・オブ・スタチューを攻撃！」

「くっ……」

夜一

LP: 2800 2200

未知ガエルがカース・オブ・スタチューへ繰り出し、ダメージが

俺に入る。残りライフは2200、か。……そろそろ決めないと不味くなつてきたな。

「私はこれでターンエンド!」

葵

LP:3600 手札:1枚

-湿地草原-

未知ガエル(ATK:2400)

伏せ×1

夜一

LP:2200 手札:2枚

カース・オブ・スタチュー(LP:1800)

・宮廷のしきたり

伏せ×1

「俺のターンだな。ドロー!」

夜一

手札:2 3

「では、2枚目のアポピスを呼び出すか。アポピスの化神をオープン!」

夜一

アポピスの化神(ATK:1600)

「バトル。アポピスの化神! 未知ガエルを攻撃しろ!」

「ふえ!? 攻撃力はこっちの方が上なのは何で……!」

「忘れたのか? カース・オブ・スタチューが俺の場に存在する限

り、他の罨モンスターと戦闘した相手モンスターはダメージ計算後に破壊される」

「あ、そうだった……」

夜一

LP：2200 1400

葵

未知ガエル 破壊

アポピスの化神に攻撃された未知ガエルは、それを槍で迎撃して俺にダメージを与える。しかし、アポピスの化神と戦闘したことで未知ガエルは石化して破壊された。

「そして追撃だ。カース・オブ・スタチュー！」

「させない！ リバースカード、ガード・ブロックを発動！戦闘ダメージを0にして1枚ドロー！」

《ガード・ブロック》

通常罨

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

葵

手札：1 2

く、ここにきてダメージを与えられなかったか……

「ならバトル終了。カードを1枚セットしてターンエンドだ」

夜一

LP：1400 手札：2枚

カース・オブ・スタチュー（ATK：1800）

アポピスの化身（ATK：1600）

・宮廷のしきたり

伏せ×1

葵

LP：3600 手札：2枚

- 湿地草原 -

伏せ×0

「私のターン！」

葵

手札：2 3

「やった！ 墓地の未知ガエルを除外して粹カエルを特殊召喚する
よ」

葵

未知ガエル 除外

粹カエル（DEF：2000）

あの反応は……まさか、ここで引いたのか？

「粹カエルをリリースしてデスガエルをアドバンス召喚！ 効果で
デッキからデスガエルを更に2体、特殊召喚だよ！」

「くっ……マジかよ」

葵

粹カエル リリース

デスガエル（ATK：1900）
デスガエル（ATK：1900）
デスガエル（ATK：1900）

粹カエルが消えて、シンプルなカエル　デスガエルが葵の場に現れる。そして更に2体のデスガエルが呼び出された。

「その反応じゃ、これを防ぐ事は出来ないみたいだねっ。手札から魔法カード、死の合唱を発動！」

来た。何て考えていると、葵の場のデスガエル×3は一列に並んで一斉に耳障りな声で鳴き出し、衝撃が俺の場に存在するカードを襲った。

「くう……」

「スタチューは破壊できなくても、これでセットカードと宮廷のしきたりは破壊され」

「　なんてな」

葵

LP：3600　1700

死の合唱　無効

デスガエル　破壊

「んなつ！？　私のライフとデスガエルが……な、何で」

「それはな。死の合唱が発動された時、俺がこのリバーズカードを発動させたからさ」

そういつて俺は自分の場にオープンされている1枚のカードを指さす。

《アヌビスの裁き^{さば}》

カウンター罫

手札を1枚捨てる。

相手がコントロールする「フィールド上の魔法・罠カードを破壊する」効果を持つ魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する。その後、相手フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える事ができる。

「アヌビスの、裁き……何それ？」

「このカードは、相手が“フィールド上の魔法・罠を破壊する効果”をもつ魔法カードを発動した時に手札を1枚捨てる事で使用できるカウンター罠だ。その効果は、対象の魔法カードの発動と効果を無効にして破壊。更に」

「相手のフィールドに表側表示で存在するモンスターを1体破壊して、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。だよ」
そう言っただけで、俺の台詞を奪いながら楽しそうに外に出てきた。どうやら片付けは終わったようだ。

「あ、お疲れゆりな」

「片付けサンキューな」

「うにゃ、リビングに行ったら二人とも居ないんだもん。ビックリしちゃったよ」

「そっぴや何も言わずに出てきちゃった……ゆりなには悪いことをしたな。」

「すまんゆりな。……んで、どうする？ 葵」

「ふえ……と、とりあえずデスガエル2体でカース・オブ・スタチューを攻撃！」

夜一

LP: 1400 1300 1200

「バトル終了。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

葵

LP：1700 手札：0枚

- 湿地草原 -

デスガエル（ATK：1900）

デスガエル（ATK：1900）

伏せ×1

夜一

LP：1200 手札：1枚

カース・オブ・スタチュー（ATK：1800）

アポピスの化神（ATK：1600）

・宮廷のしきたり

「そんじゃ、俺のターンだな。ドロー！」

夜一

手札：1 2

「俺の場に永続罫は3枚。……全てを墓地へ！」

すると、俺の場に存在する3枚の永続罫カードが炎に包まれる。

「“神の炎”の称号なを授かりし天使よ……永久に消えることなき業火にて全てを焼き尽くせ！ 降臨せよ、神炎皇ウリアー！」

「ギャアアアアアア！！」

そして3枚の生け贄を捧げたことにより、神炎皇ウリアが雄叫びをあげながら俺のフィールドに現れた。

夜一

神炎皇ウリア（ATK：0 6000）

「永続罫は先程のアヌビスのコストを合わせて墓地に6枚、攻撃力

は6000ポイントだ」

「ありやりや、がんばれ〜葵」

「う……ここでウリア。でも、まだだよ」

そういつて葵はリバーズを見る。だが発動させないので、どうやら召喚反応型の罠では無かったらしいな。よかった……

「てことは、そのセットは聖なるバリアのような攻撃反応型の罠か」

なんて言ってみると、葵はあからさまに動揺した。おいおい……

「あう……でも兄さん、今サイクロン持って無いでしょ？ あったらウリア出す前に使う筈だし！」

「おお！ すごいね葵」

「確かに……初めて短期間なのによくわかったな。確かに手札にあるのは偽物のわなだ。サイクロンじゃない」

そういつて俺は手札のカードを見せてやる。もう意味が無いからな。

「だが ウリアには攻撃力を上げる効果の他にもう1つ効果を持っているんだ。俺は、お前のセットを対象に神炎皇ウリアの効果を発動。そのセットを破壊するぜ！ トラップディスプレイストラクション！」

「かかったね、リバーズカードを発動だよ！ ……あれ、発動出来ない！？」

葵

ギョツ！ 破壊

発動すら許されず、葵のセットカードはウリアのプレスによって破壊された。だがそのカードはギョツ！。攻撃反応型の罠では全く無いな。

「……ゆりな、俺はカマをかけられていたようだ」

「……だね」

はあ……あの時の純粹無垢な葵は何処に行っちゃったんだ？ 人

を、ましてや俺を騙すなんて……いや、それがゲームなんだけどな？
「遠い目をしてないで説明してよ！ 何故かセットカードを発動出来なかつただけど!？」

「あ、ああ。神炎皇ウリアは1ターンに1度、相手の魔法・罠ゾーンに存在するセットカード1枚を破壊する効果がある。そしてこの効果に対して、魔法・罠は発動できない。つまり発動すら許さずにセットを破壊できる」

「ふええ!？」

「にははは……ご愁傷様」

まあぶつちやけた話、優先権があつた頃はこの効果のおかげで召喚反応型の罠は怖くなかつたくらいだな。

「そして、これで終局となる……神炎皇ウリアでデスガエルに攻撃だ、ハイパーブレイズ!！」

「そ、そんな……きゃあああ!？」

葵

LP:17000

「あう……負けちゃった」

「ははっ、俺はゆりなのように簡単にはやられないさ」

「むう、どういふことかな？ 夜一さん」

おっと、失言だったようだな。

「まあ、とりあえず……葵」

「ふえ?」

「一緒に送る学園生活を楽しみにしているな。だから頑張ってくれよ?」

俺もそのためにタッグデュエルを受けたんだしな。なんて聞こえない程度に眩き、葵の頭に手を乗せる。すると葵は少しだけぼかんとして、やがて嬉しそうに微笑んでくれた。

第二十話 兄妹対決！！（後書き）

「今回は俺とゆりな、葵の三人で解説だ」

「兄さん自慢の妹、葵だよ。今回はよろしくね！」

「いえ〜い！ ようこそ葵」

「……さて、それじゃ早速解説するか。今回の最強カードは、やはり神炎」

「アヌビスの裁き！！」

「うおいつ!?!」

《アヌビスの裁きさば》

カウンター罠

手札を1枚捨てる。

相手がコントロールする「フィールド上の魔法・罠カードを破壊する」効果を持つ魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する。

その後、相手フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える事ができる。

「手札を1枚捨てることで、魔法・罠を破壊する効果を含む魔法カードの発動を無効にして破壊。更に相手の表側表示モンスターを1体破壊してその攻撃力分のダメージを相手に与えるよ」

「これが無かったら私が勝ってたかもしれないのに〜！」

「んー……夜一さん相手に破壊はあまり通じないから、狙うならバウンスだよ。あ、モンスター効果はスキルドレインで終わるから強制脱出装置とかね 後はお触れとか、それと……」

「ふむふむ」

「ゆりな、さりげなく弱点教えまくるな。葵はメモを取るな……はあ、アヌビスの裁きについて話を戻すぞ？ この小説じゃまだだがハリケーンが消えて大嵐とサイクロンが増えた今の環境ではかなり活躍してくれるカードだと思う。ガン伏せして魔法カードの発動を誘い、逆にダメージを与えてやれい」

「と、夜一さんが真面目に答えてくれたから今回はこれまで！」

「「じゃあね」」

「……ついていけないんだが」

第二十一話 崩壊する休日

「ふあゝあ」

今日はあの夜のデュエルから数日後の休日。あれからパートナー探しを頑張ってはみたが、まだ特に相性の良い奴は見つかっていない。まあ、期限はまだあるし急ぐ必要はないだろう。

そんなこんなで今は特にやる事が無い。休日にアカデミアに行っても生徒はそんなにいるわけないしな。なので俺は自室の椅子に座り、眼鏡を掛けて小説を読んでいた。

「兄さん、ちよつといいかな？」

「んあ？」

すると軽いノックと共に少し控えめな葵の声が聞こえてきた。今は午前中だが、葵は休日だけはいつも早く起きる。それを平日にできてほしいな―と想着ってしまうが。

「入っていいぞ、葵」

「それじゃ、お邪魔します」

小説に目を通しながら許可してやると、葵はゆっくりとドアを開けて入ってきて床に座った。なんか用だろうか？ そう思い小説から目を離して葵の方を見てみると、何故かその手にはデュエルモンスターズのカードがあった。

「どうした？」

何か話がありそうなので、小説に栞を挟んで机に置いて葵の前に座る。ちなみに読んでいたのは失楽園つてやつだ。以前、暇潰しに図書館に出かけた時にウリアがやけに勧めてきたので借りたんだが、この本は俺にや文学は向いてないただけわからせてくれた。

「えつとね、少し相談があつて……」

「む、人生相談か？」

「ふえ？ いや、違うけど……なんで？」

「……いや、なんとなく。それで？」

とりあえず今のネタは葵にはわからないようなので話を戻す事にしよう。まあ相談については、デュエルモンスターズに関連するものだとはわかるけどな。

「今日ゆりなが遊びに来るからその前にデッキを少し弄ってみようかなって思ったんだけど、カードが足りなくて……」

「ほお……なら少し待ってな」

自分で構築を考え直すそうとしたのか。いい傾向だな。やっぱり自分で悩んで作ったデッキの方が愛着湧くだろうし力を貸すでしょう。確か、押し入れに使わないカードが……

「……つと、あつたあつた！ ほれ」

「わっ！？ こんなにいっぱい！」

押し入れの隅に仕舞われていた段ボールを引っ張り出すと、葵の前に置いてやる。すると葵は中にある大量のカードを見て目を輝かせた。

「に、兄さん！ 見ていい？」

「ああ、欲しいのがあつたら好きなだけ持って行って良いからな」

「やった」

葵は嬉しそうに笑うと早速カードを漁り始める。どうやらこの部屋で作業するらしいな……邪魔しちゃ悪いし、俺はまた小説でも読んでいよう。

「むー」

それから1時間、葵は集中して1枚1枚カードのテキストを確認しては、俺に色々相談して試行錯誤を繰り返していた。

「ふあ……」

そのため俺は離れるに離れられなく、小説は読み終わってしまったため暇をもて余している。先程葵にちよっかいを出そうとしてみたが睨まれたしなあ……

メールだよん メールだよん

「っ！？ / / /」

「ん？ メールか」

着信音は机の上に置いてあった俺の携帯からだった。手にとって確認すると差出人は……デュエルアカデミア。件名は……

「な、何今の着信音！ 私の声だったよ！？」

「んあ？ ああこれか。某秘密の庭園見ていたらハマってたな。作ってみた」

「韓ドラ！？ ていうかどうやって作ったの！？」

「それは企業秘密だ。ちなみに電話用もあるぞ？ ほれ」

電話だよん 電話だよん

「ふええっ！？ / / /」

いや／＼それにしてもあの作品は最高だったな。ストーリーも良いし主題歌も良かった。ラストでは思わず泣いてしまったし。

「と、とりあえず消去してっ / / /」

「えー……可愛いのに」

「いいから、早くうつ / / /」

葵は羞恥と怒りで顔を真っ赤にしながらポカポカと叩いてくる。

仕方無いなあ……流石にこれ以上からかうと後で口聞いてくれなくなりそうだし、名残惜しいが消すでしょう。

（……まあ、後でゆりなに送り返して貰えば問題ないしな」

「問題だらけだよ？ ゆりなも持ってるの！？」

「やっべ……つい考えていた事が！」

無意識のうちに口に出ていたようだ。恐る恐る葵の顔を伺つと、表情は素敵な笑顔なんだが、目は笑っていなかった。

「……兄さん、携帯貸して？」

「……はい」

ゆりな……すまない。拒否権は無かった。

「ふんふん」

今日は葵の家に遊びに行くからどの服を来ていこうかな？ 夜一さんにも見られるだろうし……って、そろそろ時間だね。

電話だよん 電話だよん

うにゃ？ 夜一さんから電話だ。それにしても夜一さんから送られてきたこの着信音、メチャクチャ可愛いね〜。

「もしもし夜一さん。やっぱりこの着信音最っ高だ」

『……ゆりな、今日は覚悟しておいてね』

「って、葵い！？ な、なんで夜一さんの携帯から……まさか、バレ」

ブチッ、ツーツー

……ありゃ、電話切られちゃった。葵怒っちゃってるなあ。行ったら不味そうだけど、行かないとしばらく口聞いてくれなくなるだろうだし……

「にゃはは〜……終わった」

葵は通話を終わらせると、ボタンと携帯を閉じて俺の方へと向いて笑みを浮かべる。今すぐ逃げたい。

「……ってなわけで、今日は覚悟してよね？ 兄さん」

「終わった……」

「どうやら……今日は面倒な事になりそうだ。ああ、さよなら……俺の休日。」

第二十二話 街へお出掛け

そんなわけで、数十分後……

「二人とも、早くー!!」

「なあ、どうしてこうなったんだろっ?」

「ボクに聞かないで……」

> i333339—3228<

俺達は葵のご意向により繁華街へと足を運んでいる。例のごとく拒否権は無かった。

「大体、俺達は何故外に出掛けているんだ」

しかもこんな寒い時期にさあ……出来ることなら休日なんだし、家でのんびりしていたかった。

「ホントだよ……ボクの部屋は暖房ないから、暖房のある部屋でぬくぬくとデュエルしていたかったのに」

「何? 二人は不満、あるのかな」

「いえ、全く無いです」

「だよな」

葵の表情は笑顔だが目が笑っていない! ……これ以上怒らせたくないのです素直に従おう。

「んで……葵は何処か行きたいところでもあるのか?」

「うん。まずはね……」

「ここだよ!」

「いらっしやいませ」

葵に連れられて俺達が最初に来たのは、外見を見ただけで女の子向けだとわかる店だった。抵抗も虚しく店内に連れ込まれると、中には数多の縫いぐるみ・縫いぐるみ・縫いぐるみ……そして、俺に突き刺さる店員と客の視線で非常に居心地が悪い。

「うにゃ、これ可愛い」

「成る程……縫いぐるみ専門店、ね」

とりあえず此処に来たというからには縫いぐるみを買わされるの
だろう。しかし、たかが縫いぐるみの1個や2個。そんなにする筈
無いし、大会で稼いでいる俺には問題ない!

「ゆりな、此処は俺が払うよ。お前、家賃とかで金銭面はあまり楽
じゃなかっただろ」

「や、夜一さん……ありがとう」

「気にするな」

元はと言えば俺が撒いた種だしなあ。ゆりなに払わせるのは流石
に悪い。

「それじゃ葵、どれが」

「よい、しょ……これで」

そういつて葵は1mほどある1つの縫いぐるみを持っていた。そ
れは少し形が歪でヘンテコだったが、やはり葵だというべきか……
カエルだった。

「それだな? 値段、は…… はあ!？」

「ありがとうございます」

「んふふ」

「ははは……パックを購入しまくるためにコツコツ貯めた俺の資金
が」

葵はご満喫な様子で縫いぐるみを抱き締めながら俺の横を歩いて
いる。はあ、もう財布の中身が無くなっちゃった。ちなみに値段は
後ろに0が1、2……4個はあったとだけ言っとくか。学生にはそ
う簡単に出せる額ではない。縫いぐるみでもこんなにするものがあ
るんだねっ

「夜一さん……ドンマイ」

気を落としている(と言つかおかしくなつた)俺を、ゆりなは申
し訳なさそうに慰めてきた。……止めてくれ。今慰められると思わ
ず目から心の汗が溢れてしまいそうだ。

「さ、それじゃ……次行こっか？」

「……了解」

初っ端でこれだけの出費、幸先が悪すぎる。とりあえず、少し多めに金を下ろしておいた方がいいかもなあ……

「あつたあつた、次はここに……」

「無理だ！ 絶対に無理っ！」

「えー！？」

「にはは……」

途中で金を引き落とした俺は、次に連れてこられた場所を視認するなり、とりあえず此処から離れる事にした。何故なら……

「ランジェリーショップに入るならお前らだけで入れ！ ほら、縫いぐるみは預かるし金なら渡しておくからさ」

そう、ランジェリーショップだからだ。女性用の下着を取り扱う店。そんな所に入らされるのは、流石に勘弁願いたい。

「ダメだよ！ 罰なんだから兄さんに決めて貰わなきゃ意味ないもん！／＼」

「兄さんにも流石に意味がわからないよ！？」

大体、何故ゆえ俺が葵の下着を選ばねばならない。罰だからとはいえ、そんな恥ずかしい事が出来るものか。それに、なんだかんだで葵も恥ずかしいのか顔が真っ赤になっているし！

「うー！」

「……つて、やめっ、店に引つ張り込もうとするなっ！ ゆ、ゆりな！ お前も何か言ってくれ！」

「はいはい、ボクと二人で入ろうね？ 葵」

「あう……／＼」

ゆりなは俺から何とか葵を引き離すと、縫いぐるみを俺に渡して葵と店へ姿を消した。

やれやれ、流石にあんな店に入るのはなあ……あ。

「やべ、財布渡してなかった。携帯は……あれ？」

手あたり次第探してみるが無い。どうやら朝の出来事後、机に置き忘れてしまったみたいだな。……どうしよう、届けた方がいいよな？　だが二人は既に店の中に入って行ってしまった後だし……でもこれが無かったらゆりなが払うだろうしなあ」

別に大丈夫だよ、とか言つてな。そもそももって後から渡そうとしてもアイツの事だから絶対受け取りはしないだろう。変なところで頑固だからな。

「はあ……仕方ない」

すぐに行くと思わずいし、少ししてから店に入ってさっさと財布を渡して出れば問題ないだろ。そう自分に無理やり言い聞かせながら、結局店に入ることに憂鬱になった。

「……ん？」

「うー……」

店に入った私達は、適当に店内を見て回る。でも、何でかはわからないけど胸がもやもやしてあまり頭に入ってこないや。……それにしても兄さんったら、何もあそこまで必至に逃げようとしなくてもいいじゃん……本当は恥ずかしかつたけど、私が折角兄さん好みの下着を着てあげようと勇気を出したのに。

「葵、それは余計なお世話かと……って、聞こえてないね」

「ん、ごめん。何か言った？」

考え事ではーつとしてたからか聞き逃しちゃった。いけないいけない、ゆりなも困ったような表情になつてるししっかりしなきゃ……

「うー」

「……にやはは、仕方ないな。葵っ、あっちの方に行ってみよ」

「ゆ、ゆりな!？」

すると、ゆりなはいきなり私の手を取って強引に店の奥のまで歩いていく。その顔は楽しそうで、ゆりなはこんな時いつも気を使ってくれるから、私は感謝してもしきれない。今は私の考えていた事がわかつていようで少し居心地が悪いけど。

「えつと〜、あ！ これなんかどうかな？」

奥までいくと、ゆりなは少し周りを見渡してから下着を一つ選んで私に渡してくる。えつと、どんな……って。

「ふええ！？ こ、これはちよつと私には……／＼／」

ゆりなから渡されたのは黒の大人っぽい下着だった。しかも生地が少ないんだけど！

「何言っているの。ギャップ萌えだよ」

「ぎゃつぷ、もえ……？」

“ぎゃつぷもえ”って何の事だろ？ 何かの専門用語かな？

「つまりは……いつも子供っぽい葵がこれを着ければ、葵のいつもと違う一面に夜一もノックアウト」

「ほ、本当っ！！！？」

「……いらつしやいませ？」

(そんな目で俺を見ないでくれ……)

しばらくして店に入ると、店中に広がる女性用の下着と女性店員の不思議そうな(巨大かつ変な縫いぐるみを持った男性客である俺を見て)視線に、入って早々心が折れそうになった。早く二人を探して脱出しよう。

「つまりは……」

「ほ、本当……」

「ん」

店の奥のほうから小さくて何を言っているのかはわからないが、葵とゆりなの声が聞こえた。とりあえず周りに広がる目に毒な物を極力気にしないようにしながら、急いで二人の元に向かった。

「お、いたいた」

「あれ？ 夜一さん」

「……え？」

「よ、お二人さん。ほい、財布な」

「このためにわざわざ？ 別にボクが払っても良いのに」

「そういつわけにやいかないさ」

さて、無事に財布を渡した事だし、早く店を出なくては……ん？
葵のやつ、何故か頬を赤くして固まってるな。　って、よく見ると手に生地が少なめの黒い下着を持っている。まさか、買う気なのか！？

「んな、ななな…… / / /」

すると俺の視線に気づいた葵は更に顔を真っ赤にする。突然の事に言葉もろくに喋れないくらい動揺してしまってるみたいだ。さっきはこれでよく俺に選べとか言えたものだな……

「え、と……そ、そうだ！」

とりあえず、ここで俺まで変に動揺を見せるわけにはいかないし、平然としたほうがいいよな。うん、そうしよう。余裕な態度を見せつつここを立ち去ればいいんだ。

「ゆ、ゆりな、葵にやそれは大人っぽいし、サイズが大きすぎるんじゃないのか？　パットとか無駄だろうし、もっと小さくて生地があるやつを」

「っ！？　に、ににに、兄さんの、バカーー！！！」

「ペチーーン！」

「いつてえ！？」

「……夜一さんが悪い」

「何故、だ……？　がくり」

その後葵にビンタされた俺は、店内で騒いだ事により店員によって店を追い出された。……もう家に帰りたい。

「な、なんであんたがこんな店から出てくるのよ……」

「……中園？」

第二十三話 カードショップへ

「へえ、じゃあお二人さんは来年には後輩ってことね？ よろしく。葵ちゃん、ゆりなちゃん」

「は、はいっ！ こちらこそよろしくお願いします！」

「よろしくですよ、中園先輩」

何でこんな事になってしまったのだろうか？

状況を説明すると、何故か中園がパーティーに加わって女子3人は楽しそうにガールズトークを繰り広げ、俺は罰という事で荷物持ちをさせられている。先程中園にはちゃんと店にいた理由等弁解しただけなんだがなあ……

それにしても中園の奴から持たさせられている荷物には服などが入っているらしいのだが、かなりの量があるため俺の肩がさつきから悲鳴をあげている。葵の縫いぐるみもでかくて持ちづらいし辛いなあ。

「ふーん、最近デュエルモンスターズを始めたばかりなん……って、やれやれ。葵ちゃん、事情は大体理解したのだけれど、次はどこに行くのかしら？」

「ふえ？ えと、カードショップに行こうかなって思ってます」

「あら、いいわね。それじゃ早く行きましょうか。貴女のお兄さんを休ませてあげないと可哀想だしね？」

「おお！」

「む……別に兄さんなんてそこら辺で倒れちゃえばいいんです」

oh……さっきの出来事のせいで出掛ける前より怒らせてしまったらしい。葵の反応にショックを受けた俺は、荷物の重みに耐えられなくなりその場で崩れ落ちる。

「や、夜一さん？ 大丈夫!？」

「ふんっ」

「こーら、お兄さんにそんな事言わないの。ほら、行くわよ？」

「ふえ？ は、はいいい！？」

すると、そんな俺達に見かねたのか中園は葵の手を強引に掴み取り、カードショップの方へ歩き出す。葵は突然の事に混乱しているからか、半ば引きずられてしまってるな。

「何してるの。早くしないと二人共置いていくわよ？」

「にははは、いつの間にか主導権を握られてるね」

「……確かに」

「とどめだ！ 全てのモンスターでダイレクトアタックウー！！」

「「ぎゃああああ！」」

はい、そんなわけでいつも来るカードショップにやって来たわけだが……何やら店内のデュエルスペースの方がだいぶ賑やかだ。今日は大会は無かったはずなんだけどな、なんて疑問に思っていると中園も気になったのか近くの店員に聞きにいき、少し話して戻ってきた。そして何故か溜め息をつく。

「……どうやら、どっかの馬鹿二人が店内にいるお客に片っ端からタッグデュエルを仕掛けて連勝記録を更新して楽しんでるらしいわ」

「はあ？ 何だよ、その迷惑な連中は……」

不味いな……俺達は4人、運が悪い事にタッグデュエルは問題なく出来る人数だ。関わると面倒だし、葵にちゃっちゃと用事を済ませて貰って帰るとしよう。いい加減俺を不思議そうに見る周りの視線にも疲れたしな。

「それで、葵ちゃんは何を買うのかしら？」

「あ、はい。カードが足りないので試しにパックを買ってみようかなって」

成る程、だからカードショップに来たのか。どうやら俺の使っていないかったカード達はあまり役に立てなかったみたいだな。

「うにゃ、ならボクも一緒に買おっと」

「うーん。私も久しぶりに購入しようかしら？ ……エクシーズモ

ンスターが欲しいし」

「あー……俺も買わねえと」

中園とのデュエル以来、ランク4のエクシーズモンスターが欲しくなったからなあ。店内のカードが並んだショーケースを見てみるが、エクシーズモンスターは何枚かはあるものの全て高めに売られていて買う気にならない。だが、それよりも“No.39 希望皇ホープ”が無かったのが気になる。売り切れとかでは無さそうなんだが

「水城、このパックでエクシーズモンスター出したのよね？」

「……うおっ!？」

すると考え事をしていたから気が付かなかったのか、いつの間にか中園の顔が真横にあった。吃驚した俺は咄嗟に距離を取る。こんなところで前みたいに殴られたくないしな。

「む……何よ？ これじゃないの？」

「……あれ？」

しかし中園はそんな俺の行動を理解出来ないようだ。近すぎたのは問題だと思っただが、どうやらコイツは気にしていないらしい。…

…俺は女心が理解出来ないよ。

「すまんすまん。それで合ってるけど、リチュア・デイバイナーは持っていたのに何でわからないんだ？ 確かあのカードもそれから出るはずだが」

「ああ、それなら簡単な話よ。あれは知哉から取っ……貰ったからちよっ……聞き間違えじゃなければ今、取ったって言いかけたよな!？ 此処は流石に友人の為に怒るべきだろう。よし……

「何か言いたそうね？」

「う、いや……当たるといいな。エクシーズモンスター」

言葉を口に出そうとすると、中園はいきなりスツと目を尖らせる。こえー……すまない友よ、俺はコイツに刃向かうほどの勇気は持ち合わせていなかったみたいだ。

「ん、ありがと。それじゃあ御先に購入してくるわね」

「…………はいよ」

そんな俺を後目に、中園はパックをいくつか取ってレジに向かっていった。…………さて、俺も同じヤツを買おうとしよう

「「じーっ」」

「ん？」

視線を感じて振り向くと、葵とゆりなは俺から少し離れた場所から何か言いた気に此方を睨んでいる。しかも何やらヒソヒソと話しているし…………

「……………何かね諸君」

「う…………別に何でも無い」

だったら、穴が空くほど俺を凝視するのをやめてくれないかマイシスター。それに反応からして何でも無くは無いだろう。

「えと、夜一さん……………もしかして中園先輩と付き合ってるとか？」

「それは無い断じて無い！」

「即座にかつきっぱりと否定した!？」

「ほ、本当？ 兄さん」

「葵、お前もか……………！」

まさかそんな誤解が生まれていたとは……………二人ともそんなことが気になっていたらしいな。やはり女子だし恋愛事となると気になるんだろうか。

「はあ……………まあ、本当だよ。俺はそんなことを考えたことは無い。

お前達という日々の方が大切だからな」

俺は恋愛とかはあまり興味ない。ただ今というこの時をコイツらと楽しく過ごせればそれで良いと思うしな。

「……………ふへへへ」

「にやはは」

すると何故か二人は嬉しそうに笑いだす。葵の場合にはやけていると言った方が適切か。

「……………何笑ってたんだよ」

「「別に〜?」」

むう……葵の機嫌が直ったみたいなのは良いんだが、何か物凄く居心地が悪いな。

「あら、まだここにいた。カード買わないのかしら？」

ん、中園が帰ってきたな。手には小さいビニール袋があるから、バックはもう買ってきたようだ。

「そうだったな。ほら二人とも、ぼけっとしてないでさっさと買っていくぞ」

「はいはい」

二人は元気に返事をする、中園が買ったものと同じ物を持って先にレジへと向かっていった。さて、俺も買いに行くか……

「おいお前ら、デュエリストだろ？」

「俺達とデュエルしな」

「ん？」

> i 3 3 3 3 4 4 — 3 2 2 2 8 <

葵達を追ってレジに向かおうとすると、後ろから図体のでかい男二人が声をかけてきた。……不味い、こいつ等ってさっき中園から聞いた連中だよな。話し込んでいたせいで捕まってしまった。

「いや、違うぞ（わよ）？」

「嘘つくな！ ならお前らが手に持っているものは何だ？」

男1（仮）は素晴らしいながら中園の持っている袋と俺が買おうとしていたバックを指差す。おお、ただの筋肉バカでは無いようだ。

……仕方ない、絡まれたのが俺達でよかった。葵達が行った後なのは不幸中の幸いだな。とりあえずバックは元の場所に戻してつと。

「いいか？ 中園」

「いいわよ、どうせデュエルしないと帰してくれないだろうし……」

「よし、それじゃデュエルスペースに行くぞ。ついてきな」

男達に先導され、俺達は素直に店の奥にあるデュエルスペースへと足を運ぶ。すると中園がそつと耳打ちしてきた。

（葵ちゃん達には伝えておかなくていいの？）

（駄目だ。そうするとあいつ等もデュエルしなくちゃならなくなる

かもしれない。葵の為にもそれは避けたいからな)

(へえ……)

理由を説明してやると、中園は何故か意外そうな顔をした。そして小さくクスツと笑う。

(……何だよ?)

(別に? ただ感心しただけよ。それじゃ葵ちゃんの為にも早く終わらせましょうか)

そういつて中園は俺から離れる。……何だか楽しそうだな。まあ早く終わらせる事には同感だけどさ。

「ついたぞ」

「おっと、了解」

このカードショップはあまり大きくない。なので店内のデュエルスペースはデュエルディスクを使えるような広さは無く、小さめのデュエルテーブルがいくつか並べられているだけだ。まあこれでも中央にある四角いエリアには立体映像が映し出される機械が設置されているから結構楽しめるようになってるんだけどな。

とりあえず俺達はタッグデュエル用のデュエルテーブルのところまで行くと、テーブルを挟んで男達の前に立った。

「それじゃルールを説明する。ライフは二人で8000ポイントを共有。フィールドは一人ずつあるが、パートナーの手札とデッキ以外のカードは共有でき、プレイヤーは交互に交代する。あとは通常と変わりはない」

「わかったかお前ら?」

「ああ」

知っているんだけどな。なんたってデュエルアカデミアの生徒は授業でたまにやる。それに俺は次の入学式にもやらなくてはいいけない訳だし。

「それじゃ始めるとしよう」

そういつて男1、男2はデュエルテーブルにデッキを置く。するとピピピツという音と同時に機械に読み込まれて準備が完了する。

続いて俺達もデツキをスキャンさせ、スタンバイさせた。

「さあ、俺達に勝てるかな？」

うわ、あの二人何か無駄に息が合っているな……タッグで仕掛けてきたんだ。多分デツキもサポートしやすいように似たもので構築されているんだろう。

「……まあ、せいぜい楽しませてくれ。勝つぞ中園」

「当たり前よ」

「デユエル!!」

「デユエル!」スタート!

第二十四話 初タッグ、永続罨&永続魔法

「先攻は貰うぜ、俺のターン！」

「Hand」

: 5
6

デュエル開始と共に先攻を取る。やっぱり俺のデッキは先攻じゃないとな。

「さて……カードを5枚セットする」

俺は手札の大半をデュエルテーブルに置き、機械に読み込ませていく。

このデュエルはタッグデュエルだ。通常のデュエルとは回ってくるターンが少ないし、まずはパートナーへのサポートを優先した方がいいだろう。

「中園、任せるぜ？ 俺のターンは終了だ」

隣にいる中園を見ると、笑いながら頷き返してくれる。頼もしいパートナーだな。

>Team.A<

夜一 & amp; ; 美憂

「Life Point」

Team.A: 8000

「Hand」

: 6
1

: 5

「Spell & amp; ; Trap Zone」

Set: 0 5

No Data

「リバーズ5枚だと? ……舐めやがって」

そういつて俺の場を見た男2は軽く舌打ちする。……どうでもいいが、このデッキを初めて相手にする奴は決まって似たような反応するんだよな……まあ見てて楽しいからいいんだけどさ。

「ここは攻めさせて貰う、俺のターン!!」

「Hand」

: 5 6

男1は素早くカードを引くと、ニヤリと笑い、手札から1枚のカードを抜き取る。

「行くぞ、ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚!」

《ハイドロゲドン》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 恐竜族 / 攻1600 / 守1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「ハイドロゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

「Hand」

: 6 5

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・ハイドロゲドン (ATK: 1600)

そのカードは勢い良くデュエルテーブルに置かれると、機械がそれを読み取り、中央の装置に かなり小さいソリッドヴィジョンでだが 水素の身体を持った恐竜が映し出し出される。

「ハイドロゲドン……恐竜族のデッキかしら」
「どうだろうな」

あのモンスターは相手のモンスターを戦闘破壊する事でデッキから同名カードを展開出来る。効果を考えるとリクルーター潰しかシンク口の補助の為に入っているのかもしれない。

「行くぞ！ ハイドロゲドンでダイレクトアタック！」

お、リバースカードは5枚あるってのに攻撃してきたか。勇気がある……いや、無謀なだけだな。

「なら俺はその瞬間にリバースカード、死霊ゾーマをオープンする。効果により死霊ゾーマは俺の場に守備表示で特殊召喚される」

《死霊^{ウリ}ゾーマ》

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（アンデット族・闇・星4・攻1800/守500）となり、
自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードが戦闘によって破壊された時、このカードを破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

（このカードは罫カードとしても扱う）

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・死霊ゾーマ (DEF: 500)

「Spell & Trap Zone」

Set: 5 4

俺は相手の攻撃に合わせて伏せてあった5枚のカードの内、1枚を表にしてモンスターゾーンに移す。するとドラゴンのような姿をしたアンデットモンスターが俺の場に姿を現した。

「さあ、攻撃続行するか？」

「そのプレイはミスだぞ？ たかが守備力500のモンスターをハイドロゲドンの前にわざわざ出してくれるとはな」

「はっ、本当だぜ。無論攻撃続行だ！ やれエ、ハイドロゲドン！」
男2はそういうと、男1はバカにしたように笑い、ハイドロゲドンの攻撃が続行される。ふっ、笑いたいの俺の方だ。

「す、水城！？ これじゃハイドロゲドンの効果を使われちゃうじゃない！」

しかし中園は俺の狙いがわからないのか、珍しく慌てていた。

「大丈夫、見てろって」

「Monster Card Zone」

Open:10

・死霊ゾーマ 破壊

安心させるため中園に笑いかけると、ハイドロゲドンの体当たりを受けた死霊ゾーマは消滅した。

「まだだ！ この瞬間、ハイドロゲドンの効果を発動」

「それは無理だぜ？」

そういつてソリッドヴィジョンを指差してやると、ハイドロゲドンは効果を発動させる様子は無い。

「な、何故だ！？」

「ハイドロゲドンの効果は、戦闘によって相手の“モンスターを墓地に送った時”に発動する。この意味がわかるか？」

「……あ、成る程ね！ 死霊ゾーマは畏モンスター、墓地に送られると畏カードになるから発動できない！」

「なにいつ！？」

お、中園はすぐ理解したようだな。流石はブルーの生徒と言ったところか。

「そういう事だ中園。そして死霊ゾーマが戦闘によって破壊された事により、俺は死霊ゾーマの効果を発動する。コイツを破壊したモ

ンスターの攻撃力分、つまり1600ポイントのダメージを受けて貰うぜ?」

「なんだと、ぐわあっ!?!?」

「Life Point」

Team・B:8000 6400

「はあ……何かご愁傷様ね」

相手の惨状に中園は哀れむように見ている。まあ、畏モンスターはあまり使われないから、この様な細かいルールとなると普通わからないだろうしなあ。

「くそ……俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ!」

>Team・B<

男? & amp; ; 男?

「Life Point」

Team・B:6400

「Hand」

:5 3

:5

「Monster Card Zone」

Open:1

・ハイドロゲドン (ATK:1600)

No Data

「Spell & amp; ; Trap Zone」

Set:0 2

No Data

「それじゃ、私のターンね。ドロ!」

「Hand」

: 5
6

「まずは手札からサイクロンを発動するわ。私から見て左側のカードを破壊して貰うわ」

「む……」

「Hand」

: 6
5

「Spell & amp; Trap Zone」

Set : 2 1

・リビングデッドの呼び声 破壊

男？は悔しげに唸る。中園は破壊したカードを確認すると、次にデュエルテーブルの端末で俺のリバースカードも確認する。

「うわ……………何これ」

「その反応は酷くね!？」

俺のリバースを確認すると、何故か中園は少し引いた。折角中園のサポートをするために手札の大半を伏せてやったというのに!

「……………まあ、恐竜族は戦闘で発動する効果がメイン。水城、ここはあなたのカードが使えるかもしれないわね」

「だろ?」

さつきみたいな効果なら使えず、しきたりを使えば戦闘破壊自体ストップできるしな。

「それじゃ、私は天変地異とデーモンの宣告を発動するわね」

「Hand」

: 5
3

「Spell & amp; Trap Zone」

Open : 0 2

・天変地異

・デーモンの宣告

「Deck Top」

：宮廷のしきたり

：リチュア・デイバイナー

：サイクロン

：ブラックホール

……出たな、中園お得意の天変地異コントロール。相手にすると厄介だが、パートナーとなると心強い。

「ライフを500ポイント払ってデーモンの宣告の効果を発動。私はリチュア・デイバイナーを宣言するわね？ 当たりだから手札に加える」

「Life Point」

Team・A：8000 7500

「Hand」

：3 4

「Deck Top」

強欲なカケラ

「さらにリチュア・デイバイナーを召喚。効果で強欲なカケラを宣言、手札に加えて……後は強欲なカケラを発動、そしてバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを特殊召喚！」

《強欲なカケラ》

永續魔法

自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「Hand」

: 4 3 4 3 2

「Monster Card Zone」

Open: 0 1 2

・リチュア・ディバイナー (ATK:1200)

・バッド・エンド・クイーン・ドラゴン (ATK:1900)

「Spell & Trap Zone」

Open: 2 3

・天変地異

・デーモンの宣告

・強欲なカケラ

「Deck Top」

: 禁止令

「「な、何だこの女……」」

「ははは……」

中園は相変わらず凄い展開だなー。場を増やしても手札があまり減らず、それどころか場を維持できりや増えていく。

「水城、ここでアンタのカードを使わせて貰うわよ？」

「ん、了解。それじゃ、リバースカード、カース・オブ・スタチュイーをオープンする。効果によりカース・オブ・スタチュイーは攻撃表示で特殊召喚される」

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・カース・オブ・スタチュイー (ATK:1800)

「Spell & Trap Zone」

Set: 4 3

俺の場に新しく闇の石像が現れる。中園のサポートは任せたぜ？
「バトルよ。まずはカース・オブ・スタチューでハイドロゲドンを攻撃するわ！」

カース・オブ・スタチューは中園の命令に従い、剣を構えてハイドロゲドンへと襲いかかる。

「くっ……ダメージステップにリバースカード、収縮を発動だ。カース・オブ・スタチューの攻撃力を半分にする」

……あれ、カース・オブ・スタチューの身体がどんどん小さくなっていくのだが？

「あら、やっぱり戦闘補助のカードだったのね。だからスタチューで攻撃したのだけど」

「んな……」

コイツ、カース・オブ・スタチューを囮として使ったのか……ひでえ、俺のモンスターは雑兵扱いか！？

「Life Point」

Team・A：7500 6800

「Monster Card Zone」

Open：10

・カース・オブ・スタチュー 破壊

「Spell & Trap Zone」

Set：10

中園の策略の犠牲となったカース・オブ・スタチューは、ハイドロゲドンに迎撃されて破壊されてしまう。……すまない、お前の死は無駄にしないからな！

「更にバッド・エンド・クイーン・ドラゴンでハイドロゲドンに攻撃よー！」

追撃するべくボロ布を着たドラゴンはハイドロゲドンに襲いかか

る。相手のリバーはもう無い、守る術を失ったハイドロゲドンは呆気なく破壊された。

「Life Point」

Team・B：6400 6100

「Monster Card Zone」

Open：10

・ハイドロゲドン 破壊

「バッド・エンド・クイーン・ドラゴンは戦闘でダメージを与えた時、効果を発動するわ！ 相手は手札を1枚選択して墓地に送り、私は1枚ドロー」

「ちい、次はハンドスか……」

ターンプレイヤーである男1は苦々しげに呟くと、少し悩んだ後に手札から1枚カードを選んで墓地に送った。

「Hand」

：3 2

・セイバーザウルス 墓地

：2 3

「Deck Top」

：霧の谷のファルコン

「捨てたのは……セイバーザウルス？ 何で通常モンスターが入っているのよ？」

「んなの俺に聞くなよ」

……だが何故だ？ 確かセイバーザウルスは恐竜族の下級モンスターの中じゃ攻撃力が高い方からデッキに入るだとか聞いた事はあるが。

「まあ考えても無駄ね。リチュア・ディバイナーでダイレクトアタ

ツク！」

「Life Point」

Team・B：6100 4900

「バトル終了。そしてメイン2で手札から禁止令を発動、私はブラックホールを宣言。カードを1枚セットしてターンエンドよ」

>Team・A<

夜一 & amp; 美憂

「Life Point」

Team・A：6800

「Hand」

：1

：3 1

「Monster Card Zone」

No Data

Open：2

・リチュア・デイバイナー (ATK：1200)

・バッド・エンド・クイーン・ドラゴン (ATK：1900)

「Spell & amp; Trap Zone」

Set：3

Open：3 4 Set：0 1

・天変地異

・デーモンの宣告

・強欲なカケラ

・禁止令 (ブラックホール)

「……すまない。大分ライフを削られた」

「気にするな、俺のターン」

「Hand」

: 5 6

「Deck Top」

化石調査

男2はデッキの上のカードを1枚手札に加える。さて、このライフ差をどう対処してくるか、だな。

「行くぞ！ 俺は手札からレスキューラビットを召喚だ！」

《レスキューラビット》

効果モンスター

星4/地属性/獣族/攻 3000/守 1000

このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

自分のデッキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「レスキューラビット」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「Hand」

: 6 5

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・レスキューラビット (ATK: 3000)

「……へ？」

ラビット？ 恐竜族じゃないの？ という俺達の疑問を他所に、

相手の場にマフ　フ装備の様な服を着たウサギがぴよんぴよん跳ねながら現れた。

「か、可愛い……」

「……中園ー？」

中園の様子が少し変だが、今はあのモンスターを警戒しなければならぬ。

レスキューラビット、ね……かつて猛威を奮った“レスキューキヤット”とカード名が酷似しているし、どんな効果なんだろう？

「その様子じゃコイツの効果を知らないようだな。俺はレスキューラビットの効果を発動！　このモンスター自身を除外する事で、デッキからレベル4以下の同名通常モンスターを2体、俺の場に特殊召喚する。俺が呼ぶのはセイバーザウルスだ！」

「Monster Card Zone」

Open: 1 0 2

・レスキューラビット 除外

・セイバーザウルス (ATK:1900)

・セイバーザウルス (ATK:1900)

「へえ……結構強いな」

だから通常モンスターが入っているのか。そう一人で納得していると、ウサギは場から姿を消して草食獣が新たに姿を現す。……中園が何だかがっかりしているが放っておくとしよう。

「ちなみにレスキューラビットの効果は1ターンに1度のみ使用でき、コイツ自体はデッキから特殊召喚することは出来ない。そしてこの効果で特殊召喚されたモンスターはエンドフェイズに破壊される」

成る程……レスキューキヤットの時の事を考慮して制約が幾つか増えている、と。それでも優秀な気がするけどな。

「そして、レベル4のセイバーザウルス2体をオーバーレイ！　2

枚のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!！」

男? がそう叫ぶと、相手の場に赤い魔方陣が現れ、セイバーザウルス2体は光となつてその魔方陣に吸い込まれた。

「……つて、エクシーズモンスターか!?!」

「んなつ!? 何とかしなさいよ!」

「そんな事言われても無理!」

不味い、エクシーズモンスターについては俺も詳しくないから、どんなモンスターが来るかわからない!

「エクシーズ召喚! 現れる、エヴォルカイザー・ラギア!！」

「Monster Card Zone」

Open: 2 0 1

・セイバーザウルス×2 オーバーレイ

・エヴォルカイザー・ラギア (ATK: 2400 ORU: 2)

「くっ……!」

そうこうしている内に、体の周りに炎を纏つた神秘的なドラゴンが相手の場に現れる。攻撃力は俺の持つホープよりやや低いが、効果が変わらないし下手に動くべきじゃないか。

「バトル! エヴォルカイザー・ラギアでリチュア・ディバイナーを攻撃だ!」

エヴォルカイザー・ラギアは翼を羽ばたかせると、此方に向かって突進してくる。

狙いはリチュア・ディバイナーか……コイツをやらせると後々辛くなるかもしれないし、守るとするか。

「ならこの瞬間にリバーストラップ、魔法の筒をオープン!」

《魔法の筒》
マジック・シリンダー

通常罠(準制限カード)

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「Spell & Trap Zone」

Set: 3 2

エヴォルカイザー・ラギアの攻撃を止めるべく、俺達の場に筒がくるくる回りながら現れる。

「このカードの効果は、相手モンスターの攻撃を中止させ、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「水城、ナイスよ！」

これが通れば俺達はリチュア・ディバイナーを守りつつ、相手に大ダメージを与えられる。後は相手さんがどうくるか、だな。

「なら俺は手札から禁じられた聖槍をエヴォルカイザー・ラギアを対象に発動！ 対象モンスターはこのターン、攻撃力が800下がりに、他の魔法・罠カードの効果を受けない！」

「……そうきたか」

《禁じられた聖槍》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は800ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

どうする？ このままでは魔法の筒は不発。しかもエヴォルカイザー・ラギアの攻撃力は800下がっても1600、厄介な事にリチュア・ディバイナーくらいは問題なく破壊できる。

「……仕方ないわね。伏せていた封魔の呪印を発動。手札の異次元の指名者をコストに、禁じられた聖槍の発動を無効にして破壊する

「わ

「ちっ……」

《封魔の呪印》

カウンター罠

手札から魔法カードを1枚捨てる。

魔法カードの発動と効果を無効にし、それを破壊する。

相手はこのデュエル中、この効果で破壊された魔法カード及び同名カードを発動する事ができない。

「Hand」

: 5 4

: 2 1

「Spell & Trap Zone」

Set: 1 0

・ 禁じられた聖槍 無効

「更に相手は、このデュエル中封魔の呪印を受けた魔法と同名カードを使うことは出来なくなるわ」

これで相手と同じカードを複数枚デッキに積んでいたら、それは死に札になったというわけだな。

「そして魔法の筒により、2400ポイントのダメージを受けて貰うぜ」

筒はエヴォルカイザー・ラギアの攻撃を受け止め、その威力は相手へダメージに変わり跳ね返っていった。

「ぐあっ!?!」

「Life Point」

: 4900 2500

「くそ……俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

>Team.B<

男? & amp; ; 男?

[Life Point]

Team.B:2500

[Hand]

:3

:4 2

[Monster Card Zone]

No Data

Open:1

・エヴォルカイザー・ラギア (ATK:2400 ORU:2)

[Spell & amp; ; Trap Zone]

No Data

Set:0 2

「いい流れだな。俺のターン、ドロ！ この瞬間に強欲なカケラにカウンターが一つ乗る」

[Hand]

:1 2

[Spell & amp; ; Trap Zone]

:強欲なカケラ (Counter:0 1)

[Deck Top]

:強欲で謙虚な壺

「俺はリチュア・ディバイナーの効果を発動する。強欲で謙虚な壺を宣言して手札へ」

「Hand」

: 2 3

「Deck Top」

: 停戦協定

「更にライフを500支払いデーモンの宣告の効果を発動。宣言するのは停戦協定、手札へ」

「Life Point」

Team . A : 6800 6300

「Hand」

: 3 4

「Deck Top」

: ブラックホール

「ふむ」

中園とタッグを組んでいるからか、何時もみたいな初盤の手札枯渴が無い。俺の罨モンスターで戦線維持して中園のカードでドロ―加速、封魔の呪印やアヌビスの裁きでお互いのカードも守れる。

そう考えると、俺達は結構相性いいのかもしれないな。中園をパートナーに、かあ……

「中園、後で少しいいか？」

「……何よ？ 改まって」

「大事な話がある」

「へ！？」

俺の言葉を聞くと、中園はすつとんきょうな声を上げる。心なしか顔が赤い気もするが、俺は何か不味い事でも言ったのか？

「まあ、とりあえず今はデュエルを終わらせるのが先決だな。俺は手札から強欲で謙虚な壺を発動！ 効果でデッキトップを3枚オープンする」

「Hand」

: 4 3

「Deck Top」

: ブラックホール

: マジック・プランター

: カース・オブ・スタチュー

「そうだな……マジック・プランターを手札に加え、カードを3枚セット。最後にリチュア・デイベイナーとバッド・エンド・クイーン・ドラゴンの表示形式を変更し、ターンエンド」

>Team.A<

夜一 & amp; ; 美憂

「Life Point」

Team.A: 6300

「Hand」

: 3 4 1

: 1

「Monster Card Zone」

No Data

Open: 2

・リチュア・デイベイナー (DEF:)

・バッド・エンド・クイーン・ドラゴン (DEF: 2600)

「Spell & amp; ; Trap Zone」

Set: 2 5

Open: 4

・天変地異

・デーモンの宣告

・強欲なカケラ (Counter: 1)

・禁止令（ブラックホール）

「Deck Top」

：激流葬

「また5伏せ……厄介な奴だな。俺のターン、ドロー！」

「Hand」

：3 4

「Deck Top」

：次元幽閉

天変地異だからわかる事だが、ドローしたカードはサイクロン、か。

「さて、今引いたカード……使うのが正しいと思うなら、使ってみな？」

「はあ？ んなの決まってるじゃ」

「止める、罠だ」

俺の簡単な挑発に乗った男1は、今さっき引いたサイクロンを発動させるため、前のターンみたくカードをデュエルテーブルに叩きつけようとする。が、寸前の所で男2に止められた。

「ライフを見る。あまり下手に動くべきじゃない」

「ぐ……だが、ハツタリかもしれないじゃないか」

「その可能性に賭けてリスクを負うのか？ 冷静になれ……これは、
“タッグデュエル”だ」

「……っ！」

ありや、仲間に助言を受けた男1はサイクロンを手札に戻している。そして大きく息を吐くと、ゆっくりり場を確認し始めた。

「（相手の場に伏せは5、何枚かはさつきみたいにモンスターになるヤツだろうな。後はカウンター……いや、召喚か攻撃反応型？」

なら（……お前のカード、使わせて貰うぜ？」

「その為に伏せたんだ。使ってもらわないと困るぜ」

「おう！ 俺は除外されているレベル5以下の獣族または鳥獣族：レスキューラビットを選択してリバース、ユニコーンの導きを発動！ 手札のサイクロンを除外し、レスキューラビットを特殊召喚する！」

《ユニコーンの導き》みちび

通常魔法

ゲームから除外されているレベル5以下の獣族または鳥獣族モンスター1体を選択して発動する。

手札を1枚ゲームから除外し、選択したモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。

「Hand」

: 4 3

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・レスキューラビット (ATK: 300)

「Spell & Trap Zone」

Set: 2 1

サイクロンはコストにしたか。まあ、これでカウンター罫を温存出来るから問題ないか。

だがそれよりも、またレスキューラビットが出てきたな。まだエヴォルカイザー・ラギアの効果が変わらない以上、下手に展開させるわけにはいかない。

「レスキューラビットが特殊召喚された瞬間、俺はリバースストラップ、激流葬をオープンする」

「ちよっ!?!?」

《激流葬》
げきりゅうそう

通常罾

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

リバースカードの一枚を発動させると、相手からではなく、何故かパートナーの中園から吃驚したような声上がる。

「……どうした」

「そんなことをしたら私のバッド・エンド・クイーン・ドラゴンが破壊されちゃうじゃない！」

「知るか！ ソイツは自己再生効果を持つてんだろぅが。それに、ここで一度フィールドをリセットした方が有利になるさ」

「しかし、俺達はそれを通しはしないぜ？」

「……何？」

男1の言葉に不信感を抱いた俺は、中園と言い争うのを止めてフィールドを見る。すると、俺の場にて映し出されていた激流葬のカードが粉々に砕け散った。

「なっ……！？」

「これがエヴォルカイザー・ラギアの効果！ オーバーレイ・ユニットを2つ取り除く事で、魔法・罾カードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれかを無効にして破壊する！」

《エヴォルカイザー・ラギア》

エクシーズ・効果モンスター

ランク4 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

恐竜族レベル4モンスター×2

このカードのエクシーズ素材を2つ取り除いて発動する。

魔法・罾カードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

「Monster Card Zone」

Open: 1

・エヴォルカイザー・ラギア (ORU: 20)

「Spell & Trap Zone」

Set: 5 4

・激流葬 無効

「へえ……厄介なモンスターだな」

つまり、反転召喚以外に対応したスペルスピード2の神の宣告、
てわけか。かなり強力なモンスターだ。

「そして、俺はレスキューラビットの効果発動！ 自身を除外し、
デッキからセイバーザウルスを2体、特殊召喚だ！」

再びレスキューラビットはフィールドから姿を消すと、デッキで
眠っていた残りのセイバーザウルス2体が出現する。

「またエクシーズする気が……なら、セイバーザウルスが出たタイ
ミングで俺は、2枚目の死霊ゾーマをオープンしよう」

「……は？」

「Monster Card Zone」

Open: 0 1

・死霊ゾーマ (DEF: 500)

「Spell & Trap Zone」

Set: 5 4

相手さん方が唾然とする中、俺の場に本日2体目の死霊ゾーマが
特殊召喚される。コイツはアタッカーにもなり、牽制にもなる優秀
なカード。

実際相手は死霊ゾーマが現れるなり、焦りの色を見せた。残りラ
イフが少ない彼らにとって見れば、コイツは厄介な存在でしかない

だろうからな。

「ぐ……なら、バトル！ セイバーザウルスで死霊ゾーマを攻撃だ！」

男1は苦しげにそう宣言すると、セイバーザウルスはプレイヤーの命令に従い自慢の角で死霊ゾーマを粉砕する。

「……そう来るか。ならこの瞬間、破壊された死霊ゾーマの効果が発動される。1900ポイントのダメージを、受けて貰うぜ？」

「ぐう……」

「Life Point」

Team・B:2500 600

「Monster Card Zone」

Open:10

・死霊ゾーマ 破壊

「そしてもう1体のセイバーザウルスでリチュア・ディバイナーを攻撃だ！」

「Monster Card Zone」

Open:21

・リチュア・ディバイナー 破壊

相手はここで出来るだけ此方の戦力を倒さねばならないから必死だ。だがバッド・エンド・クイーン・ドラゴンの守備力は相手のどのモンスターの攻撃力よりも高く、相手は此方のモンスターを全ては倒すことが出来なかったから苦しいだろう。

(……あれ？ 兄さん達いないよ？)

(うにゃ、ホントだ。ドコ行ったんだろ)

……ありや、葵とゆりなの声が遠くから僅かだが聞こえた。どうやらレジから戻ってきたらしいな。

「お……お二人さんはお買い物終わったらしいわね。結構時間経ってるけど、レジが混んでいたのかしら？」

「かもな」

だがそんなことはどうでもいい。結局デュエルに時間がかかってしまい、葵達が買い物終わらせた以上、彼奴等が此処に来るまでにデュエルを終わらせなくてはならなくなった。

「よし、俺はバトルを終……」

「残りライフは600、か。残念ながらタイムリミットだ」

「……は？」

「……何を言っている」

突然発せられた俺の言葉に、二人は目を尖らせる。そんなに睨まれてもな……

俺だって本当はもう少しタグデュエルの練習をしていたかったんだが、その為に葵達を待たせるのは面倒事が増えるだけだし仕方ないんだよ。

「さつき俺が手札に加えたカードを忘れたのか？俺はバトルフェイズ終了時に、リバーストラップ……停戦協定を発動！」

「……………うわ」

《停戦協定》
ていせんきょうてい

通常罠（制限カード）

フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にする。

この時、リバー効果モンスターの効果は発動しない。

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体につき500ポイントダメージを相手ライフに与える。

俺はおそらくエンドカードになるであろうリバーを躊躇い無く

を発動する。横から仲間の軽蔑したような眼差しが突き刺さるが気にしない！

「このカードの効果により、俺はアンタ等にフィールド上の効果モンスターの数×500ポイントのダメージを相手に与える……フィールド上に存在する効果モンスターは2体、よって1000ポイントのダメージを与えるぜ！」

「くっ……させるか。リバーズカード、神の宣告を発」

「あ、それは通さないぞ？ 魔宮の賄賂で無効にするから」

「「ぎゃあああああ！！！！？」」

「Life Point」

Team・B：600 300 0

「……え、こんなのあり？」

第二十四話 初タッグ、永続罨&永続魔法（後書き）

「今日のっ!」

「キーカードは」

「「こちらっ!」!」

《死霊^{じりょう}ゾーマ》

永続罨

このカードは発動後モンスターカード（アンデット族・闇・星4・攻1800/守500）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードが戦闘によって破壊された時、このカードを破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

（このカードは罨カードとしても扱う）

「……テンションについていけないのだけれど」

「さあそんな今回のゲストは、2回目の登場となる中園さんだ！
イヤッフー」

「にははは、よろしくお願いしますね。中園先輩」

「よ、よろしく。……何だか水城が壊れてるけど」

（……台本にそう書いてあるんだ、気にしないでくれ）

（あ……なんか、ごめんなさい）

「……さて、今回のキーカード、死霊ゾーマは俺が使用する畏モンスター の1体だ。効果は強力で、このカードを戦闘破壊したモンスター の攻撃力分のダメージを相手に与えるぞ」

「攻撃力も1800と高め、ただ発動時は守備表示でしか特殊召喚できないから、戦闘や自爆特攻するならエンドフェイズに使ってね！」

「壁として使う場合、守備力500しか無いから、攻撃力が低いチユーターなどに破壊されないよう、タイミングが大事だな」

「ちなみに今回まで出てこなかったのは、作者さんが持ってなかったかららしいわ。少し前に秋葉原で日版キズ有り150円、近くのショップで韓国版200円で買っていなければ、出さなかったとか」

「「おいおい作者」」

第二十五話 タツグ結成

「……よし、バーン軸だとこんな感じか」

昨日の夜、ウリアと毘モンスターの戦闘ダメージ以外でダメージを与えないと勝ち筋が無いかと思って試しに構築を変えてみたのだが、もう少し弄る必要があるそうだ。今は葵達の元に急ぐのが優先だが。

「そんじゃ中園、葵達の元に急ぐとするぞ」

「あ……ま、まちなさい！」

「ん？」

俺はデッキを片付けると、向かい側で何だが落ち込んでいる2人をスルーして葵達の元へ走ろうとする。が、後ろから中園に呼び止められた。

こんな時に何だろう？ 待たせると葵の機嫌を損ねる可能性があるため、内心で焦りつつ後ろを振り返る。……ん？ 中園は何故か妙に落ち着かない様子だな。

「どうした？」

「あ、アンタさつき大事な話があるとか言ってたじゃない？ ……仕方無いから、今聞いてあげるわよ」

そういつてぶいっ、と視線を反らす。あー、そう言えばそんな事をデュエル中に言ったっけ。

「ああ、その事か。……実は、突然の事ですまないが、俺のパートナーになって欲しいんだ」

「……ええっ！？ そ、そんないきなり……で、でもどうしてもって言うのなら……付き合っただけあげるわよ？」

「ほ、本当か！ ……これで、もう昼休みに佳苗さんに一々呼び出されずに済む。後は入学式までタツグデュエルの練習するだけだな！ いやー助かったー」

中園は突然の事に驚いたが、少し戸惑いながらも承諾してくれた。

実に有難い。

最近は佳苗さんが、まだかまだか、と五月蠅かったからな！。時間は有効にーとか何だとか！

しかしそれも今日をもっておさらばだ！　なんて一人で安心してると、中園は「……………へ？」と気の抜けたような声を上げた。

「タツグ、デュエ……………ル？」

そして少しの間が空いた後、啞然としながらそんな事を聞いてくる。それがどうかしたのだろうか。

「そうだが？」

「……………あ、アンタねえ」

そういつて中園は深々と溜め息をつく。俺は何か変なことでも言っただのか？

「（紛らわしいわよ……………まあ勘違いした私も悪いし、そのほうがアンタらしいけど……………）そ、それじゃ、早く二人の元に行きましょうか」

「んあ？　あ、ああ」

どうやら話が終わったのか、中園は早足で先に行ってしまう

つて、中園の荷物が置きっぱなしなんだが……………また俺に持たせるのかよお！？

「あ、兄さんと中園先輩！　どこ行ってたの？」

「なに、ちよつとな」

渋々荷物を担いでデュエルスペースから戻ると、葵とゆりなが俺達に気付くなり此方に走ってくる。良かった、心配させては無かったようだ。

「それより夜一さん！　早くパック開けたいから外行こー？」

「お、それじゃ先に外に行ってくれ。俺も買ったら行くからさ」

「了解っ！」

ゆりなは嬉しそうにビシィッ！　と敬礼のポーズを取ると、葵と

一緒にパタパタと走っていく。

パックを開けるのが余程楽しみなんだろうな、俺も開ける時は何が出るかとワクワクするからよくわかる。

「……慕われてるわね」

「んー、そうか？」

「そうよ」

俺は言われたことがよく理解出来ず考えていると、中園はふふつ、と笑ってそれだけ言い、外に向かってしまった。

く……どうやらからかわれただけみたいだ。なんか釈然としないが、とりあえず先ずはゆりなが待ちきれなくなる前にパックを買いに行かなくちゃな。

第二十六話 引き運

「いつせーの！」

「「「せつ！」「」」

無事にパックを買い終えて3人と合流すると、ゆりなの提案によって皆で一斉にパックを開封する事になった。

俺はパックを開けると、使う気は全く無いがレスキューラビットが出てきた。それにこっちは葵のデッキで使えるな。他は微妙……

あ、最後のカードが黒枠

欲しがっていた中園にバレたら不味いと顔をひきつらせていると、

「……水城は何か良いカード出たかしら」

「いや全く!？」

当の本人が少し落ち込みながらそんな事を言い出してきた。

その様子からして今回のお目当て……つまりは今俺が当てたエクスィズモンスターの類は出なかったようだ。そうなるとますますバレルの訳にはいかない。

「そ、そうだ。ゆりなは何か出たか？」

「にゅふふ、ボクは可愛いカードが出てきたよ？ ほら、バニーラ」

俺は気付かれないようにエクスィズモンスターを胸ポケットに仕舞うと、話を逸らした方が良さそうなので丁度横でカードを見ていたゆりなに話を振る。

するとゆりなは嬉しそうに一枚のカードを見せてきた。それはただの通常モンスターだったが、本人はご満足なようだ。

「しかも何故か3枚セット！」

「無駄にすぎえ！」

確かゆりなが買ったのは3つだったよな……それに一枚ずつ入っていたとなると凄い運だ。少しくらい中園に分けてやってほしい、俺の身の安全の為にも。

「他にデス・ウサギとか当たったし、ウサギデッキでも作ろうかなあ？」

なんて言いながら、ゆりなは俺の持っているカードをチラツ、チラツ、と見てくる。……どうやらレスキューラビットが欲しいようだな、まあどうせ俺は使わないから渡してもいいか。

「へいへい。ほらよ」

「わーい、ありがとー　それじゃあ代わりに……このカードをあげようっ！」

カードを渡してやると、ゆりなは嬉しそうに受け取って代わりに悪戯っぽい笑みを浮かべながら一枚のカードを俺に差し出してきた。何だろっ、嫌な予感が……って、王宮のお触れじゃねえかよ!?　こんなカードをわざわざサイドデッキから取り出して渡されても困るんだが!?

「どうしろと!?!」

「そりゃモチロン!　ボクからのプレゼントなんだし、メインデッキに入れてくれないとね!」

「何故自ら最大のメタカードを積まなきゃならない!」

俺のデッキの罨カードは基本30枚程度だ。なのに罨モンスターが消滅する、カウンター罨が無効になるなど、大半を無駄にさせるだけのカードなんて積むメリットが全く無い!!

そんな不毛な問答をしばらく繰り返していると、突然葵が少しムスツとしながら俺の袖を引っ張ってきた。どうしたんだろう?

「むう……兄さん達はいつまでコントを続ける気?」

「にやはは。ボクは満足したし、もういいかな」

「……そりゃ良かった。とりあえずコレは返す」

「えー」

ゆりなが不満げだがスルーだ。……まあ、なんだかんだ言っただもこういうノリは楽しいから好きだけだな。何でか葵が不機嫌になっているのが気になるが。

「んで、葵は何か目ぼしいカードは出たか?」

「うー……兄さんと見ようと思ったからまだ見てないっ！」

葵はそういつて頬をぷくぷくと風船のように膨らませる。

どうやら俺を待っていたらしいな。初めて買ったパックだし、早く見たくて楽しみにしていたはずなのに……

「悪かったよ葵。それじゃ、今から兄さんと一緒に見るか」

「あう!？」

そう言いながら俺は、謝罪の意味も込めて葵の髪を優しく撫でてやる。すると葵は突然の事に吃驚してピクツと震えるが、少しすると大人しくなつて静かにコクリと頷いてくれた。若干目を細めて気持ち良さそうにしているのが猫みたいで面白いな。

「あら、微笑ましい光景ね」

「にははは 葵、顔が真っ赤になつてる」

「ふ、ふえっ!？」

おー……二人にからかわれた葵の顔がみるみるうちに赤くなつていく……

俺はそんなあわてふためく妹の様子が可愛かつたので助け船を出さずに見ていると、葵は恥ずかしさに耐えきれなくなったのか俺達を無視してパックからカードを取り出していった。何か良いカードが出てくれたら良いな。

「……ん? 何このカード」

俺達に見守られる中、カードを一枚ずつめくっていた葵は最後のカードを見て首を傾げた。

ふむ、どんなカードか気になるし、見せてもらおうとするか。

「えとね、これ」

俺が横から覗き込むと、葵は何気なくそのカードをピラッ、と見せてくれる。……お、エクシーズモンスターだ。

「うにゃ! モンスター・エクシーズだ!」

俺が驚いていると、ゆりなは葵の当てたカードを見るなり食いつく。そういやコイツもエクシーズモンスターは手に入れてなかったんだっけ。

ちなみに俺がエクシーズモンスターを持つている事は二人には言っていない、かくし球としてとっておきたいしな。……って、いつの間にか中園が葵の当てたカードを見たショックで某人気ゲームのクエストリタイアみたいなポーズになってる!?

「アンタ達の引き運が羨ましい……」

「にははは、ボクのは運がいいのか微妙かと」

「確かに」

「何気に酷い!」

ありや、ゆりなのやつ自分から言い出しておいてショックを受けてるし。……っと、葵がゆりなや中園の反応にポカーンとしてしまっている。いや、主に中園の反応にか。

「……えと、皆どしたの?」

「ああ、葵はエクシーズモンスターの事は知らないもんな」

「うん」

そうだ、葵にルールを教えた時はまだ出たばかりだったし、俺とゆりなは持ってなかったから省いたんだった。あの時はとりあえず基本さえ覚えてもらえれば良かったからな。だが手に入ったし、アカデミアに入学するかもしれないんだ。流星に知っておかないといけないだろうし、教えるとするか。

「説明中……」

「……ってなモンスターだ。だから葵のデッキでもランクが合えば入るぞ?」

「ほえー」

そんなわけでエクシーズモンスターについて簡単に説明してやると、葵は新しく手に入れたカードが嬉しいのか目をキラキラ輝かせていた。

ふう……喜べる結果で良かった、これで中園の様に残念だったら可哀想だったからな。

「……話が終わったようだし、そろそろ帰るとしましょうか」

「ああ、それもそうだな」

言われてみると、辺りは日が沈み始めているため薄暗くなってきていた。周りを見渡すと家路につく子供達のがちらほら見える。帰るならいい時間だな。

「今日は楽しかったわ。次は、デュエルアカデミアで会いましょうね」

「……は、はい！」

中園の言葉に、葵は決心を込めて返事をする。今日の中園との出会いは葵に良い刺激になったようだ。

「にはは。まだ入学できるかわからないけど、なんて……無粋かな？」

「うん、かなり無粋だと思うから空気読もうな？」

「ふふつ、大丈夫よ」

「へ？」

ゆりなの言葉に中園が笑いながらそんな事を言った。言い切れる訳がわからない葵達は首を傾げる。此方を見るな、俺もわかってないから。

あえて予想するならそうだな……この流れで中園が言いそうな台詞なら、貴女達ならできるって信じ「今年は入学希望者が定員数より少ないらしいから」……え？

「ええええええっ!？」

第二十七話 入学式

「では、続いて」

「……………はあ」

あれから数週間経ち、俺が2年になってすぐ、待ちに待ったデュエルアカデミアの入学式を迎えた。

俺は今、中園と共に入学式で真つ最中の体育館にいる。

此処は大きさはそれほどもなく、形はドーム状で普段は体育やデュエルスペース、または今日みたいな行事に使われる。デュエルさえ除けば至つて普通のものだ。

強いて違う所を挙げるとすれば、この体育館には2階席がある。

佳苗さん曰く本校のデュエル会場をモチーフにしているとかで、集会や観戦などで生徒達が座る場所として設けられてあり、現在は入学生と在校生が大半を埋めている。

「……………ん？」

特にすることが無いためボーツとしていると、突然携帯が震えだした。画面を見てみると差出人には葵の名前が。

「兄さん、タッグデュエル絶対勝つてよね？」

観客席でゆりなと応援してるから！（へノ）

「ははっ、心強い」

「あら、葵ちゃんね」

そう……………結局、あの日中園が言った事は本当だった。どうやら前に佳苗さんが集会でぼやいていたらしく（どうかと思うが）、葵とゆりなは難なくアカデミア入学を決めることができた。

ああ、ちなみに成績は二人揃つてオシリスレッドだ。

試験当日、俺は佳苗さんにコキ使われていたため実施試験を見れなかったのだが、実施試験ではまずまずの結果らしいが筆記試験で

ゆりなは解答を一つずつずらし、葵は殆ど白紙のままとかで絶望的だったらしく揃って赤点だとさ。

「では、これにて入学式を終了します」

お……やれやれ、司会をしていた女性教師の一言により、入学式でお馴染みの長々とした退屈な行事がようやく終わったようだ。

上を見渡すと、在校生と新入生は少し姿勢を崩してリラックスし始める。長い間座りっぱなしは疲れるもんなあ……

まあ俺達は裏方で立ちっぱなしだからもっと辛かったりするが。

「それじゃ、次は皆さんお待ちかねの新入生と在校生によるタッグデュエルだよー！」

なんて考えていると、いつの間にか生徒達とは別に用意されていた席に大人しく座っていた佳苗さんが、マイクを片手に嬉々としながら壇上へと上がっていた。あの人も暇だったんだろうな。

「「おおー！！！」」

佳苗さんの登場に、期待に満ち溢れた新入生一同は元気な声を上げた。どうやら彼等はこれから行われるイベント　タッグデュエルがそれほど楽しみなようだ。

そんな生徒の反応に気を良くした佳苗さんは合図を出す。すると会場の照明が消されて中央にあるデュエルスペースがライトアップされた。あの中でデュエルするのか……結構楽しそうだが、

「……あー、かったりい」

あえて言わせてもらおう。俺は今、あまり乗り気ではない。

「皆が楽しんでいるのだからそんなこと言わないの」

「へいへい」

適当に返事をするが、俺の内心は変わりはない。

確かに周りは楽しみにしているだろう……だが、悪いが俺はそうでもない。タッグデュエルをするからとかではないんだけどな？

朝に面倒な事が

「先ずは在校生から、オシリスレッド2年の水城　夜一君と、オベリスクブルー2年の中園　美憂さんだよー！」

……っと、どうやら出番のようだ。面倒だが、ここまできてドタキャンは無理だし仕方無い。観念して会場へと向かうとするか。

「わーわー」

「ぶーぶー！」

佳苗さんの合図で俺と中園は会場に上がると、観客席から盛大な歓声や野次やらが飛んできた。まるでお祭りだな。

まあ、イエローやブルーの生徒や上級生からしたらオシリスレックかつ2年の俺がここにいるのが不服なんだろう。だが若干名、そこを代われ、とか叫んでる輩がいる……理由はわからんが、代われるならば是非とも代わって貰いたい。わりとマジで。

「お次に新入生から、今回の成績優秀者二名の登場です」

そうそう。このタッグデュエル、入学式の少し前に新入生からのデュエリストをくじ引きで選ぶのはボツになり、成績優秀者2名に変更された。まあ妥当だともうけどな。

そんな佳苗さんの呼び掛けに、真新しいブルーの制服を着た二人が緊張しつつ反対側の入口から会場に上がってきた。

「よよよ、よろしくです水城先輩っ!？」

「お、おう」

その内の一人の女の子は俺を見ると物凄い勢いで頭を下げ、もう一人の野郎は厳しい目付きで俺を睨みつけてきた。このデュエルに勝とうという意気込みが伝わってくるな……だが、俺は負けるわけにはいかなかったんだ。

なんでかって？ それを説明するにや、少し時間を辿っていく必要がある。まあ、とりあえず今言いたいのは

「それでは先輩……サヤが勝ったら、そ、その……お付き合いの件、よろしくですっ!」

うん、どうしてこうなった？

第二十八話 早朝のハプニング

「葵！ 早くしろっ！」

「まっ、まっ………すう」

「おきろーっ！」

冬の寒さから春の陽気へ変化し始めたと感じる明朝、俺と葵は新入生を祝福するよう綺麗に咲く桜にさえ目もくれずにデュエルアカデミアへと向かって走っていた。ちなみにゆりなには一緒に登校出来なくなつたと詫びのメールを入れてある。

何故走っているのか。

今日は入学式だ。だが、別に遅刻しそうだとか、既に遅刻しているとかではない。今は本来ならまだ余裕がある時間帯のはずだしなのになにこんな必死に、あの寝坊助の葵でさえ情眠を貪らず走っているには訳がある。

「………つたく、佳苗さんはこんな朝早くに俺達を呼び出して何だつてんだよ………」

そう。我らが校長、佳苗ティチャーだ。

朝っぱらから電話が来たかと思うと、いきなり、今すぐ葵ちゃんとかアカデミアに来ないと後悔するぜい？ とか言つて理由も教えずに切りやがった。

どうせいつもの悪戯だろうが、入学を認めてくれた件もあるし無視することは不味いだらう。最悪拗ねて職権乱用で無理矢理ブルーに昇格など（今までは一応思い止まってくれていたが……）何されるかわかつたもんじゃない。

「………あ」

「……………へ？」

そんな事を考えながら走っていたからか、曲がり角があるにも関わらず、注意せずに抜けようとしたのが不味かった。

同時刻

「ふあ〜……………こんな朝早くにサヤ達を呼び出して何なんですかにえ……………」

どもども、サヤは柚木 沙耶といいますです。

只今未だに重たい瞼を擦りながら、まだ慣れない通学路を歩きます。腕時計を見るとまだ入学式には余裕がありますが……………校長先生は何の用なんでしょう？

「さあね〜」

サヤの横でダルそうに返事をしたのは成井 白斗君。入学試験の日に知り合ったのですが、茶色くてボサボサの髪を後ろで適当に纏めた見た目で、やる気無さそうですが結構いい人です。試験の成績ではサヤより点数が少しだけ良かったとか！ ちよつと悔しかったり……………」

「そういえば柚木さんはどうしてアカデミアに？」

「ん、それはですね〜んふふ」

急な話題ですが、あの時を思い出して思わず笑みがこぼれてしまいます。成井君が何だか怪訝そうな顔をしています、せつかくなので話すとしましょう。

サヤはあの日の事を今でも鮮明に思い出すことが出来ます。そう、それはまだ中学1年生だったサヤが、父に連れられ初めて見に行つた真夏のシヨップ大会での事でした……………」

（残念だが、攻撃力は16000ポイントアップ。……………さあ、これで終局となる。モンスターに攻撃だ！！）

（そん、な……………ぐああああ！？）

「Life Point」

あの日の決勝戦。ライフはあと残り200対4000、手札はお互いに0。モンスターは相手のフィールドに一体のみ。それと王宮のお触れで無効化された3枚の永續罫。そんな絶望的な状況から、たったの一撃で逆転した人がいたのです。

そのデュエルにサヤは魅せられました。

そして、少し黒みかかった長めの銀髪、キリツとしていて何もかも見透しているような赤い瞳、デュエルを心から楽しんでいるあの笑顔……そのデュエルを魅せてくれた彼を、サヤは好きになっしまったのです！

「その後、サヤは大会がある度に行きました。デュエルは自信無かったので観戦しかしてませんけどね。あ、前回のチームデュエルの時は行けませんでした……」

「はあ……」

でも、自信が無いからって逃げてたらダメです。そこまでになっちゃいますからね。なのでサヤはデュエルが強くなるために、一生懸命頑張りました。いつかあの人とデュエルするため……

そんな時、あの人デュエルアカデミアに行くことがわかりました。

「そこで、サヤも来年にアカデミアに入学して後輩になれば……って、ま、待ってください！？ まだ話は終わってないです！」

いや、実際話はこちらまでですけど……

だからといって最後まで話を聞かないで行ってしまう成井君に怒りを感じ、サヤは一步先に踏み出しました。

「……あ」

すると突然、曲がり角から憧れの水城先輩が見えた様な

「きゃうっ！？」

「のわっ……と」

運が悪いことに突然曲がり角から現れた女の子にぶつかってしまった。まるで漫画のワンシーンだな、まさか俺が実際にこの様な体験をする事になるとは……

などと無駄な思考はすぐに止め、倒れそうだった女の子を反射的に抱き寄せた。

「すまん、大丈夫か？」

「……ふあ！？ あああ、あの、大丈夫ですっ！」

大事にはなっていないだろうが一応聞くと、女の子はそういつて俯いてしまう。咄嗟のことだから少し強引に引き寄せてしまったんだが、どうやら怪我はしていないようだ。ふう……よかった。

この子は葵と同じ年くらいだろうか。右の方に小さなポニーを垂らした朱色のショートヘアに翠色でくりっとした人懐っこそうな大きな瞳、葵と同じくらい小柄の子だ。そして青色の真新しいデュエルアカデミアの制服を着ている。どうやら新入生のような。

「本当に悪かった、怪我は無いんだな？」

「は、ひゃい……！」

「噛んでるし」

もう一度謝りながらゆっくり立たせてやると、女の子はペコリと頭を下げ、何故か目をキラキラさせながら俺を見ていた。今気がついたが横にもう一人新入生らしき男子もいるな……こいつもブルー、ね。

「なあ、お前達は」

「に、兄さん、まって……あう」

「葵……やれやれ」

「こんな朝早くにどうした？」

そう聞こうとすると、葵がいつの間にか遅れたのか、後ろから走ってきた。途中で体力が底を尽きたんだろう、足がフラフラしている。……仕方無い。悪いがお二人さん、俺達は急いでいるからまた今度」

「はいっ、せひせひ……！」

そう言つと少女は嬉しそつに頷き、少年は何も言わず頭を下げた。
……とは言つたものの葵はもう走れそつにないな。さて、どうしま
すかね。

「兄さん、おんぶー……」

「えー……」

葵……兄さん、その発想は無かつたよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8240s/>

遊戯王 罪を背負いし男と蒼き少女

2011年12月23日01時50分発行